



アクセル・ワールド14  
激光の大天使

川原 礫

電撃文庫



ア  
ー  
ル  
ド

ア  
ク  
セ  
ル

14

激光の大天使

川原 礫  
イラスト HIMA

accel world 14

「……」  
「……」  
「……」

電撃文庫



アクセル・ワールド14  
激光の大天使

川原 礫

電撃文庫

20th  
電撃文庫

# アクセル・ワールド

14

激光の大天使

川原 礫  
イラスト/HiMEA

accel world 14

レジェンド  
《神獣級》  
エネミー

大天使  
《メタロン》

直接  
対決!!

《最強のカタルシス》で贈る、  
次世代青春エンタテインメント!

特製グッズ大プレゼント実施中!

年間1万名に当たる! 詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

20th  
大感謝プロジェクト  
電撃文庫



9784048916080



1920193005707

ISBN978-4-04-891608-0

C0193 ¥570E

ASCII  
MEDIA  
WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 570 円

※消費税が別に加算されます



## アキセル単巻⑫ れき

かわはら れき  
川原 礫

10年ぶりくらいに引っ越し熱が高まっています。荒川の土手に引っ越したい！そして毎日自転車に乗ったりブラックバスを釣ったりセイタカアワダチソウを愛でたりしたい！

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～14

ソードアート・オンライン1～12

ソードアート・オンライン プログレッシブ1

イラスト:HIMA

10月3日生まれ。挿絵は今シリーズが初のイラストレーター。『電撃魔王』小冊子への寄稿を見た文庫編集者が、今回の挿絵依頼をオファーしたことがきっかけ。本業仕事の合間を縫って、ブログやSNSサイトなどでイラストを発表している。



# アクセル・ワールド

激光の大天使

川原 礫

イラスト/THM

デザイン/ピカ

《アクア・カレント》アキラ 《アッシュ・ロ

ーラー》リンの救出作戦、始動——！

《シアン・ハイル》

タクム

《シルバー・クロウ》

ハルユキ

《ライム・ベル》

チユリ

《ブラッド・レパード》

パドさん

《ブラック・ロータス》

黒雪姫

《スカイ・レイカー》

フーコ

《アーダー・メイデン》

ウタイ

《スカーレット・レイン》

ニコ

「――妾の傷は、  
そなたらの痛哭で癒すとしよう。  
捧げよ。重ねた時の精華を」

「……振り切る……」

## セイリュウ

《帝城》東門を守護する  
《四神》の一柱、超級エネミー

「――来るぞ!!  
《レベルドレイン》だ!!」

「あれが、《セイリュウ》……!!」

## メタトロン

《加速研究会》の本拠地を守護する  
《大天使》、神獣級エネミー

「あ、あれは……  
まさか……!」

# アクセル・ワールド 14

## 激光の大天使

川原 礫  
イラスト/HIMA  
デザイン/ビィビィ

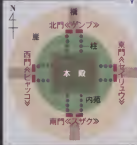


### 《加速世界》の《軍団》分布MAP



#### 《帝城》

現実世界では「皇居」に位置する。《帝城》には、東西南北に一つずつ城門がそびえており、四つの門は、最奥中の最奥と目される、四区の《超激》エネミーにそれぞれ守護されている。《西神(しじん)》と呼ばれる今のエネミーたちは、《神限(レジェンド)風》エネミーのさらに上をいく強さを誇る絶対的なステータスを持つ。すなわち、北門の《ガンブ》、南門の《スザク》、西門の《ビヤッコ》、東門の《セイリュウ》である。《スザク》の南門では、かつては《アーダーメイダン》が《無限エネミーキル》によって困われの身となっていた。《データファイトエッジ》も、《ガンブ》の北門にて同じく困われの身となっているようだ。現在《ネガ・ネビュラス》一同は、《セイリュウ》の東門に困われた《データ・カレント》を救助に動いている。







勢い余って突入してしまつた一部始終はもちろん鮮明に記憶している。何せ、内部にはとんでもなく強そうな衛兵エネミーがひしめき、仮に脱出方法が見つからなければ二人は捕縛して疑似的無限JKに陥る瀬戸際だったのだ。

帝城内での探索行は休息時間も含めれば丸々ひと晩に及び、その間にハルユキは諸といろいろな話をした。ゆえに、あれから十二日が経過するいま、誰かどのやりとりを想起しているのか特定する材料は――

その時、足許の板が激しく揺れ、ハルユキは翼を少しだけ広げてバランスを取りつつ左手でメイデンの背中を支えた。巫女アバターがべこりと頭を下げると同時に、前方からスピーカー越しの音が響く。

「ワリ、道路にでつて穴開いててさ！ 誰か落っこちなかったか？」  
「NP」

と答えたのは、ハルユキたちの反対側に陣取る深紅の豹頭アバター、ブラッド・レバード。他の同乗者たち――黒の王ブラック・ロータス、その副長スカイ・レイカー、シアン・バイル、ライム・ベルの四人も、背筋をびんと伸ばして進行方向を見詰めている。

ハルユキたちネガ・ネビュラスのメンバーと、赤のレギオン「プロミネンス」副長パドさんの合計七名を乗せて世紀末ステージの道路を爆走しているのは、十二個ものタイヤを持つ大型装甲トレーラーだ。

トラクター部前面に四連装の機関砲、トレーラー部（ハルユキたちが立っている場所）に多連装ミサイルポッド、そして左右側面に大口径レーザー砲を備えた物騒な乗り物のコクピットには、プロミネンス頭首たる赤の王スカレット・レインが収まる。つまりこのトレーラーは、加速世界に（不動要塞）の二つ名を轟かせる赤の王の強化外装（インピンシブル）が変形した姿、というわけだ。

赤の王のボイスコマンドによれば（ドレッドノート）という名称のトレーラーは、約五分前に杉並エリアの梅郷中学校を出発し、現在は中野第二エリアの裏道をひた走っている。最初の目的地である帝城東門に向かうには、青梅街道をひたすら東進して山手線を潜つたところで新宿通りに入り、御苑前、四谷と経由して内堀通りが最短ルートだが、無制限フィールドの幹線道路には巨獣級エネミーが巡回しているのだ。

もちろん、王二人を含むこの陣容ならば、巨獣級であってもさして手聞取らず倒せるだろう。しかし問題は、移動経路の大部分が青のレギオン（レオニズ）の支配地域にかかっていることだ。万が一、彼らのエネミー狩りパーティーと出くわしてしまえば、間違ひなく笑顔で素通りはさせてくれるまい。

そんな事情で、大型トレーラーは広い青梅街道を避けて走行中なのだが、世紀末ステージの道路はアスファルトが陥没していたりドラム缶が転がっていたりとお世辞にも綺麗とは言えない。裏道には路面の障害を回避するスペースがないため派手に揺れるが、むしろ一度も

立ち往生したり建物に衝突したりせずに走り続けるニコのテクニクを賞賛するべきだろう。  
トレーラー最後部に語と並んで立つハルユキは、そんなことを考えながら無制限ワールドの空を見上げた。濃密な黒雲が分厚く垂れ込めているが、時折わずかな隙間に星の輝きを見つけれられる。加減世界の星図は現実世界のそれを完全に再現しているため、六月の今は東の空の低いところにある大三角が光っているはずだ。

そういえば、ハルユキがそれを知ったのも、諺と一緒に帝城に閉じ込められている間だった。身動きできずに座り込むハルユキに、語は小さな手でひこ星——アルタイルを指し示し、初期のバーストリンカーたちもこうやって星空を見上げたことや、主要レギオンの名前が宇宙に關係していることを教えてくれたのだ。

ネガ・ネビュラスは《暗黒星雲》。プロミネンスは《太陽紅炎》。レオニーズは《獅子座流星群》。

無事に帝城からの脱出に成功したのちにハルユキが自力で調べたところによると、緑のレギオン《グレート・ウォール》の名前は、地球から二億光年離れたところにある、無数の銀河が集まって形作られている壁を指す言葉らしい。同じく紫のレギオン《オーロラ・オーバル》は、地球の両極を取り巻いて存在する、楕円形のオーロラ多発エリアを指す言葉。黄のレギオン《クリプト・コスミック・サーカス》だけは、ひねくれ者のイエロー・レディオらしく、現実の宇宙用語とは関係しないネーミングのようだった。

そして、白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》の名前は、日本語では《振動宇宙》と訳される。

ハルユキには、この言葉が最も難解だった。振動宇宙論というのは、百年近くも昔に唱えられた理論で、簡単に言えば「宇宙は膨張と収縮を繰り返す」という内容だ。膨張が、ハルユキもよく知っているビッグバン。対して収縮を、ビッグクランチと呼ぶ。宇宙は、何百億年もの周期でビッグバンとビッグクランチを、つまり創造と破壊を繰り返して、地球や天の川銀河を含む現宇宙もいつかは小さな一点に収縮して消える。という主張なのだが、実はこの振動宇宙論は、とうに否定され消えてしまった理論らしい。

ならば、《膨張・収縮》なる二つ名を持つ白の王ホワイト・コスモスは、いかなる意図によって消えた理論の名を白のレギオンに与えたのか。

さすがにそこまでは、ハルユキの理解の及ぶところではなかった。もしかしたら、白の王の妹である黒雪姫ならば知っているのかもしれないが、とても気軽に訊くことはできない。

白の王こそは、黒雪姫を巧みに操って初代赤の王レッド・ライダーを全損せしめた当人であり、黒雪姫が現在阿佐ヶ谷住宅のタウンハウスで一人暮らししているのは、姉への怒りと憎しみが昂じて引き起こしてしまった家庭内事件が原因だからだ。

それらの事情を黒雪姫から教えられたのは、もう三日も前のことになる。放課後の生徒会室で二人きりになった時、彼女は悲愴な声と表情で語ったのだ。純色の七王たちのレベル9到達

に始まり、最終的に第一期ネガ・ネビュラスの崩壊へと至る、凄絶な物語を。

二日前の金曜日、倉崎楓子と一緒にハルユキの家に泊まりに来た黒雪姫は、すっかりいつもの彼女に戻っているように見えた。昨日の領土戦も、今日の文化祭でも、特に変わった様子は感じられなかった。

だが、本当は、そんなはずはないのだ。黒雪姫の心の水面は、まだ不規則な波紋を描き続けているに違いない。なぜなら、黒雪姫を動揺させた直接の原因——ハルユキが世田谷エリアで入手した「ISSキット封印カード」に刻まれたレッド・ライダーの紋章の謎は、いまだ解かれていないからだ。

ハルユキは夜空から視線を戻し、トレーラー中央部に立つ黒の王ブラック・ロータスの細い背中を見詰めた。

他のメンバーが、車体の振動に合わせて小刻みに体を揺らす中、浮遊能力を持つ黒雪姫だけはほぼ静止状態を保っている。腕を組み、両足をびたりと揃える彼女は、まるで自身が一本の黒い剣であるかのような。そんな後ろ姿に、ハルユキは鋭利に研ぎ上げられた刃の強さと、そして脆さを同時に感じずにはいられない。

黒雪姫がこの作戦に期するものは、おそらくトレーラーに乗っている八人の中で最も大きく、重いだらう。第一目標の、帝都東門で無限EK状態に陥っているアクア・カレントの救出。

第二目標の、東京ミッドタウン・タワーに秘匿されるISSキット本体の破壊。どちらも、二

年十ヶ月前の出来事に直結している。

カレントとはすでに現実世界で再会を果たし、入念に情報交換を済ませているため二つの作戦に求められるのは決意だけだが、二つ目の作戦には大きな不確定要素が残っている。すなわち、ISSキットと初代赤の王レッド・ライダーの関係。《交差拳銃の紋章》の謎が未解明のうちは、ミッドタウン・タワーでは何が起るか判らない。もしかしたら、塔を守護する神獣級エネミー、大天使メタトロン以上の障害が現れるかもしれないのだ。

でも。

ハルユキは石拳を強く握り、心の中で誓った。

たとえ何が起きたって、僕は黒雪姫先輩を守る。先輩だけじゃない……タクも、チュも、楓子師匠も、四壁宮さんも、カレンさんも、バドさんも、そしてニコも守ってみせる。だってみんなは、輪さんとアッシュさんを助けたっていう僕の頼みに、ひと言の反対もせず協力してくれたんだから。絶対にISSキット本体を破壊して、みんなと一緒に現実世界に帰るんだ。それで、輪さんやバドさんやニコを、ちゃんとカレンさんや四壁宮さんにも紹介して、みんなで文化祭の続きを……。

「あ……………」

「ここでもうやくハルユキは、謎の『憶えていますか』という質問が、何を指していたのかを悟った。すぐ傍に立つアード・メイデンに眼を向けると、小柄な巫女アバターはそれだけで

ハルユキの内心を見抜いたらしく、微笑みの気配を漂わせながら言った。

「思い出して頂けましたか、クーさん？」

「う、うん。僕、帝城でメイさんに言ったよね……紹介したい友達がいる、って」

「そのとおりなのです」

こくりと頷いてから、誰は視線を前方——トレーラーの背面からは直接見えないコクビットへと戻した。

「あの時クーさんが仰ったお友達さんとは、赤の王スカーレット・レインさんのことだったのですね」

「うん」

顔を返しながら、十二日前の記憶を辿る。

帝城本殿への侵入に成功し、板張りの廊下を歩いている時、ハルユキは誰に向けて確かに言った。帝城から脱出できて、色々な問題が全部解決したら、紹介したい友達がいるんだ、と。ちよつと生意気で乱暴なところもあるけれど、すごくいいヤツだから、きつと四葉宮さんともいい友達になれる、と。

だが、ハルユキは当時、その言葉を最後まで言い終えることができなかった。突然の予感に襲われてしまったのだ。自分が口にしたことは、きつと実現しないだろう。誰にニコを紹介する前に、何らかの破局が訪れるだろう、という。

その予感はしかし、結局のところ、ただの取り越し苦労だった——はずだ。

帝城脱出から四日後となる今月の二十四日に、ニコと誰は有田家で開催されたカレーパーティーの席上で対面し、少しではあるが言葉を交わしている。会合の主目的がハルユキの《理論鏡面アビリティ》習得訓練だったためにあの時は憶えだしく無制限フィールドに移動してしまっただけ、今日の作戦が終わってからもう一度やり直せばいい。ニコとバドさんと輪を裏庭の飼育小屋に案内して、誰と、それにホウを改めて紹介するのだ。

そう心に決めてから、ハルユキは再び誰に語りかけた。

「……でも、考えてみたら、僕が引き合わせるまでもなく、ずっと昔にメイさんはニコ……レインと知り合ってたんだよね。昔の、ネガビュとプロミの領土戦で」

「ええ。でも、戦場でご挨拶できたのはたつた一度でしたし、もちろんリアルではお会いしたことはなかったですから……クーさんが、レインさんを紹介して下さるのはとても嬉しいのです。赤系どうし、きつといいお友達さんになれるのです」

「うん。きつと……きつと」

半ば自分に言い聞かせるように答えて、ハルユキは顔を返した。

轟音を響かせて爆走するトレーラーの前方右側、半壊した建造物群の奥に、ひときわ巨大なビルが姿を現しつつある。特徴的な双塔のシルエットは、東京都庁舎に間違いない。高さ五百メートルにも達するビルの先端は、うねる黒雲にすっぽり覆われている。

時によれば、無制限フィールドの都市最上階特別展望台には青の王ブルー、ナイトの玉座が常置されているらしい。もちろん王がいつもそこに座っているわけではないが、いまハルユキが見上げるビルの大迎から、ニコが「オリジネーター」と呼んだレベル9の境界を睥睨している可能性も〇・〇〇〇パーセントくらいはある——のかもしれない。

本来のスケジュールでは、ミッドタウン・タワー攻略作戦は、数日中に開かれる第四回の七王会議を経て次の週末に行われるはずだった。攻撃部隊は全レギオンから選りすぐった精鋭で組織され、そこにはブルー・ナイトやグリーン・グラデたちすら参加したかもしれず、戦力はいまトレイラーに乗っているメンバーにアクア・カレントを加えた九人とは比べものにならない規模となっただろう。

しかし、出撃前に黒雪姫が言ったとおり、七王会議の情報は「四眼の分析者」アルゴン・アレイを通して加速研究会に簡抜けになってしまいう可能性もある。当然、研究会のほうも得意の腕を十重二十重に仕掛けて攻撃隊を待ち受けるはずだ。大部隊による正面からの攻撃が、必ずしも最上の戦略だとは言えない。

逆に言えば、今日の突発的な攻略作戦を成功に導くためには、「奇襲」と「速攻」の両方を完璧に決めねばならないということだ。加速研究会が攻撃に気付く前にメタトロンを無力化し、速やかにミッドタウン・タワーに突入して、ISSキック本体を破壊する。

作戦で重要な鍵となるのが、ハルユキの習得した「光学誘導」アビリティだ。当初目

指していた「理論鏡面」とは似て非なる力が、メタトロンの即死級レーザーに適用するか否か。それが、作戦全体の成否にも直結する。

念を入れるなら、本書前に「インビンシブル」の主砲を撃ってもらい、反射できるかどうか試すべきかもしれない。だが、そこで失敗しても修行をやり直している時間などないし、ニコのレーザーを弾けたからといってメタトロンのレーザーも同じように弾ける保証もないのだ。事ここに至れば、疑うよりも信じるべきだ。自分を——そして、ハルユキのアビリティ習得を一生懸命手伝ってくれたチユリや諒たち、大切な仲間を。

トレイラーは都庁の北側を通り過ぎ、裏道から靖国通りに合流した。すぐに、新宿駅北側の大ガードが見えてくる。山手線の高架を渡るアンダーパスに、巨大な装甲車両は地響きを立てて近づいていく。

「……あ、やべ」

不意にスピーカーからニコの声が聞こえ、すかさず黒雪姫が訳し返した。

「何がやばいんだ、赤の王」

「いやあ、あの線路、ぎりぎり潜れそうだなーと思ったんだけどさ……ぎりぎりってことは、上に乗ってるアンタらのぶんのスペースが……」

「……………」

一同、黙り込みつつ行く手に迫る大ガードを凝視する。確かに、路面から高架橋までの高

さは、車体だけなら何とか通り抜かれそうだが、屋根上の乗客七人はどう考えても鉄骨に頭をぶつける……だけでは済むまい。

「こ、こら、そうと気付いたら停まればいいだろう！」

状況を理解した黒雪姫が声を張り上げるが、十二個の車輪が回転を緩める気配はない。轟き続ける走行音に、ニコのあっけらかんとした応答が重なる。

「いやー、それがさあ、ブレーキついてねーんだよねこのクルマ」

「な……なににイ？」

「ついわけで、ロータス、任せた。通信終わり」

「終わり、じゃない！ ブレーキのない車など、ええと……あ……」

咄然にうまい囁えが出てこないらしい黒雪姫に、隣の様子を車椅子の上からのんびりと必死に注視する。

「恋愛はブレーキのない車のようなもの、と言っただけで逆の比喩は難しいわね」

「……どうしてそんなに余裕たっぷりなんだ、レイカー」

「あら、私はいざとなればゲイルスラスタアがありますから」

「そ、それはちよつとするいぞ！」

レジオンマスターとサブマスターが交わす会話をハラハラしつつ聞いていたハルユキは、そこでつい「なるほど僕も飛べばNP」などと考えてしまったが、さすがに一人だけ上空に逃亡

するわけにもいかない。そうこうしている間にもトレーラーは大ガード手前の下り坂に入り、更にスピードを増しながら鋼鉄の橋梁、目掛けて突き進んでいく。

その時、毅然とした声が響いた。

「任せて下さい、マスター！」

数歩前に出たのは、青葉の重装甲に身を包むシアン・パイル——タクムだ。右腕の強化外装「杭打ち機」を構えながら、続けて叫ぶ。

「こんなこともあろうかと、必殺技ゲージを満タンにしておきました！ 行きますっ！ ——

（ライトニング・シアン・スパイク）！！」

強化外装の射出口から覗く鋼鉄の杭が、青白い光の槍となつて一直線に撃ち出された。超高温のプラズマは、赤錆に覆われた高架橋の鋼材を瞬時に貫き、直径十センチほどの孔を穿つてそのまま東新橋の空へと消えた。

現象としては、それで全てだった。高架橋は、崩れも吹き飛びもせず行く手に存在し続けている。パイルのレベル4必殺技（ライトニング・シアン・スパイク）は、貫通属性と高熱属性を併せ持つ強力な技ではあるが、威力が一点に集約されるために、構造が複雑なオブジェクトを撃つとエネルギーの大部分が後方に突き抜けてしまつて大規模破壊を引き起こしにくいのだ。

——と、いうことなんだろうなあ。

ハルユキがそう推測し、タクムが愕然と立ち尽くし、チユリが慰めるようにその左腕をぼん

と叩いた。

少し遅れて黒雪姫が深々と頷き、重々しい口調で言った。

「いや、まあ、パイルの頑張りを見物にはしないさ。あとは私に任せろ」

腕組みをしたまま、トレーラー最前部に移動する。そこに陣取っていたバドさんを入れ替わり、右脚の剣をすうっと持ち上げる。高架橋までの距離は、もうわずか五メートル、三メートル……

「――(デス・バイ・バラージング)」

技名発声と同時に、黒の王の右脚が円錐形の影へと変じた。実体を失ったわけではなく、凄まじいスピードで蹴り技を放ち続けているのだ。秒間百発にも及ぶ連撃は、ハルユキの眼でも到底捉えきれない。

直後、トレーラーのコクピット部が高架橋下に突入し、エッジで鋼材を擦って火花を散らした。橋桁はそのまま黒雪姫に激突する――と見えた瞬間、無数の金属片へと分解されて左右に飛散した。

ブラック・ロータスの右胸が、シアン・パイルによって開けられた孔を拡張するかの如く、鋼鉄の橋桁を掘り進んでいく。火花も騒音も思いのほか小さく、まるで金属ではなくペーパーラフトを裁断しているかのようだ。

トンネル掘削機と化した黒の王の背後にバドさんが身を屈めたので、残り五人も慌てて立て

膝で――飄子は車椅子に座ったまま――一列に並んだ。トレーラーは三秒足らずで大ガードを通過し、山手線の東側へと抜ける。最後尾のハルユキが振り返ると、鋼鉄の橋桁には直径一・五メートルはあろうかという大穴が穿たれていた。

「……ローねえの足技は、相変わらずおつかないのです」

前にしゃがみ込む諷刺がばそりと言ったので、ハルユキも小声で付け加えた。

「いやあ、手技も充分コワイよ……」

その黒雪姫は、悠然と右脚を下ろすと、再びトレーラー中央に戻った。少しばかりしょんぼりした様子のタクムに、咳払いしてから声を掛ける。

「ンン……パイル、そう気を落とすな。アバター属性にマッチした力を伸ばすべきだと教えたのは私だしな、君の技の貫通力が皆を助ける場面もきつとある」

「え……ええ、それは解ってるんですが……もう少し攻撃力の幅を広げてもいいんじゃないかと、この頃は思ったりも……」

「難しい問題ね」

穏やかな声を発したのは飄子だった。車椅子を少し前進させ、黒雪姫に並んでから発言を続ける。

「万能型と特化型のどちらを目指すべきか。それは加速世界の最初期から議論され続けてきたテーマであり、七年以上が経つ今も答えは出ていません。正確には、レギオンによって答



えが通う、と言っべきでしょうか。わたしたちネガ・ネビュラスの方針は「迷ったら特化！」ですが、オーロラ・オーバルやCCCあたりには万能型アバターも数多く存在します。——ちなみに、プロミネンスの方針は……」

「決まってるだろ、特化特化！」

スビーカー越しに響いたニコの喚き声に、一同きもありませんと頷く。赤の王スカーレット・レインと言え、遠距離火力特化型アバターの代名詞的存在だ。トレーラー前部に座っている副長のブラッド・レバードも、赤系ながら俊敏さと咬み付き攻撃に特化している。

その時、今度はチユリが「はいはい——」と右手を挙げた。

「でもさー、あんまり特化しすぎると、相性悪いステージ引いた時点で勝ち目なくなっちゃう時もあるでしょ？ 極端なこと言えば、火炎攻撃特化アバターは、水中戦オンリーの《大海ステージ》じゃ何もできないとか……。それはちよつとどうなのかなーって、あたしも思うんだけど……」

「普通に考えれば、その通りね」

微笑みを浮かべたまま、楓子はチユリの言葉をあつさり肯定した。ハルユキの隣に立つ諺に視線を向け、続ける。

「たとえばアダー・メイデンは、ネガ・ネビュラスでは最も遠距離火力に特化したデュエルアバターです。それゆえ、水系ステージとは相性がいいとは言えない。主武器である火矢は、

水中はもちろん豪雨の中でも消えてしまいきますからね。メイデンも、レベル4や5の頃には、彼女なりの壁に突き当たっていたはず……そうよね、メイ？」

問われ、諺はこくりと頷いた。注目を浴びたせいか恥すかしそうに肩を縮める小柄な巫女に、温かい眼差しを注ぎながら空色のアバターは語った。

「……ですがメイデンは、別属性の力を求めようとはせず、ひたすら自分の力を磨き続けた。

そして、デュエルアバターもその意志に応えた。メイ、今のあなたが生み出せる最強の炎は……もちろん普通の必殺技ですよ……《大海》ステージの海を、何メートル射貫けますか？」

「えと……たぶん、三十メートルくらい、なのです」

はにかみながら小声でそう答えた諺に、ハルユキ、タタム、チユリの若手三人は暗然と眼を見開いた。しばらくしてから、タタムが信じられないというように訊ねた。

「……メイデンさん、それはつまり、水中で発射した火炎攻撃が三十メートルも消えずに届く……ということですか？」

こくり。無言で頷くだけの諺に代わって、黒雪姫が口を開く。

「私がかつて見た時はその半分の射程だったと記憶しているが……精進を続けていたんだな、メイデン。水を真つ白に泡立たせながら海中を突き進む炎は、それは綺麗なものだったよ」

「わあー、あたしも見たいー！ 次の《変遷》で大海ステージにならないかなー！」  
チユリの無責任なはしゃぎ声に、コクビットのニコが慌てたように叫んだ。

「おい、妙なオネガイすんなって！ せっかくのトレーラーが水没しちゃうだろう！」

「NP。戦艦モードを開発すればいい」

というバドさんの切り返しに、皆が朗らかに笑った。

それが取まったところで、タクムが納得したように深く頷いた。

「解りました、マスター、レイカーさん。つまるところ、自分のデュエルアバターをどれだけ信じられるか、ですよ。ほくも、自分の心が生み出したこのシアン・バイルを最後まで信じます。……ハルト、大事な約束もしますから」

半ば自分に向けたような、最後のひと言に込められたタクムの意志は、ハルユキにも強く伝わってきた。

五日間、ウルフラム・サーベラスとの初対戦に完敗して訪れたタクムの部屋で、ハルユキは親友と約束したのだ。レベル7に——ハイランカーと呼ばれる上級者の入り口に到達したら、互いのありつたけをぶつけ合う真剣勝負をしよう、と。

まだレベル6にすら達していない二人には遠い話だが、それは片時も忘るまじき誓いである。なぜなら、加速世界でのあらゆる戦い、あらゆる経験が、いつか来るその時に直結しているのだから。

ハルユキは一歩前に出ると、勢い込んで言った。

「そうだな、タク。このシルバー・クロウだって飛行能力の一点特化型もいいところだけど、

今更（いまさら）こいつを万能型にしようとは思わないよ。俺たちのデュエルアバターは、システムに与えられたゲームキャラじゃなくて……」

「……ぼくたちの分身なんだからね」

ぐっと深く頷き合う二人に、チユリが少々気味悪そうな視線を向けつつ問い質した。

「……………何なのよ、あんたたちの大事な約束って？」

「ええと、ごめんよチーちゃん、これは……」

「男と男の約束は、はいはい言いつらさないモンなんだよ！」

胸を張って叫んだハルユキを一目遣いにじろりと睨み、三人目の幼馴染は疑念たつぷりの声を出す。

「あんたたちの内緒事って、大抵ろくでもない事件に発展しちゃう気がするんだけど」

「ん、んなことねーよ！ 大ごとになったことなんか、これまでになーと……」

アレとアレと、アレに、アレもか……と右手の指を折り続けるハルユキを見て、女性陣は一様にやれやれと首を振った。

そんなやり取りをしている間にも、装甲トレーラーは力走を続け、新宿御苑の北側を抜けて四ツ谷駅近くに差し掛かっていた。あと数分も走れば、現実世界の半蔵門——加速世界の都城西門に突き当たる。

かつて、そこを守護する超級エネミー（四神）ビヤッコに、黒雪姫と楓子が旧ネガ・ネビュ

ラスの一隊を率いて挑んだ。烈風の如きスピードを誇る神獣の爪牙に蹂躪されはしたものの、楓子のゲイルスラスタターによって辛くも守護領域からの脱出には成功したので、帝城四方門のうち西門にだけは誰も封印されていない。ゆえに、ハルユキがビヤッコの姿を見る機会は当然訪れないはずだ。いつかネガ・ネビュラスが再びの帝城攻略に挑む、その時まで。

トレイラーが四ツ谷駅を通過し、緩い上り坂の頂に達すると、行く手に横たわる巨大なシルエットが眼に入った。

全ての建物が半壊しているはずの世紀末ステージにありながら、高い城壁は一箇所たりとも崩れずに黒々とそびえ立っている。壁の向こうにうっすらと浮かび上がる本殿は、ゴシック調の古めかしさと近代建築の硬質さを併せ持つデザインだ。夜露に無數のかがり火が瞬くさまは、おどろおどろしくも美しい。

無制限中立フィールドの帝城は、現実の皇居とは異なり、直径一・五キロメートルの真円を描いている。周囲は底無しの峡谷に取り囲まれ、しかも谷の上空には異常重力が発生しているため、ハルユキの翼でも楓子のブースターでも飛び越えることはできない。峡谷を渡る手段は、東西南北の城門へと繋がる幅三十メートルの大橋のみ。

ニコの操縦するトレイラーは、裏道から新宿通りに出ると、内堀通りと交わる丁字路手前でいったん動力をカットして自然減速した。正面には西の大橋、そして城門が見えるが、そこに踏み込めば四神ビヤッコが眼を醒ましてしまう。十二個のタイヤを甲高く鳴かせながら右折

し、無限の断崖に沿って伸びる道路に入ると、再びエンジン音を轟かせて南に走り始める。

ハルユキは、トレイラーの左側に寄ると、差し渡し五百メートルの峡谷を挟んで黒々とそびえる城壁を見上げた。

あの壁の向こうには、無数の衛兵エネミーと、一人の少年バーストリンカーが住んでいる。もちろん常時ダイブしているわけではないのだが、かなり長い時間をこちら側で過ごしているような口ぶりだったので、今この瞬間、わずかに千メートル離れた所に彼が存在する確率は、青の王ブルー・ナイトが都庁にいる確率より高いかもしれない。

ハルユキは彼——神奇（ジ・インフイニティ）を持つ若武者アバター（ヘトリリッド・テトラオキサイド）と、十日前の帝城脱出作戦のうちに、いつかの再会を約束した。もうすぐ開始されるアクア・カレント救出作戦では帝城内部にまで突入する予定はないので——前回のアード・メイデン救出作戦でも本当はそうだったのだが——今日の再会は望めない。

——だけど、いつか必ずまた会おう、リード。

ハルユキは、城壁の向こう側へ、声には出さずにそう呼びかけた。

すると、隣に立つ誰か、まるでハルユキの声が聞こえたかのように微笑み、頷いた。

トレイラーは緩くカーブする内堀通りを突き進み、やがて四神スザクに護られる南門の前を通り過ぎた。十二日前までアード・メイデンが封印されていた場所だ。右側に、現実世界の日比谷公園であろう荒れ地を見ながら徐々に北へと転進する。

暗闇の奥から丸の内界隈のオフィスビル群が姿を現してきたあたりで、エンジンの回転数が下がる。そのまま惰性で百メートルほど進んでから、大きな交差点の真中で、トレーラーは停車した。

「終点、帝城東門前ですう！ お客様はとっととお降りくださいあーい！」

なぜか天使モードなアナウンスに従い、乗客は次々に地面へと飛び降りた。最後にハルユキが楓子の車椅子を抱えて着地すると、巨大トレーラーは赤い光に包まれて消滅。コクピットのあった場所から、真紅の少女型アバターがびよんと姿を現す。

杉並の梅郷中学校から、都心を横断して丸の内までのドライブを終えた赤の王スカーレット・レインは、両腕を突き上げて大きく伸びをしながら言った。

「うーん、狭い道ばかりで神経使ったぜまったく。帰りは首都高ぶつとばすからな！」

「えええ？ ブレーキついてないのに？」

思わず叫んでしまってから、ハルユキは慌てて言い添える。

「で、でも、見たところ首都高の高架もあちこち崩れてるみたいだったよ。あれじゃ大型車はちよつと走れないんじゃないかなー、なんて……」

すると、両手を頭の後ろで組んだニコは平然と答えた。

「作戦二連発のあいだに、一回くらい変遷あんだろ。つーか、そろそろ来て欲しいトコだよな。そこで、火属性の《溶岩》とか《焦土》を引けりゃ最高だけどな……」

「え、なんで……って、あ、そうか。火系ステージになれば、四神セイリュウの力が弱まるんだ……」

「うむ。だが、逆に水系ステージになってしまう可能性もあるからな……」

ニコの隣に進み出た黒雪姫が、鏡面ゴーグルを暗い空に向けながら言った。

「雨が降らない世紀末ステージならば、ひとまず良しとすべきだろう。それよりも、どうせ変遷を期待するのなら、次のメタトロン攻略作戦に向けて幸運を溜めておきたいところだな」

「そうね……。少しでも上位の暗黒系ステージを、そしてできれば……」

ハルユキが押し手を握ったままの車椅子に座る楓子の声が、静かに続く。

「……暗黒系の頂点、《地獄》ステージを。そうなれば、わたしたちも悪さんと一緒にメタトロンと戦えるのですか……」

「そうだな……。だが、この私とて、無制限フィールドに地獄ステージが訪れたところを見た回数はいくつで数えられるほどじゃない。七日間の制限時間ぎりぎりまで待つ選択肢もあるが、可能性は限りなくゼロに近いだろう……」

一瞬、場を覆った沈黙を、チユリの明るい声が破った。

「だいじょーぶだよ先輩、姉さん！ そのために、クロウががんばって《光学誘導》アビリティを身につけたんだもん！ メタトロンのレーザークらい、ビシバシ弾きまくってくれるよ、きつと……」

「ここはきつと「おう、任せとけ!」くらいのことを言うべき場面なんだろうなあ。  
と頭では思いつつも、ハルユキの口から出たのは「ど、努力します」といういつものフレーズだった。

しかし、いつの間にか後ろに立っていたバドさんがハルユキの肩をぽんと叩き、頷いた。

「K. あなたなら、きつとできる」

「は……はい!」

口調は素っ気ないが、いつだって優しく励ましてくれる年上の女性バーストリンカーに向き直り、ハルユキは今度こそ決意のほどを表明しようとした。しかし大きく息を吸ったところで、バドさんはしなやかに歩き出してしまった。長い尻尾を揺らしながら、無音の歩行で交差点の西側に移動し、周近にそびえる帝城に正対する。

豹人型アバターの、細く逞しい背中を見て、ハルユキは胸に溜めていた空気をゆっくり吐き出した。

そう、今は、メタトロン戦に気を取られている時ではないのだ。それよりも先に、全力で走り逃げるべき目標がある。帝城の東門に封印されているネガ・ネビュラス（四元素）の一人、アクア・カレントを救出する、という。

ハルユキは、椅子の車椅子から離れた両手をぐつと握り締め、ゆっくりと一回転しながら周囲の光景を脳内に刻み込んだ。

北には、東京消防庁と気象庁の庁舎ビルと、首都高環状線の高架が見える。

東には、広い道路の突き当たりには横たわる東京駅。世紀末ステージでも赤煉瓦造りを維持しているが、あちこちで壁が崩れ、焼け焦げている。

南を向くと、先刻通り過ぎてきた日比谷公園と、霞ヶ関の官公庁ビル群。ずっと彼方に細く屹立する鉄塔は、旧東京タワーか。

そして、西側には、底無しの断崖絶壁に架かる鋼鉄の橋と、その奥で固く閉ざされる巨大な門が存在した。縦横ともに三十メートルはあろうかという門扉もまた鋼鉄製だが、黒々とした表面にはわずかな錆も目もみつけられない。《大破壊後》をテーマとする世紀末ステージにあつて、一切の侵食を拒否しているかのようだ。

「帝城……東門……」

ハルユキの呟きに、右隣まで移動してきた黒雪姫がそつと頷いた。

「あの門の手前には祭壇に、カレンが封印されている。救出作戦の詳細についてはこれからブリーフィングを行うが、南門の時と同様、キミには重要な役目を果たしてもらふことになるだろう……。頼ってばかりで、親としてもレギオンマスターとしても不甲斐ないのひと言だが、よろしく頼むぞ、ハルユキ君」

「そんな……そもそも今日の作戦は、僕が先輩たちにお願ひしたことですから……」

「いや、カレンがレギオンに復帰した以上、帝城からの救出はすぐにでも果たさねばならない

目標だったのだ。メタトロン攻略についても同じだよ。ISSキットの広がり、感震爆発の一手手前まで来ているから……むしろキミの意志が、二の足を踏んでいた私の背中を押してくれたと思っている」

黒雪姫は、左手の剣の側面をハルユキの右腕に触れさせ、フェイスマスクもすぐ傍まで近づけて囁いた。

「……正直、私の中にはまた消えない怖れがある。四神セイリユウ相手に、新たな犠牲者を出してしまうのではないか……東京ミッドタウン・タワーで、予想もしていなかった事実が直面するのではないか、という。しかし、同時に私は信じているのだ。いかなる苦難も、キミの銀色の翼が切り裂いてくれる……とな……」

「……はい」

もっと多くの言葉を返したかったが、喉元に熱い塊が込み上げてきて、短い返事を押し出すのが精一杯だった。代わりにハルユキは、右手の指先でそっと黒雪姫の左手の先端を包んだ。これ以上強く握れば、《終決之剣》の切れ味が指が落ちるであろうというぎりぎりまで力を込め、どうにかもう少しだけ言葉を付け加える。

「大丈夫です……何があろうと、僕が、先輩と、みんなを守りますから」

黒雪姫は、返事をする代わりに深々と頷き、そのまま顔をハルユキのヘルメットに軽く触れさせた。

びつたりと寄り添ってくろがねの城門を見上げる二人を、今だけは誰もからかったり混ぜ返したりしようとはしなかった。数秒間そのまま置いてから、黒雪姫は背筋を伸ばしてハルユキから離れ、背後の六人に向き直った。左手を伸ばしてインストールメニューを開き、彼女にだけ見える窓を一瞥してから凛とした声を響かせる。

「我々が無制限フィールドに入ってから、いまちょうど三十分……現実時間で一・八秒が経過したところだ。アクア・カレントは、我々より十秒遅れてダイブする予定なので、こちらでは二時間四十六分後となる。つまりあと二時間と十六分の待ち時間があるわけだ。ひとまず十五分間の休憩を取ってから、救出作戦のブリーフィングを始めよう」

「ういーっす。そんじやあたしは、ちよこつと東京駅でも見物に……」

とニコが言いかけた瞬間、黒雪姫がコワイ声を出す。

「だーめーだ！ あそこにはポータルがあるし、線路の向こうはもうオーロラ・オーバルの領土だからな。万が一紫の王の配下に出くわしてもしたら、ウルトラ面倒くさいことになるぞ」

「あー……まあ、そりやそーだ」

と素直に頷いたところを見ると、さすがのニコも紫の王バーブル・ソーンと積極的に関わらずにはないらしい。

「しやーねー、そんじやハカセに帝城ガイドでもしてもらおうか」

「え……ええっ、なんでばっかりか」

突然水を向けられて驚愕するタタムを、ニコは緑色のアイレンズでじろりと睨め付ける。  
 「まさか忘れちゃいねーよな？ あたしがハカセの心意修行に散々付き合ってたことをよ？ 言っとくけど、プロミネンスのメンバーにもあんなスペシャル授業したことねーんだからな！」

「わ、忘れてませんもちろん！ でも、ガイドって言っても、帝城には入れませんし……」  
 「ここから見える範囲でいいよ。あの東門も、現実世界じゃ別の名前とか歴史トリビアとかあるんだろ？」

ニコが可愛らしい右手で指差す鋼鉄の門を、タタムも、他の六人も揃って眺める。言われてみれば、帝城の四方門は現実世界の皇居——かつての江戸城の東西南北に設けられた門に対応していて、西の半蔵門や南の桜田門と同様の呼び名が東門にも存在するはずだ。

一同が視線をタタムに戻すと、少々ごちないながらも解説を始めた。  
 「ええと……帝城東門は、現実世界では『坂下門』と呼ばれています。江戸城内曲輪門のひとつで、一八六二年の一月に、水戸藩士六人が老中安藤信正を襲撃した場所ですわ」

いきなり涙うお競強ムードにハルユキの脳は拒否反応を起こしかけたが、同時に記憶の一部が刺激され、上半身を妙な角度に捻りつつ唸る。  
 「ええとええと……それ、どこかで聞いた気が……はらあれあの……そうだ、『坂下門外の変』！」

奇跡的に記憶再生に成功し、勢いよく叫んだハルユキだったが、すぐさまチユリが容赦ないコメントをつけた。  
 「坂下門まで聞いてれば、その名前はフツーに出てくるでしょ。じゃあ、問題！ 襲撃の理由はなんだっただしよーか！」

「うっ……ええと、それははら、老中の安藤さんが氣にくわなかったから物理攻撃を……」  
 「氣にくわなかった理由を詳しく！」  
 「ええええ……っ……確か……」

思わぬところで日本史の小テストが開始され、ハルユキはあやふやな知識を限界まで絞り上げた。  
 「その……安藤さんが、アメリカと条約結んで、それに反対した幕府側の人を、いっぱい弾圧して……」

「ぶぶー！」  
 とチユリが口で不正解ブザーを鳴らすと、車椅子ごとハルユキに向き直った楓子が、人差し指を立ててにつこり笑った。

「惜しいわ、鶴さん。その『安藤の大獄』を行ったのは大老井伊直弼のはうね。ちなみに彼も水戸浪士に襲撃されたけれど場所はあっちの南門で、それがいわゆる『桜田門外の変』。起きたのは一八六〇年三月だから、坂下門外の変の約二年前ね」

もちろん、ハルユキには、百八十五年前に現実世界のこの場所で斬り結んだという武士たちのどちらかに肩入れするほどの知識はない。しかしタタムの解説を聞くと、どうしても重ねてしまいそうになる。これから強大な超級エネミーに挑む八人のパーストリンカーと、遠い昔に斬死した六人の侍たちを。

「あーもう、ハルはどうしてそう解りやすいかなー」

いきなりすぐ近くでチユリの呆れ声が聞こえ、ハルユキはびくっと体を跳ねさせた。顔を動かす、黄緑色の麗女型アバターが三角帽子をやれやれとばかりに振り動かしている。

「わ、解りやすいって何がだよ」

「どーせ、僕たちも全員討ち死にしちゃうんじゃないや……とかクヨクヨ考えてたんでしょ」

「うっ」

「あのねえ、状況がぜんぜん違うでしょ！ あたしたちは老中を暗殺しに来たんじやなくて、カレンさんを助けに来たの！ そもそもあなたは帝城の中に押し入っても無事だったんだから、今更門の前でビビらないでよね！」

なんだか論法がムチャクチャなような気がするが、幼馴染にいつもの調子でまくし立てられると「なるほど」と納得してしまうハルユキだった。深々と頷き、右手を握り締めて答える。「そうだよな、今回はどう考えてもこっちが正義だよな！ どうせなら、正義パワーでセイリユウも倒しちゃえばポイントがドーンと……」

「あつ……そ、そっか……。つてことは、安藤さんはなんで襲われちゃったんですか？」

「安藤信正は、拙らぐ幕藩体制を強化するために、朝廷と幕府を一体化させる『公武合体』を推進したの。その象徴として、孝明天皇の妹和宮を、十四代將軍徳川家茂に降嫁させたのね。それが尊皇派の水戸浪士たちに襲撃を決定させたと言われているわ」

次々出てくる固有名詞にハルユキの脳内キャッシュメモリは容量ぎりぎりだったのが、どうにか整理して小刻みに頷く。

「な、なるほど……。——攻撃側の浪士は六人でしたよね？ 防衛側……じゃなくて安藤さんを護衛してた侍は、何人くらいいたんですか？」

その問いには、再び咳払いしたタタムが答えた。

「勢城平藩士四十五人が警護してたらしいね。勢城平藩は、いまの福島県南部にあった信正の所領だよ」

という解説を、ついついレギオン・イワキタイラのメンバー四十五人と自動変換してしまうハルユキだったが、それは口に出さずに腕組みをして聴く。

「うへえ……六対四十五か……。リザル、じやない、襲撃の結果は……？」

「水戸藩士は全員討ち死に、勢城平藩士には死者は出なかった。安藤信正も、背中に負傷したけど城内に逃れて無事だったんだ」

「うーん、そっか……」



「調子に乗るな！」

「ごりつ、と（クワイアー・チャイム）の角で脇腹をどやされてハルユキが黙り込むと、残る六人が揃ってため息をついた。

軽い咳払いに続いて橋の正面へと移動した黒雪姫が、空気を切り替えるように言った。  
「さて、迫り来る期末テスト対策が終了したところで、そろそろ作戦会議を始めよう。用意はいいかな？」

おし、と答える皆の声にやや力がなかったのは、黒の王の台詞に含まれていた漢字二文字と片仮名三文字のせいに違いない、とハルユキは確信した。

二時間十五分、と言われた時は途方もなく長く思えた待ち時間も、入念なブリーフィングと作戦状況のシミュレーションをしているとあつという間に過ぎてしまった。

黒雪姫が、もう一度インストメニユーの累計タイプ時間表示を確認してから、振り向いて告げた。

「よし、作戦開始十五分前だ。カレンはかなり正確にタイミングを合わせてくれるはずだが、現実世界での〇・一秒の誤差が、こちらでは百秒に拡大してしまう。つまり、前後二分程度のズレは計算に入れておかなばならない」

十二日前のアーダー・メイデン救出作戦では、無制限フィールド側での準備が整った時点で

タタムが最寄りのポータルから離脱し、現実世界で論に加速タイミングを伝えるという手順を取った。

しかし今回は、アクア・カレント——氷見あきらのタイプ時間を事前に固定している。つまり、何らかの原因によって先行メンバーの鉄橋突入が遅れば、あきらは出現直後に四神セイリユウによって即死させられてしまうだろう。幸い、ニコの（タクシー）のおかげで帝城東門まではスムーズに到着し、準備も滞りなく終了したが、本書はこれからだ。ハルユキは、黒雪姫の言葉を聞き漏らすまいと精神を集中した。

「——前回、二度にわたりスザクと交戦して解ったことだが、四神は神獣級エネミーをも超える高度なA-を与えられているようだ。最もダメージを与えた者をターゲットし続けるとは限らないし、意図的にこちらの裏を掻くような動きをしたりもする。あるいは、さっきのシミュレーションにない状況に陥ることもあるかもしれん。その場合は臨機応変に対応するしかないが、どうか自分自身の離脱を最優先してくれ。誰かが新たに封印されてしまうことだけは防がねばならない」

黒の王の声は落ち着いていたが、最後のフレーズにだけ、仄かに苦しそうなおどろきが混じったことにハルユキは気付いた。

黒雪姫と、そして楓子は、前回の帝城脱出作戦においてハルユキと話が端つてスザクに焼き殺されそうになった時、我が身を犠牲にしてハルユキたちを助けようとした。あの行動と、今

の言葉は明らかに矛盾している。恐らく今回も、黒雪姫は内心で決意しているのだ。自分だけは仲間の離脱を最優先する、と。

でもそれはきつと、楓子も、話も、タクムも、チユリも、ニコも、バドさんも同じだろう。絶対に仲間を見捨てないという決意、いや信念があるからこそ、ここに集まっているのだから。そして、その気持ちこそが、バーストリンカーのいちばん大きな力なのだ。

「わーかってるって、ロータス！」

椅子代わりのドラム缶に腰掛けたスカレット・レインが、両脚をびこびこ振り動かしながら言った。

「要は全員でおりゃーって突っ込んで、アクア・カレント拾って、また全員でうおーって逃げりゃいいんだろ？ 片道だったの五百メートルじゃん、楽勝らしくしょー！」

「だったの、と言うがなレイン、いざ走ってみると五百メートルはけっこう長いぞ。往復だと一キロなんだぞ」

「一キロがなんだつうの！ ウチのガッコのマラソン大会なんか、六年は三キロも走んだからな！ あーもー、考えただけでダリイッたら……」

「甘ったれるな！ 我が校のマラソン大会は五キロだ！ だるいのひと言では片付けられない距離だぞ！」

やや主旨の外れた王たちの言い合いに、チユリが呆れ声で割り込んだ。

「ニコちゃん、先輩、あたし部活で毎日その三倍くらい走ってるけど……」

「……マジかよ、死ぬ気かライム・ベル」

「……低レベルな言い合いをして悪かった」

軽く頭を下げた黒雪姫が、姿勢を正して首を見回した時には、作戦前の硬直した空気が少しだが和らいでいた。青紫色のアイレンズがゆっくりと瞬かれ、穏やかさの中に強い意志を秘めた声 flowed.

「レインの言ったとおり、作戦そのものはシンプルだ。セイリュウの猛攻撃も、この陣容ならば突破可能だと信じる。十分前だ、開始位置に就こう」

《強化外装》の本質とは何か。

そう問われれば、低レベルのバーストリンカーのはとんどが攻撃力の強化だと答えるだろう。決して間違いいではない。銃タイプや剣タイプの強化外装はデュエルアバターの攻撃力を飛躍的に引き上げ、戦術の幅を広げてくれる。

だが、加速世界で無数の対戦を経験し、勝利と敗北を重ねながらミドルレベル以上にまで到達したバーストリンカーは、強化外装はディフェンスに於いてこそ真のアドバンテージを発揮すると気付くようになる。単なる防御力の強化ではない。とても単純だが、それゆえに気付きにくい、ひとつの事実。

強化外装が、単体で敵の攻撃を受け止めている間は、装備者の体力ゲージは減少しない。

見方を変えれば、それは体力ゲージが二倍、三倍に増えることにも等しい。原則として回復手段が存在しない加速世界では、体力値は目立たないが最も重要なパラメータなのだ。

もちろん、だからといって頑丈な追加装甲を持てばそれで最強になれるというものではない。装甲タイプの強化外装は重く、動きを邪魔するので、使いこなせなければただの標的にされるだけだ。装甲をまともにも軽々と動けるだけのパワーか、脚を止めても撃ち勝てるだけの火力



が求められる。

前者の究極が、かつてハルユキもその圧倒的戦闘力を体感した《災禍の鎧》クロム・ディザスター。

そして後者の究極が、《不動要塞》スカレット・レインである。

『いっ……けえええ——ッ!!』

現実時間二〇四七年六月三十日午後十二時二十分十秒、ついに開始されたアクア・カレント救出作戦の口火を切ったのは、赤の王の気合いに満ちた雄叫びだった。

再び召喚された強化外装、装甲トレーラー《ドレッドノート》の十二個のタイヤが猛然と空転し、世紀末ステージの道路を焼き焦がす。やがてタイヤの凹凸ががちりと路面を噛み、巨大な車体はアスファルトを割り砕きながら発進する。

スタート地点は、帝城東門前の鉄橋入り口から三百メートル下がったところに設定してある。事前にドラム缶やコンクリート塊などは撤去済みなので、走行を発塵するオブジェクトはない。即席の助走路を、真紅の大型車両は一直線に加速していく。

ニコはもちろんコクピットの中だが、ハルユキたち七人は、屋根ではなく車体の両サイドにマウントされたレーザー砲の砲身上に立ち、側面にしつかり掴まっている。左に、黒雪姫、ハルユキ、タカム。右に、バドさん、チユリ、楓子、謡。

なぜ全員が屋根に乗っていないかというところ。

『ミサイル発射用——意!』

ニコが再び叫ぶと同時に、車体上面の装甲板が四箇所ではかっとな開いた。その奥から、無数のミサイルがせり上がる。攻撃態勢に入りつつもトレーラーは猛加速を続け、黒い鉄橋がみるみる近づく。

底無しの峡谷に架かる幅三十メートル長さ五百メートルの橋が、四神セイリユウの守護するテリトリだ。超級エネミーの巨体に対して、バトルフィールドはあまりにも狭い。包圍攻撃はもちろん、すり抜けて背後を取るのも困難。それゆえ、アーダー・メイデン救出作戦の時は楓子のゲイルスラストをブースター代わりにハルユキが超高速で飛翔し、出現直後の四神スザクを飛び越える戦術を立てた。そこまでは上手く行ったものの、余りに速く飛んだために後方にターンできず、誤もども帝城内部に突入してしまった。

その反省を活かし、今回は地上からの突入だが、おいそれとターンできないのは《ドレッドノート》も同じ。それどころか、装甲トレーラーにはブレーキすらついていないのだ。しかし、ニコは跳することなくアクセルを踏み続け、いよいよ鉄橋に突入するという寸前、三度目の大声を響かせた。

『しっかり掴まってるよ! スラスト、オー——ンッ!!』

どおおっ! という爆音が轟き、ひととき強烈な加速がハルユキを襲った。トレーラー

の後面に装備されたロケットモーターが点火されたのだ。

直後、一番前のタイヤが、アスファルトの道路と鋼鉄の橋床板の境界線を越えた。

空気の色が変わった、ようにハルユキは感じた。行く手にはまだ何も見えないのに、あまりにも高密度な存在感が、おそろくはニコの言う《情報王》と同じものが、全身の装甲をちりちりと弾けさせる。

「……来るぞ！」

ハルユキのすぐ前に陣取る黒雪姫が、鋭く叫んだ。

橋を渡った先、帝城東門の手に設けられた四角い祭壇の上空で、ゆらりと青い光が瞬いた。まるで水面のように揺れ動きながら、それはみるみる大きくなる。やがて真ん中から幾重にも波紋を広げ、その奥で湧きあがった冷光が二つ輝く。直後。

激しい水音を響かせ、幻の水面から巨大な姿が躍り出た。無数の牙と、四本の角を備えた頭部。菱形の鱗に覆われた首が続き、遅い前脚が宙を掻く。再び長い胴体がうねり、鉤爪を備えた後脚が現れ、鞭のように鋭い尾が大きな弧を描いてしなる。頭から背中、尻尾にかけて金属光沢のある剛毛が逆立ち、そこから等間隔に四対八枚もの小翼が伸びている。

西洋風とも東洋風ともつかない、しかし堂々たるドラゴンの姿だ。全身を包む燐光のせい、世紀末ステージの暗闇の中でも、巨体は鮮やかな紺瑠璃に煌めいている。永久水を研ぎ上げた

かのような二つの眼も、また。ついにその姿を現した四神セイリユウは、顎門をいっばいに開くや、雷鳴の如き咆哮を連らせた。びりびりと空気が震え、ハルユキは歯を食い縛ってブレッツシャーに耐えた。

トレイラーに乗る八人のうち、ネガ・ネビュラスの六人は同じ超級エネミーであるスザクと相対した経験がある。だが、プロミネンスの二人はこれが初遭遇のはずだ。コクピットのニコも、車体の反対側にいるブラッド・レバードもハルユキからは見えないが、あの恐ろしい姿を目の当たりにすれば、数瞬にせよ金縛りになつてしまふことも……

「噴らえへび野郎！ ミサイル、全弾発射ア——ッ！！」

ハルユキの危機を吹き飛ばすような喚び声に続いて、トレイラー上面から光と音が溢れた。薄闇に無数の噴射炎を輝かせ、小型ミサイルが次々と飛翔していく。しばらく上昇したところ

で角度を変え、エネミーの巨体目掛けて突き進む。

オレンジ色の火球が立て続けに咲き、遊むするセイリユウを呑み込んだ。多量の爆発音が、鉄橋とその上を疾走するトレイラーを揺るがす。

四百メートル先の爆炎が収まるのを待たず、黒雪姫が叫んだ。

「全員、屋根に移動！」

七人は主砲を蹴ってジャンプし、トレイラー上面に飛び移る。ミサイルポッドが開いたまま

なので、足許は多少でこばこしているが立てないほどではない。

51 アタセル—ワールド14 —微光の天火使—

「遠距離攻撃、開始！」

続く指示に、ハルユキとタクムは「はい！」と応じ、並んで同じ姿勢に構えた。ミサイルボツドの蓋越しに右手を突き出し、左手で支える。

真っ先に放たれたのは、シアン・パイルの必殺技だった。

「（ライトニング・シアン・スパイク）!!」

超高温のプラズマと化した鉄杭が凄まじいスピードで発射され、爆炎の奥に見え隠れするシルエットに吸い込まれる。新宿大ガードの橋桁には小さな孔を開けただけだったが、超級エネミーの装甲相手なら自慢の貫通力が効果を発揮したはずだ。

続けてハルユキが、右手に宿した白銀の過剰光を後ろに引き絞った。生成された光の槍が限界まで張り詰めた瞬間、技名を叫びながら左手で槍の根元を一気に切断する。

「（光線投槍）!!」

遠隔型必殺技を持たないハルユキにとっては、この心意技が唯一の遠距離攻撃手段だ。中距離技「（光線槍）」の応用技だが、やや強引なロジックゆえに照準精度が甘い。甲高い唸りを上げて飛んだ槍の軌跡は、一直線ではなく浅い螺旋を描いたが、エネミーの巨体が幸いしてどうにか尻尾のどこかに命中したようだ。

ここでミサイルの連続爆発が終わり、黒煙の向こうでセイリウウが再び動き出す気配があったが、そうはさせじと諷か長弓「（フレイム・コーラー）」を空に向けた。

「フレイム・トーレンツ!!」

凍った発声と同時に、火矢がひょうと射られる。弾道の頂点で数十本にも分裂し、火焰の豪雨となってエネミーに降り注ぐ。たちまち湧き起こる無数の小爆発は、規模こそミサイルに劣るが燃焼の持続時間が長い。青い巨竜は、炎の中で直立たしげに体をくねらせる。

直後、背然な氣勢がトレーラーの走行音を圧して響いた。

「おおおお……!!」

ハルユキの列前に立つ黒雪姫が、高々と掲げた右手に真紅の過剰光を宿らせる。オニキスからルビーへと変じた長剣を、肩の上に構える。

「（革命の撃）!!」

神速で突き出された右手から、血の色の光条が迸った。二百メートル以上の距離を一気に貫き、火焰にまといわつたままのセイリウウの胸に見事突き刺さる。巨体が激しく打ち震え、金属質の叫声がフィールドに響き渡る。

そして最後に、ニコがもう一度叫んだ。

「これでどうだあ——ッ!」（ビートブラスト・サチュレーション）——ッ!!

車体左右の主砲が、がしやりと角度を上向けた。

大径の砲口から、ルビーレッドの微光が漏れる。それはたちまち明度を増し、十字の光条となつて脚さへ。

ぎゅあああつー という耳をつんざくような共鳴音を轟かせて、途轍もなく太いレーザーが発射された。

一週間前、《理論鏡面》アビリティ習得のための特訓で、シルバー・クロウを何度も蒸発させた通常射撃の倍はあろうという規模だ。しかも、左右の主砲から同時に放たれたレーザーは、数十メートル先でひとつに融合して、光の柱とでも呼ぶべきエネルギーの大輪を作り出す。かつてハルユキは、この技が新宿の都庁ビルを一撃で吹き飛ばすところを見た。

現在の加速世界では最強の遠隔型と目される二代目赤の王の必殺技は、先に黒の王の心意技が貫いたセイリウウの胸部を捉え、真つ赤な光の球に膨れ上がってから、天地を揺るがすほどの大爆発を引き起こした。高々と伸び上がった火柱は遥か空にまで達し、垂れ込める黒雲の底を赤々と染めた。

最初のミサイルから数えれば、六連続にも及ぶ必殺技・心意技の猛攻撃だ。いくら加速世界最強のエネルギーであろうと相当のダメージは受けたはず、ことによればしばらく行動不能化することも……と思いがハルユキは爆炎の奥に眼を凝らした。

巨大なシルエクトの上には、スザクと同じ五段の体力ゲージが表示されている。その一段目は、確かに三割近くも削られている——のだが。

「うあ……………」

ハルユキは、低い呻き声を漏らした。せつかく減らしたゲージが、左から右へとみるみる回

復していく。

事前にシミレーション済みの現象ではある。帝城四方門を守護する超級エネルギーたちは、ある意味では四匹でひとつの存在であり、一匹に傷を負わせても、他の三匹のうち非戦闘中のものが回復してしまうのだ。つまり、四神を倒そうと思ったら、四匹同時に攻撃を仕掛けて一度に倒すしかない。それがどれほど難しいかは、旧ネガ・ネビュラスの悲劇を持ち出すまでもなく明らかだ。

ゆえに今回の作戦では、セイリウウの討伐は最初から考えていない。攻撃はあくまで狙いを引きつけるための手段——と頭では理解しているのだが、それでも王一人を含むチームが全力で与えたダメージがあつたり消滅する様には少なからず衝撃を覚えてしまう。闇のタクムも、押し殺した声で呟いた。

「今の攻撃でワンゲージも削れないのか……」

「ガツカリしている余裕はないですよ、クロウ、バイル」

背後でそう言ったのは楓子だった。日頃はふんわり柔らかい声も、さすがに今は鋭く引き締められている。

「反撃が来ます。みんな、装甲板に隠れて！」

その指示に、雷鳴のような咆哮が重なった。

前方二百メートルに近づいた祭壇の上空、いまだ消えない黒煙の中から、青い巨響が猛然と

飛び出した。サファイアの両眼に怒りを湛らせ、長い刀門をいっばいに開く。

無数の牙の奥から、ズバアッ！ という衝撃音とともに放たれたのは、青白い光線——ではなく水流だった。事前にアクア・カレントから伝えられていたセイリュウの特殊攻撃の一つ、《ウォータープレス》。超高压ジェット水流を束ねたその威力は、防御に秀でた緑系アバターの装甲を数秒で穿つという。

ハルユキはすぐさま身を屈め、目の前の鋼鉄板、すなわち開いたまのミサイルポッドの蓋の際に身を隠した。黒雪姫やタクム、チユリたちも同じようにする中、背後の風子だけが毅然と立ち統括している。右の掌をまっすぐ前に掲げ、深いエコーを伴う声で、

「（庇護風降）!!」

なややかな掌を中心に巻き起こった緑の風が、トレーラー全体を包んだ。

直後、同じくちようどトレーラーを呑み込む幅に拡散したセイリュウのプレス攻撃が襲い掛かった。ハルユキは膝立ちのまま、真上を見た。

渦巻く風で形成された緑色のドームが、無数のジェット水流を白い霧へと吹き散らしている。だが、風の勢いも急速に弱まり、背後の風子が「く……」と短く声を漏らす。掲げられた掌が圧力に耐えかねるようにはぐれ、体ごと押し戻され、ついにがくりと膝をついた。その瞬間。

ハルユキの視界が、白く染まった。ウォータープレスが、風子の心意防壁を破ってトレーラーに降り注いだのだ。

高周波の振動音が凄まじい音量で響く。車体が小刻みに震える。数百本にも達するであろうジェット水流が、《ドレッドノート》の分厚い装甲に至る所で掘削しているのだ。仮に攻撃を受けているのがアバター本体であれば、体力ゲージが恐ろしい勢いで減っていくはずの状況しかし。

「へっ……タダで高压洗車してくれるため、気前がいいなヘビ野郎!!」

さすがにスピードは落ちたが、それでもプレスに抗ってトレーラーを前進させながら、ニコが喚いた。その声に、ダメージの色はない。《強化外装が攻撃を受け止めている間は、所有者の体力ゲージは減らない》からだ。

武装トレーラーをいわば強襲車両として用い、装甲でセイリュウの攻撃を受け止めつつ祭壇に近づけるところまで近づくとこの作戦を提案したのは、所有者であるニコ自身だった。トレーラーを使い捨てに等しい戦術をためらうネガ・ネビュラスの面々に、赤の王は平然と言いつつ。あんたら、まだ強化外装の本質ってモンが解ってねえな、と。

——ニコ、ありがたう。君の心意気は無駄にしない、絶対に！

胸の奥でそう叫びながら、ハルユキはミサイルポッドの蓋を両手で支え続けた。分厚い鋼鉄板は小刻みに震え、セイリュウのプレス攻撃に穴を穿たれ続けていることを伝えてくる。

しかし、風子の心意気は威力の何割かを散らしてくれたおかげか、即席の防禦は貫通されることなくプレスに耐え切った。トレーラーは再びスピードを増し、超級エネミーも上空を突き



進んでくる。彼我の距離が、ついに百メートルを切る。

事前情報によれば、セイリウウは四神の中では最も多彩な特殊攻撃を行う反面、物理攻撃の頻度は少ないらしい。もちろんゼロというわけではなく、鋭い牙と爪、そして尻尾による一撃は脅威だが、トレーラーの装甲も、穴だらけにされたとはいえ健在。あと少しならチームを守ってくれるだろう。

それよりも、中距離以下の間合いで最も恐ろしいのは……。

ハルユキがそこまで思考した時、前方の黒雪姫が短く叫んだ。

「時間だ！ 五秒前……二、一、ゼロ！」

カウントダウンの、わずかに三秒後。

もう行く手にはつぎと見える四角い祭壇の中心に、ゆらりと、と淡い水色の光が生まれた。デュエルアバターの出現エフェクト。光が広がり、凝集して、細身のシルエットを作り出す。全身を包む、透明な水膜。羽根のように弧を描く四本の水流。ネガ・ネビュラス（四元素）の一人、〈水〉のアクア・カレントだ。恐るべき精度でタイミングを合わせ、二年十ヶ月ぶりに無制限中立フィールドへと降り立ったのだ。

祭壇四方のかがり火を受けて美しく灼めくアバターから、ハルユキは懸命に視線を引き剥がした。いま見るべきは、四神セイリウウ。アーダー・メイデン救出作戦の時は、四神スザクはこのタイミングで反転し、祭壇上の詠を響おうとした。

だが、紺瑠璃の巨竜は、勢いを緩めることなくトレーラーに肉迫してくる。いきなりの大技六連発で体力ゲージを削られたこと、必殺のプレスを防がれたことになら怒っている……いや、憎悪値が上昇しているらしい。だがそれはこちらも望むところだ。作戦の成否は、黒雪姫を軸とした攻撃チームがセイリウウを最後まで引きつけていられるかに懸かっている。

空を覆わんばかりの距離まで迫った巨竜の、四本の角が青白く輝いた。

途端、上空の黒雲に幾筋ものスパークが走る。それらは何箇所かで寄り集まり、ひとときわ強くフラッシュし――。

「（スプラッシュ・ステインガー）!!」

タクムが、上体を思いきり反らしながら叫んだ。胸部装甲に開いた複数の穴から、立て続けにニードルミサイルが発射される。

ほぼ同時に、空からも紫がかった稲妻が轟音とともに放たれた。セイリウウ第二の特殊攻撃、〈サンダーブラスト〉。直上から襲い掛かってくる雷撃は、垂直に立っているミサイルポッドの蓋では防げない。

しかし、雷は全て、タクムが発射したニードルミサイルに吸い寄せられて空中に無数の爆発を引き起こした。とは言えそれだけで雷のエネルギーは打ち消せず、爆炎を買い紫の光が伸びてくるが、軌道を狂わされたせいではとんだが鉄橋に落ちる。一発がトレーラーを直撃し、装甲表面を伝ってタイヤを一つバーストさせたものの、いまだチーム全員が無傷。

セイリュウは、いちど特殊攻撃を行くと、次の攻撃までにしばしの溜め時間があるようだ。この隙に真下をすり抜ければ、カレントの待つ祭壇まで通り着ける――。

ハルユキの、その確信を消し飛ばすかのように、エネミーが叫んだ。

巨体がぐうっと沈み、パワーを溜め込む。S字にうねった尻尾が、視認も難しいほどのスピードで振り下ろされる。先陣が鉄橋表面を掠めて火花を散らし、そのままトレイラーの前面に叩き付けられる。

直前にニコがハンドルを切っていなければ、コクピットを潰されていたかもしれない。

危ういところでその惨事は回避したが、鉄柱の如き尻尾が右フロントを強打し、トレイラーは右側のタイヤを浮かせながらスピンし始めた。

「ちくしょ……」

毒づきながらもニコは必死に立て直そうとしたが、車体の傾斜はみるみる深くなり、屋根のハルユキたちは立っていられずに慌てて装甲板に掴まった。もしこのままトレイラーが横転すれば、何人かは転がる車体に巻き込まれ、きつとかなりのダメージを受ける。

ニコもそう考えたのだろう、スピーカーから悔しげな声が響いた。

「ダメだ、いったん戻す！ 全員、飛び降りる用意！――強化外装、解除！！」

ボイスコマンドが発せられると同時に、横転寸前だったトレイラーが、ばらりと分解した。破壊されたわけではなく、ニコの指示でアイテム欄に戻されたのだ。出し入れの自由度も強化

外装の大きなアドバンテージだが、いちど解除すると、外装ごとに設定された冷却時間が経過しなければ再召喚はできない。

分離したレーザー砲やミサイルポッドなどの各パーツはたちまち希薄化し、大気に溶けるように消滅する。足場を失った七人と、コクピットから排出されたニコは、鋼鉄の橋床板に投げ出される。

「さやああっ！」

「うわっ……」

声を上げたのは、チュリとタクムの二人。ハルユキは喉嚨に翼を広げ、右手でライム・ベル左手でシアン・パイルを確保すると、空中でしつかり減速してから橋に下ろした。他の五人は難なくノーダメージの着地を決める。完全遠隔型の誰までもが鮮やかな身のこなしを見せたのは、親子に散々空から放り投げられた経験があるからだだろう。

作戦を指揮する黒雪姫は、一同の無事を確認するや押し殺した声で叫んだ。

「レイカー、行け！ ここは支えてみせる！」

「……解った。あとは任せたわ」

剎那の逡巡を押し殺すように親子は頷き、いつの間にか召喚していた車椅子に飛び乗った。鋼輪が仄かな輝きを帯びるや、華奢な強化外装は百メートル先の懸崖目指してロケットの如く飛び出す。心意によって加速されたそのスピードは、ノーマルな走行を遥かに凌駕する。鉄

橋の表面に残された二本の轍は真つ赤に灼けて、薄く煙を上げていた。

前回の作戦ではハルユキのカタバルト役を務めたスカイ・レイカーだったが、今回は彼女がアクア・カレントの救出役だ。ハルユキは、師匠、頼みます！と念じながら、走り去る車椅子を一瞬だけ見送った。行く手では、カレントがすでに祭壇から下りて走り始めている。接触まで、あと数秒……

その時。

ハルユキは、頭の上に直接響くような重々しい声を聞いた、気がした。

小さく停る者たちよ。

——そなたらは、何故に妾の脈を助けるのか。

反射的に真上を振り仰ぐ。空を覆わんばかりに遮る超級エネミーの、サファイアのように輝く両眼に視線が吸い寄せられる。

一瞬、あの攻撃がついに来るのか、と身構えかけたが、しかし違った。

深遠なる知性と意志を感じさせる巨竜の双眸が、カッ！と冷たい光輪を迸らせた。

いきなり、ハルユキの全身が硬直、いや氷結した。シルバー・クロウの金属装甲に真つ白な霜が降り、翼はおろか指先ひとつ動かせなくなる。慌てて視線を左右に振ったが、他の六人も

同じように凍り付いてしまっている。

作戦会議を思い出すまでもなく、完全なる未知の攻撃だ。事前情報がセイリユウの全能力を網羅しているわけではないことは認識しているつもりだったが、ここまで強力な行動阻害技を喰らうことは想定外だった。動けないどころか声も出せないのでは、必殺技で破ることは不可能。といって、どれほど力を込めても霜の層は砕ける気配もない。

上空のセイリユウは、氷像と化した七人を冷ややかに一瞥するや、興味を失ったかの如く顔の向きを変えた。橋の西側、祭壇のほうへと。

どうにか動かせる視線を限界まで振ると、視界の端に、今まさに両手を触れさせようとしている楓子とあきらの姿が映った。作戦では、アクア・カレントを回収したスカイ・レイカーはゲイルススラストを使って上空へ離脱。彼女の飛行限界に近い高度三百メートルまで上昇してセイリユウを飛び越え、橋の外に着地することになっている。

だがそれも、セイリユウのターゲットを攻撃チームが取り続けていればこそ可能な作戦だ。ゲイルススラストはエネルギーゲージの再充填に長い時間がかかるので、離陸直後に叩き落とされでもしたら、あきらのみならず楓子までもが橋の奥深くで無限E.K.に陥ってしまう。

ハルユキの熱意に満ちた思考をトレースするかの如く、セイリユウが額門を大きく開いた。ウォータープレス攻撃。ダイアモンドの針にも等しい超高压ジェット水流に直撃されれば、装甲の薄いレイカーと、恐らくはカレントも即死は免れない。

.....させないのです!!

再び、脳裏に叫び声が響いた。だが今度はエネミーではない。四聖宮譚——《劫火の巫女》アター・メイデンの、凄烈たる意志力の迸り。

小柄な巫女の体から、真っ赤な炎の輪が拡散して皆を包んだ。強烈な熱が、アバターを縛める電を瞬時に溶かす。心意技——いや、技ではなく、強固なイマジネーションの発露によって過剰光そのものを炎に変えたのだ。

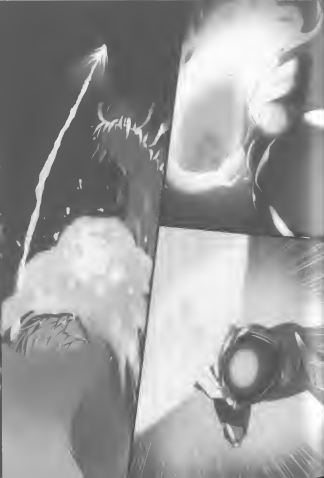
さすがに熱量の微妙な調整までは不可能だったようで、炎は霜を溶かすと同時にハルユキの体力ゲージをわずかに削った。だが熱さも痛みも忘れて、ハルユキは凍結状態から解放された右手を全力で突き上げた。

「——《光線槍》!!」

まったく同じタイミングで、ニコの声も響く。

「——《輻射拳》!!」

ハルユキの右手からは光の槍が、ニコの右手からは炎の拳が垂直に放たれ、いまにもウォータージェットを撃とうとしていたセイリユウの下腹に命中した。さしたるダメージを与えられなかったが、衝撃で口を閉じさせることには成功し、プレスの発射がざりざりのと



ころで中断される。勢いよく噴き合われた牙の隙間から、真っ白な水煙が噴き出す。

直後、爆発のすぐ手前でライトブルーの光が強烈に爆めいた。

ブリスターの噴射炎。アクア・カレントを両腕で抱いたスカイ・レイカーが、夜空に鮮やかな軌跡を描いて上昇していく。(ICBM)の二つ名に相応しい猛烈な加速でたちまち世紀末ステージの黒雲に突入し、一瞬だけ雲を青く染め、消える。

「……やった！」

ハルユキは、小さな声を出しながら強く右拳を握った。

何度か危ない場面はあったものの、アーダー・メイデンの時と比べれば遠かにスムーズな救出だ。しかし、チームの陣容を考えれば、作戦の前半は成功して当たり前とも言える。問題はここから。セイリュウが楓子たちを追うのを地上の七人で防ぎつつ、橋の外まで無事に離脱できるか否か、だ。撤退の途中で新たな封印者を出してしまつたら元も子もないのだから。

「よし、全員後退！」

黒雪姫の指示で、七人は上空のエネミーを視界に捉えつつ東へ走り始める。四神セイリュウは、ここまで特殊攻撃を再三防がれたにもかかわらず、ヘイトを一定値に保ったまま長い体を静かにうねらせている。ように見える。

……僕らを、見逃してくれる？」

……もしかしたら、四神にも性格の違いがあつて……(火)のスザクは怒りつぽかつたけど、

《水》のセイリュウは案外穏やか、とか……。

走りながら、ハルユキはふとそんなことを考えた。

エネミーのものらしき声が再び聞こえたのは、その直後だった。どこか女性をイメージさせる、固い水面のように静かで、極地の水のように冷たい声。

——戦れにはもう飽いた。

——小さき者たちよ、妾の庭にて長き眠りに落ちるがよい。

長大な尻尾が、装甲トレーラーを横転させた時と同様に強くなめられた。だが、ハルユキたちはもうエネミーから二十メートル以上も距離を取っている。どう考えても直接物理攻撃が当たる間合いではない。

霞むほどのスピードで振り下ろされた尻尾が打ち据えたのは、七人の誰でもなく、鋼鉄の橋そのものだった。ぐわん！と凄まじい衝撃音が轟き、硬い橋床板が激しく波打つ。同心円状に広がる振動波は、走る七人をたちまち呑み込み、ホバー移動しているはずの黒雪姫までをもよろめかせた。

倒れた者はいなかったが、全員が半秒ほどの行動不能状態に陥った、その隙を逃さず——。セイリュウの角が眩く輝き、上空の黒雲に不吉なスパークを呼び起こした。

「く……」

タカムが懸命に両足を踏ん張り、上体を反らせる。だが、雷針代わりのミサイルが発射されるよりも一瞬早く、蓄積された電気エネルギーが爆発物の紫雷となって解き放たれる。

——いけない！

ハルユキは、本能的な反応で、背中の翼を思い切り振り回していた。ここで全員が雷に打たれることだけは回避しなくてはならない。セイリユウの特殊攻撃（サンダーブラスト）は、ダメージもさることながら、直撃されると全身が痺れて一定時間動けなくなるという阻害効果が付与されている。作戦では、シアン・パイルの（スブラッシュ・ステインガー）で雷の軌道を狂わせ、それでも運悪く誰かが直撃されてしまったら回復するまで他の者がフォローすることに決めていたのだが、全員が麻痺すればもちろんその手は使えない。最悪の場合、次の攻撃で全滅すら有り得る。

——それよりは、僕ひとり！

振動波で体勢が崩された状態からジャンプできるのは、翼を持つシルバー・クロウだけだ。ありったけの推力で離陸しながら、思い切り両手を広げる。上空から殺到する雷がまとめて五本、クロウの金風装甲に吸い寄せられる。

「ぐあっ……」

四肢と胴体を稲妻に直撃された瞬間、熱感や痛覚を超えた純粋なショックがハルユキの意

識を貫いた。世界が真っ白に染まり、ステージもエネミーも見えなくなる。視界に存在するのは自分の体力ゲージだけ。ほぼフル状態だったそれが、恐るべき勢いで減少していく。伝導率最大の（銀）を装甲に持つクロウはもともと電撃に強いが、それを差し引いても有り得ない威力だ。いや、これはもう、即死級のダメージ……

「（シトロン・コール）……」

遠くでかすかに、幼馴染の殺然とした声が聞こえた。白く焼き付いた視界に、さらさらと緑色のパーティクルが流れる。体力ゲージの減少スピードが鈍り、消滅のぎりぎり手前で踏み留まる。そこから一気に右へと回復し、雷を受ける前の状態へと戻る。ライム・ベルの必殺技（シトロン・コール・モードI）がシルバー・クロウのステータスを数秒ぶん巻き戻してダメージを癒した、いや無かつたことにしたのだ。

即死は免れたが、雷撃のショックまでは消えず、ハルユキは全身から白煙を引きながら落下した。がしつと力強く受け止めてくれたのは、シアン・パイルの逞しい両腕だった。ハルユキが引き寄せ切れなかった雷は、幸いなことに全て外れたらしく、すかさずブラック・ロータスが叫ぶ。

「パイル、そのまま走れ！ 皆はパイルをフォローー！」

指示に従い、タカムはハルユキを抱きかかえたまま走り始めた。目の前にあるフェイスマスクの奥で、青いアイレンズが悔やむように瞬く。

「済まない、ハル。雷への対処はばくの役目だったのに」

「だ……じょ……こんくらい……」

いまだ痺れる口で、どうにかそれだけ言い返した、その時。

上空のセイリユウが、重々しく動きはじめた。走る七人を追いながら、またしても尻尾を振り上げる。衝撃波から特殊攻撃のコンボを繰り返すつもりなのだ。

「同じ手を……二度喰うかっ！」

苛烈な声は、黒雪姫のものだ。何をやる気なのか、とハルユキは慌てて顔を上げた。すると、右肩の切っ先を楯に突き立てて制動するや、逆にセイリユウ目掛けて突っ込んでいく黒雪姫の姿が眼に入った。

「だ……駄目です、先輩！」

ようやく動くようになった口で喚きながら、ハルユキはタクムの腕から飛び降りた。よろめきながらも無我夢中で翼を広げ、飛び出そうとしたが寸前で小さな掌に阻止される。

「信じろよ、あんたの《翼》を」

唖いたのはニコだ。やむなく飛翔を中止し、ハルユキはダツシュする黒の王を眼で追った。

その行く手で、高々と振りかざされたセイリユウの尻尾が、青い残像を残して消えた。

眼にも留まらぬ神速の打撃を、たとえ回避したところで衝撃波に脚をすくわれる。といって防衛しようにも、一撃でトレジャーをひっくり返すほどのパワーを無傷で受け止めることなど、

たとえ緑の王でも難しいのではないか。

だが、黒雪姫は、秘蔵も困難なスピードで迫る尻尾に向けて敢然と両腕の剣を広げた。

華奢な黒水晶のアバターが、人形のように吹き飛ばされる様を予感し、ハルユキは歯を食い縛った。

究極の物理攻撃と言えるほどの威力を秘めた尻尾を、黒雪姫は左右の剣で、まるで優しく抱き止めるように包み込み。

——デス・バイ・エンブレインシング！

きらつ、と十字の閃光が瞬き、世界から音が消えた。スロー再生にも似た静寂の中、ハルユキは見た。黒の王を打ち砕くはずの大剣が、そのままアバターをすり抜けるのを。

いや、違う。ブラック・ロースの《終決之剣》が、瑠璃色の鱗に覆われたセイリユウの尻尾を、先端から一メートルほどの位置で真つ二つに断ち切ったのだ。かつて、同じレベル9である初代赤の王レッド・ライダーすらも一撃で全損せしめた、《絶対切断》の二つ名を証す即死技によって。

床板に転がった尻尾の先端が、青い水柱を噴き上げて四散した。

ここであつに、セイリユウが怒りに満ちた咆哮を迸らせた。上空で激しく全身をうねらせ、

四枝の鉤爪で宙を引き裂く。神の震怒に呼応してか、曇天にころころと雷鳴が響き渡る。尻尾による衝撃波攻撃の無効化に成功した黒雪姫は、素早く身を翻すとハルユキたちのほうにダッシュしながら叫んだ。

「どうせ尻尾もすぐに再生する！ その前に、橋の出口まで走れ!!」

声が届いた時にはもう、ハルユキたちは振り向いて走り始めていた。鋼鉄の橋とアスファルトの地面との境界線までは、あと三百メートル。ノーマルな対戦中なら気付かないうちに移動しているくらいの距離だが、この状況では十倍にも感じられるほどに長い。

シルバー・クロウが両腕に二人抱えて飛び、ブラッド・レバードが背中中一人乗せて走れば推進速度を上げられるのだが、それは最後の手段ということになっている。なぜならクロウの必殺技タージは、セイリユウの最強ならぬ最凶の攻撃に対処するためにぎりぎりまで温存しておかねばならないのだ。

いったん下がつた黒雪姫もすぐに合流し、七人はひとかたまりになって走った。重量型のシアン・パイルも、右手の杭を地面に打ち込む反動で加速するテクニクを使って皆に遅れずについてくる。

振り向かずとも、怒れる巨竜が後追してきていることは空気の震えで解る。恐らく、特殊攻撃が来るタイミングはあと一回。それを凌げば、橋の外まで脱出できる。

尻尾による振動波攻撃を無力化したので、《サンダープラス》は今度こそタクムが防いで

くれるはずだし、名称不明の凍結攻撃も頭の中の心意の炎で溶かせる。《ウォータープレス》も、ニコが強化外装を再召喚すれば一度は防衛できる。問題は……

――妾の傷は、そなたらの痛哭で癒すでしょう。

――捧げよ。重ねた時の精華を。

深い反響を帯びた声が頭の芯で響いた。ハルユキは息を詰めながら肩越しに振り向き、それを見た。

セイリユウが掲げた右手の、四本の鉤爪の中心に、黒い球体が生成されていく。わずかに遠く通ったそれは、ゆらゆらと不定形に揺れている。まるで、比重の高い液体が極小の重力源によって球形を維持しているかのようだ。滑らかな表面には、紫色のスパークがちりちりと這いつく回っている。

「――来るぞ!! 《レベルドレイン》だ!!」

黒雪姫の、張り詰めた声が響いた。

ついに、発動したのだ。四神セイリユウが数多持つ特殊攻撃の中でも、最凶と評すべき威力を秘めた大技。かつてレベル7のハイランカーだったアクア・カレントを、わずか一度の戦いでレベル1にまで叩き落とした恐怖の神撃が。



「任せて下さい！ 先輩たちは走り続けて！」

背中への銀翼を広げ、思い切り橋床を蹴って離陸。少し上昇したところで反転し、セイリウユに対峙すると、後ろから声が投げ掛けられる。

「ハル、無理しないで！」

「飛ぶ方向間違えんなよー！」

チュリとニコに右手の親指を立てて応え、ハルユキは精神を集中させた。直後、エネミーの掌中から、どふん、と音を立てて漆黒の球体が発射された。

最初はゆっくり飛翔していた球体は、ハルユキをターゲットイングするや、急激に加速して鋭い掛かってくる。呼吸を止めて限界まで引きつけ、直径一・五メートルほどの黒球が目の前まで迫ったところで、一気に上昇。黒球はぐぐつと重々しい挙動でカーブし、ハルユキを追ってくる。

旧ネガ・ネビュラスによる帝城攻略戦で、セイリウユ攻撃部隊を率いたアクア・カレントは、仲間たちを逃がすために一人で橋の奥深くに残り、この黒い球体を何度もその身に受けてしまった。

カレントからの情報によれば、黒球は命中しても消えずにアバターを呑み込み、その状態でまず蓄積されているバーストポイントが減少を始める。やがてポイントがゼロになると、不可

避の行動不能化と同時にレベルが一つダウン、そこでようやく黒球は消える。それだけでも充分に脅威だが、いっそう恐ろしいのは、レベルダウンした時点で蓄積ポイントも完全に消滅しているため、次に黒球を喰らうといきなりレベルがもう一つ下がってしまうことだ。

逆に言えば、最初のポイント減少段階で速やかに黒球を破壊できればレベルダウンには至らないわけだが、それもかなり困難らしい。黒球は高粘度の液体でできていて、近接物理攻撃はほぼ効果なし。遠隔攻撃も実体弾、レーザーともに貫通してしまし、火炎への耐性もかなりある。で蒸発させる前に中のアバターが死んでしまう可能性が高い。唯一効果がありそうなのは、凍らせて割ることくらいだと思うの、とカレントは言っていた。

残念ながら、今回のメンバーに氷結技を使える者はいない。いっそ、黒球を喰らったらすぐさま死んだほうがマシくらいなのだが、四神のテリトリーで死ねばリカバリーに失敗して無限E.Kに陥る危険もある。結局、最良の対応策は――

「……振り切る……！」

押し殺した声で叫び、ハルユキは再びターンして橋の出口を視界に捉えた。黒い球体も、スパークの尾を引きながら追隨してくる。

球体は、一直線に移動している時は際限なく加速するらしいので、次々に方向転換させてスパークを落とさねばならない。幅三十メートルの橋の上ではかなり困難だが、左右のみならず上下にもターンできるなら……つまり飛行アビリティを持つシルバー・クロウなら、長時間逃

げ回ることもきつと可能。

アクア・カレント救出役はスカイ・レイカーが務め、ハルユキが攻撃チームに残ったのは、必殺技ゲージを温存して「レベルドレイン」に対処するためだ。

「く……おっ……」

不気味なバイブレーションを放ちつつ迫る虚無の液塊から、ハルユキは軽微に逃げ続けた。数秒まっすぐに飛び、黒球が加速してくる気配を感じるや即座にターン。アッシュ・ローラーとの定例対戦でジグザグ飛行のテクニクはかなり鍛えられたが、曲がる方向をミスしてセイリウウに近づいてしまったり、横の上空から左右に飛び出してしまうことは絶対に避けねばならない。空間認識力をフルに発揮し、目まぐるしく方向転換しながらも少しずつ橋の出口へ近づいていく。

下方では、仲間たちも全力のダッシュで境界線を目指している。また、眼には見えないが上空の黒雲の向こうではアクア・カレントを抱いたスカイ・レイカーが着陸コースに入っているはずだ。作戦完了まで、あと二十秒……

——小さく惨き者たちよ。  
足掻くがよい。

どぶん、という水音がかすかに聞こえた。ハルユキの全身を強烈な悪寒が包んだ。

目まぐるしく転回する視界の端に、ちらりと映ったのは——セイリウウの左手から発射され、一直線に加速し始める二つ目の黒球だった。

ハルユキに向かって、ではない。虚無の塊は、貪欲な震動音を響かせながら、橋の上を走る六人に向かって突進していく。

「逃げてください……」

必死のランダム飛行を続けながらも、ハルユキは悲鳴じみた声を押し出した。疾駆する黒雲が一回転振り向き、迫る黒球を視認した。だが、もう遅すぎる。充分に直線飛行した黒球は、銃弾の如きスピードを得て、六人の誰かを呑み込み……

深紅の影が、稲妻の如く疾った。

それは、いつの間にかビーストモードに変身していたブラッド・レバードだった。豹型アバターは、急角度のターンからしなやかに跳躍し、自ら黒球に身を投じた。他の五人が、驚愕の気配を放ちながら足を止めた。

レバードを捕らえた黒球は、表面のスパークを脈打たせ始める。周期的に光量が増減するその様は、ある種の吸血生物の蠕動を思わせる。いや、実際に吸い取っているのだ。レバードが長い時間をかけて蓄積したビーストポイントを、それがゼロになった時、彼女をレベルダウンの悪夢が襲う。

「バドッ……」

ニコの悲鳴が迸った。黒球に吞まれてうずくまるレバードに駆け寄ると、そのままスパークする液体に手をつつもうとする。黒雪姫が制止しようと手を伸ばすが届かない。細く小さな指が、漆黒の球体に触れようとした、その寸前。

レバードが、猛々しく吼えた。四肢の爪で鋼鉄の橋床を握り、深紅の豹はニコたちを引き離して走り始める。体を包む球体の脈動は続いているので、レバードの蓄積ポイントに恐るべきスピードで減少中のはずだ。今にもポイントがゼロになり、昏倒と同時にレバダウンしてもおかしくないのに、豹の力走は止まらない。橋の境界線は、もう百メートルを切るところまで近づいている。

上空でジグザグ飛行を続けながらも、ハルユキは疾駆するレバードと、彼女を追って走る五人を視界に捉えていた。胴体を黒球に吞まれてもお美しい猛獣型アバターを見詰めていると、不意に耳の奥で聴く声があった。

——バドが今日までレベルアップを封印してきたのは、まさにこのためだからな。

無制限中立フィールドへのダイブ前に、ニコが梅郷中の生徒会室で口にした言葉だ。かなりの古参バーストリンカーであり、対戦の聖地アキハバラ・バトル・グラウンドで勇名を馳せた闘士でもあるブラッド・レバードが、いまだレベル6である訳を仄めかしていたらしいのだが、その時のハルユキには意味が解らなかった。

《このため》——つまりアクア・カレント紋出作戦のために、レバードはレベルを6に留め置いてきた。対戦やエネミー狩りで入手するバーストポイントを、消費せずに蓄積させ続けてきた。

長い努力と忍耐は、いまこの瞬間のために存在したのだ。黒球に捕らえられてもレベルダウンせず走り続けられるのは、それが理由だ。膨大な蓄積ポイントを緩衝材にすれば、セイリュウ殿國最後の攻撃に一定時間耐えられる。全ては、いつかアクア・カレントを四神の祭壇から救い出す、その時のために。

瞬間、ようやくハルユキは悟った。

黒のレギオンの幹部集団《四元素》の一人アクア・カレントと、赤のレギオンの幹部集団《三獣士》の一人ブラッド・レバードの間隙。別レギオンに所属しながら、どこか似通った雰囲気を持つあの二人は《親子》なのだ。

「……バドさん！ がんばれ……!!」

鋭角ターンを繰り返しながら、ハルユキは叫んだ。

その声が聞こえたのかどうか、レバードはひときわ激しく床板を蹴り付け、高く高く跳躍した。軌道の頂点に達した瞬間、空中にかすかな虹色の波紋が広がった。レバードがそれを取り上げると同時に、胴体を含み込んでいた漆黒の球体が、無数の飛沫を散らして分解した。

深紅の豹は、空中で一回転してからしなやかに着地した。四肢の爪が噛んだのは、黒ずんだ

鉄板ではなく、ひび割れた灰色のアスファルトだった。

わずかに遅れて、ハルユキも鉄橋と地面の境界線上を通過した。背後で、黒球がばしゃつと音を立てて飛び散る。危機を脱したのを感じた途端に全身から力が抜け、ハルユキは半ば墜落するように高度を落とした。

とてもスマートな着陸はできず、両足が接地するとそのままがくりと四つん這いになってしまいが、また倒れるには早い。黒雪姫たち五人が脱出する前に、セイリユウがあと一回攻撃してくるかもしれないのだ。立ち上がろうと、震える四肢に力を込めていると――。

「……大丈夫」

すぐそばで、静かな声が響いた。顔を上げると、ブラッド・レバードが目の前にいた。同じように両手両足を地面につけていながら、どこまでも優美かつ雄々しい豹型アバターの視線を追って、ハルユキは振り返った。

すると、五人の先頭を走るアーダー・メイデンが、今まさに橋から飛び出したところだった。続いて、ライム・ベルとシアン・バイル。最後に、ブラック・ロースとスカレット・レイン。どうやら四神セイリユウは、連射した「レバードレイン」の黒球が両方四散した時点で、追跡を停止したらしい。

四つん這いになったまま、ハルユキはわずかに百メートル先でホバリングする超級エネミーを見上げた。

冷たく光るサファイア色の両眼には、もういかなる感情をも読み取れなかった。テリトリリーから出たからだろうか、何度が頭に響いた声も聞こえない。しかしそれでもハルユキは感じた。粗瑣の巨竜が、いずれの再会を予告するかのように薄く唸ったのを。

長い胴体が波打ち、重々しく向きを変え始める。鉤爪の生えた四肢と四対八枚の小翼が順に視界を横切り、最後に現れた長い尻尾の、黒雪姫の必殺技に断ち切られた先端が音もなく再生する。

ゆるやかに飛び去りながら少しずつ実体を薄れさせていく巨竜を、七人は声もなく見送った。やがて、超級エネミー「四神セイリユウ」は、五百メートル彼方の祭壇に吸い込まれるようにその姿を消滅させた。最後に祭壇四隅のかがり火が順に消えると、世紀末ステージに静寂が戻った。

「いや。」

まだ、何か音が聞こえる。風鳴りのような、草笛のような、高い共鳴音。

地面に手をついたままだったハルユキは、ふらつきながら立ち上がり、空を仰いだ。音は、分厚く垂れ込める黒雲の向こうから聞こえてくる。少しずつ、近づいてくる。

数秒後、雲の中に青い光が小さく瞬く。流星のように煌めきながら、綿毛のようにゆっくりと降りてくる。皆が息を詰めて見上げるなか、ついに雲を突き抜けて現れた光の源は――最小の出力にまで絞られた、ブースターの噴射炎。

近づくにつれ、ブースター型強化外装を背負う空色のアバターと、その腕に抱かれた水色のアバターの姿が夜空に浮かび上がる。青い光を照り返しながら、二人はゆっくり、ゆっくりと降りてくる。

地面まであとほんの五メートル、というところで噴射炎が不規則に揺らぎ、消えた。ブースターのエネルギーゲージが尽きたのだ。ハルユキは啞然に飛び上がると、落下してくる二人を両腕で抱き止めた。

すぐ目の前に、微笑を浮かべる二つのフェイスマスクがあった。片方の口許が動き、穏やかな囁き声が響いた。

「ありがとう、鴉さん」

もう片方のアバターは無言だったが、流水装甲の奥で青白いアイレンズをそっと瞬かせた。二人を地面に下ろし、ハルユキは数歩下がってチユリとタクムの隣に並んだ。頭の中では、たったひとつのフレーズだけが何度も繰り返されている。

……帰ってきた。帰ってきた。帰って、きたんだ。

……二年半以上もセイリユウの禁壇に封印されていた《四元素》の一人、八ヶ月前にハルユキを全損のピンチから救ってくれた《用心棒》、《唯一の》《アクア・カレント》が、ついに、本当の意味でネガ・ネビュラスに……いや、加速世界に帰ってきたんだ。

涙ぐみながら見詰める視線の先で、流水のアバターはぐると一同を見回すと、最後に少し

離れたところであずくまる深紅の豹に相対した。水音を響かせながら歩み寄り、臨みて、豹の首に両手を回す。顔を伏せ、強く、強く抱き締める。

牙の生えた口が動き、《親》に向けて短い言葉を発した。

「おまえり、アキ」

カレントはそつと頷き、《子》と同様に短く答えた。

「ただいま、ミヤア」

そのまま無言で顔を寄せ合う二人を、残る七人は静かに見守った。

数秒してからカレントが体を起こし、レバードが《シェイプ・チェンジ》コマンドで人型に戻ると、ニコが左手に右拳をばちんと打ち付けて叫んだ。

「よーっし、これでばっちりミッション・コンプリートだな！」

それを聞いた途端、急激に緊張が解けて、ハルユキはへなへなと座り込みそうになった。誰かが背中を支えてくれたので、てっきりタクムだろうと思って遠慮なく寄りかかりながら長く息を吐く。しかし直後、耳許で予想外の声が聞こえた。

「よく頑張ったな、クロウ」

びくっと振り向くと、そこにあつたのは黒の王の鎧面ゴグルだった。慌てて自分で立とうとしたが、黒雪姫が全員に向けて話したためで離れるタイミングを失う。

「みんなも、本当に頑張ってくれた。四神セイリユウの猛攻に耐え、こうしてカレントを取り

戻せたこと……そして新たな封印者はもちろん、一人の死者も出なかったことは、全員の奮闘が具現化した奇跡に他ならない。……………だが……………」

そこで少し言葉を切り、黒雪姫はニコを、次いでレバードを見た。

「残念ながら、こちらは無傷とはいかなかった。まずレイン、お前の強化外装をほぼ全壊させてしまったことを謝罪し、また礼を言おう。あの装甲がなければ、とてもあれほど深く敵陣に突入はできなかった」

すると赤の王は、照れ臭そうに頭部のアンテナを動かしながら答えた。

「ま、まあ、なんだ、またカレーパーティーやってくれりやそれでチャラにしてやるよ。あ、でもさすがに三連続カレーはなあ……………次はハンバーグかなあ……………いやいつそ和風にお好み焼きパーティー……………」

「……………ン？ 二連続じゃないのか？」

「何言っただ、きのう」

そこで赤の王はびたりと言葉を止め、ハルユキもびくつと体を硬直させた。

昨日、つまり六月二十九日の領土戦後にニコが有田家を急襲し、ハルユキと二人でカレーを手作りし、あまつさえ泊まっていたことを知っているのは、当事者の他には恐らくパドさんだけだろう。

不自然に沈黙するニコと、背中を支えられたままフリーズするハルユキを黒雪姫は疑わしげ



に眺めたが、すぐに会話を再開した。

「……まあ、ハンバーグでもお好み焼きでも仏跳ねでも構わんが……それも全てが終わってからだな」

「そ、そうそう。だいたい、あたしの強化外装は再ダイブすりゃ復活するしさ。……でも……」

赤の王は言葉を切り、緑色のアイレンズを、誰よりも信頼しているであろう腹心の部下に向けた。

黒雪姫も、カレントと寄り添って立つブラッド・レバードを見ると、ゆっくりと頷く。

「……そうだ。レインの損害もさることながら、ブラッド・レバードの受けたダメージは我々の想像を絶するものだろう……」

「……どういふことなの、ロータス？」

遙か高空を飛んでいたためにその場を見ていない機子<sup>キコ</sup>が、小首を傾けながら訊ねる。黒雪姫は眼を伏せ、押し殺した声で説明した。

「セイリュウは、最後の最後で『レベルドレイン』を撃ってきた。予定通り、クロウが決死の飛行で球体をエリア外まで引っ張ってくれたんだが……まさか二連撃してくるとは、私も予想できなくてな……」

「……！ それじゃあ、バドは……」

「ああ。二発目の球体は、レバードがその身を挺して防いでくれたんだ。彼女はドレイン状態のままエリア外まで走り、レベルダウンこそ免れたものの、恐るべき量の蓄積ポイントが失われてしまったはずだ……」

その言葉に、皆は声もなくブラッド・レバードを見詰めた。

深紅の豹人は、しかしまったくなんでもなしに肩をすくめ、言った。

「NP。もともと、この日のために溜めてたポイント。また稼げばいいだけの話」

その言葉に、真っ先に反応したのはアクア・カレントだった。掌をレバードの頬に押し当て、あきらは思わぬ言葉を呟いた。

「だから……私のことは忘れてって、言ったのに」

「（観）を忘れるのは無理」

「相変わらず、ミヤアは意地っ張りなの」

掌を離して一歩下がると、あきらはまずバドさんに、ついでニコに深々と頭を下げた。

「ありがとう、ブラッド・レバード、そして赤の王スカーレット・レイン。私を助けるためにレバードが消費したポイントは、私が責任を持って全回復させます。少し時間がかかるかもしれないけれど、必ず」

その宣言に、バドさんとニコが反応するよりも早く風子が言葉を繋げた。

「わたしも協力するわ。目標期間、一週間ね」

すかさず、<sup>ツ</sup>両手<sup>ツ</sup>を上げる。

「私もお手伝いするので。エネミーさんはお気の毒ですが、狩って狩って狩りまくっちゃうのです！」

「ならば私も本気を出してしまおうぞ。かつて渋谷エリアで《<sup>シノビヤ</sup>滅亡者》と呼ばれた狩りの腕、存分に発揮させて貰う」

と、黒雪姫までが名乗りを上げれば、ネガ・ネビュラスの若手三人も黙ってはいられない。タカムとハルユキ、チユリは同時に一歩前に出ると、口々に叫ぶ。

「もちろん、ぼくも微力ながらお手伝いします！」

「ぼぼ僕だって、ごく一部で《エネミー偵察機》と呼ばれてるサーチ能力を……」

「偵察機なんか、あたしの《<sup>音響</sup>響召喚》があればお呼びじゃないわよ！ がんがんエネミー呼んじやうし、ダメージもがんがん回復しやう……」

左手の大型ベルを振り回しながら威勢良く叫んだチユリが、いきなり声と動きをびたっと停止させたので、ハルユキは何事ならんと幼馴染を見た。

黄緑色の魔女型アバターは、時間停止の魔法でも掛けられてしまったかのように完全に静止している。だが、猫の眼を思わせる形のアイレンズの内側では、無数の星がきらきら渦巻いている。これは、意外に頭脳派なところもあるチユリが猛然と頭を回転させている証拠だ。

いったい何を思いついたんだ、とハルユキが顔を覗き込もうとした、その時。

「あ……………ああ……………ああ……………つ！！」

ライム・ベルは、いきなり素っ頓狂な喚き声<sup>うなり</sup>を上げるとぐるぐるあたariを見回した。

「ど、どうしたのチーちゃん！」

仰天するタカムに視線を固定するや、チユリは続けて叫ぶ。

「げっ、げーじ！ 必殺技ゲージちょうだい！ すぐ、今すぐ！！」

「え……………うん、じゃあ何かオブジェクトを壊して……」

「そんなヒマない！ あーもう、ハル、タツくん！ そこに座って！！」

びしっ！ と右手で地面を指差されれば、瞬時に並んで正座してしまふハルユキとタカムである。その前に仁王立ちとなったチユリは、左手の強化外装（クワイアー・チャイム）を高々と振りかざすや――

りこりこり――ん！！

と荘重なサウンドを響かせつつ、二人の頭を右から左、また右へとぶん殴った。

ハルユキの体力ゲージが、一気に二割ほど持っていられ、視界に黄色いヒヨコの幻覚がびよびよ回転する。無制限フィールドでは他人のゲージは見えないが、タクムのダメージも同程度だろう。突如の暴力シーンに黒雪姫たちが唖然とするのも意に介せず、チユリはちらっと自分のゲージを確認すると、再度叫ぶ。

「もっかい、行ける！！」



「う……う……うん、なんとか」とハルユキが頷き、  
「も、もちろんだよチーちゃん!」とタクムが胸を張った瞬間、

「りこりこり……ん!!」

「見事なクワイアー・チャイムだが、打撃ダメージを与えると同時にスタンも引き起こすかなり優秀な武器でもある。計二往復、しかも頭を痛打されたタクムとハルユキは半ば昏倒し、上体をぐらんぐらん揺らした。幸い、そこでチュリの必殺技ゲージは満タンになったらしく、勢いよく振り向くと同時に声を張り上げる。

「レバードさん! お願ひ、あたしを信じて!!」

……いまのバイオレンスっぷりを見せつけといて、信じてと来たもんだ。

とハルユキは両手で頭を支えながら考えた。だがバドさんは、さすがの度胸を見せてこくりと頷く。

「K」

「じゃあ、行くね! (シトロン) ——」

ぐるん、ぐるん、と左手のベルを二度振り回し、チュリは高らかに発声した。

「—— (コ——ル) !!」

鋭く振り下ろされたクワイアー・チャイムから、緑色の光が迸ってレバードを包んだ。  
ここでようやくハルユキは、そして恐らくタクムも、幼馴染の意図を悟った。

あまりにもシンプル、それゆえにこの場の誰も思いつかなかったリカバリー策。チュリは、巻き戻そうとしているのだ。ブラッド・レバードが受けたダメージ……体力ゲージではなく、セイリユウに奪われた、蓄積バーストポイント。

ライム・ベルの必殺技 (シトロン・コール) には二つのモードがある。

モードⅠは、対象アバターの状態を (時間単位) で巻き戻す。そしてモードⅡは、(ステータス変化単位) で巻き戻す。つまりモードⅠなら失った体力ゲージや必殺技ゲージを回復でき、モードⅡなら敵が召喚した強化外装をストレージに戻せるわけだ。どちらの力もタッグ戦や領土戦で恐るべき威力を発揮し、ついた二つ名が (時計の魔女)。

今回、チュリが使ったのはモードⅠだ。だが以前、ハルユキは本人から聞いたことがある。いかなシトロン・コールでも、レベルアップ関連の変化は巻き戻せない。と。つまり、レベル上昇操作をキャンセルして蓄積ポイントを復活させたり、レベルアップ・ポナスとして獲得した必殺技やアビリティをキャンセルして再選択させたりすることは不可能なのだ。

ならば、セイリユウに奪われたバーストポイントを巻き戻すこともできないようにハルユキには思える。レベルアップはそれが発生した時点で (ブレイン・バースト中央サーバー) 内のアバターデータにセーブされ、バーストリンカー個人の能力ではもはや干渉できない。それはレベルダウンも同様のはず……

——いや。

違う。ブラッド・レバードは、蓄積ポイントこそ奪われたものの、レベルダウンには至っていないのだ。ポイント減少の対価として何も得ていないのだから、それを巻き戻すことも可能なのではないか。正確には、四神セイリュウが吸い取ってどこかの袋に溜めたポイントは減るのだから、そんなのは知ったことじゃない。

「……………チュウ!!」

ハルユキは無我夢中で立ち上がり、ベルから光を放ち続けている幼馴染の両肩を後ろから支えた。

「できる! お前なら、きっとできる!! がんばれ…………!!」

シトロ・コールドは必殺技であつて心意技ではないのだから、ハルユキの励ましなど、何の役にも立たないのかもしれない。それでもハルユキは、両手にありつたエネルギールをかき集め、チュウリに与えようとした。

以前、ハルユキが〈略奪者〉ダスク・ティカーに飛行アビリティを奪われた時も、チュウリはたった一人で考え、行動し、最後には翼を取り戻してくれた。チュウリはそういう人間なのだ。我儘のままに振る舞っているようで、本当は誰よりも周りのことを気にかけている。たぶん、バーストリンカーになった動機だって、半分以上はハルユキやタクムのためなのだ……。

「……………チュウ!!」

ハルユキが胸の奥でそう呼びかけた瞬間、ライム・ベルの肩を掴むシルバー・クロウの両

手に仄かな銀光が宿り、触れ合う装甲を通じて流れ込んだ。だがハルユキもチュウリも、恐らくは黒雪姫たちも、その現象には気付かなかった。

なぜなら、緑のライトエフエクトに幾重にも包まれたブラッド・レバードが、不意に両手をそっと空へ差し伸べたのだ。まるで不可視の何かを受け止めようとするかのよう。

否、ハルユキにも見える。夜空から降り注ぐ、白い光の粒たちが、雪の結晶のように儼く、しかしどこか温かい光の粒子は、レバードの両手に次々と舞い降りる。掌の装甲に触れると、一瞬の輝きを残して消える。

不思議な雪はしばらく降り続き、やがて止まった。直後、チュウリの必殺技ゲージも尽きた。

ライム・ベルがゆつくりと強化外装を下ろし、ハルユキが肩から手を離して一歩下がっても、レバードはすぐには動かなかった。八人が固唾を呑んで見守る中、深紅の豹頭アバターは左手だけを更に動かし、インストメニールを開いてページを繰った。目的のデータを確認するやメニールを消し、猛獣のそれを模した口許に、かすかな笑みを滲ませた。

「ありがとう、ライム・ベル」

T.H.X.、ではない感謝の言葉を口にしたレバードは、深々と一礼してから続けて言った。

「戻ってきた。セイリュウに奪われたポイント、全部」

短い沈黙のあと――。

わあつ、と全員が歓声を上げた。ニコとハルユキが両手でガッツポーズし、タクムとあきら

はうんうんと頷き、レイカーと説は揃って拍手する。そんな中、黒雪姫はふわりとチユリに近づくと、感に堪えぬように囁き掛けた。

「……ベル、いや、チユリ君。キミにはいつも驚かされるよ……。私からも礼を言う、キミのおかげで、アクア・カレント救出作戦はこの上ない形で終わることができた。これからも、その発想力と行動力で、私と仲間たちを助けてくれ。……ありがと」

すっ、と掲げられた左手の剣の側面に、チユリは「クワイアー・チャイム」を軽く打ち合わせ、照れたような声で言った。

「べ、べつにあたし、いっつも思いつきで突っ走ってるだけだし……でも、ほんと良かったです、巻き戻しが間に合って。技を使ってる時は、必殺技ゲーがぎりぎり足りないかなって思っただけ……」

「……そうか……」

そこで黒雪姫はなぜかちらりとハルユキを見たが、すぐに視線をチユリへ戻し、頷いた。

「いや、チユリ君の機転のおかげさ。本当に間に合ってよかった……」

「んなこと言って、面倒くさいエネミー狩りやらずに済んで超ラッキー！ とか思ってたんだねーのか……」

感動シーンをぶちこわすニコの混ぜった返しに、黒雪姫はくるっと振り向くと言いつ返す。

「そ、そんなわけがあるか！ 何なら今回のミッションが全て終了してから、朝寝時間いっば

いまで狩りをして私も私は一向に構わんか！

「お、言った黒いの！ そんじやいっちゃ、久々の四大ダンジョンはしこッアを……」

「げえっ、か、カンベンしてください！」

ハルユキとタタムが異口同音の悲鳴を上げると、ニコはにっひつひと本気なのか冗談なのか解らない笑い声を発してから、居住まいを正して自分もチユリに頭を下げた。

「あたしからも礼を言うよ、ベル。ポイントを回復させてくれたことだけでも、バドのために一生懸命になってくれたことにもな」

軽くチユリの腕を叩き、数歩移動してブラッド・レバードに向き合う。

「んで、バド。どうすんだ？」

「……どうするって、何を？」

とハルユキは小首を傾げ、他の黒メンバー七人も赤の二人を見守った。バドさんは〇・五秒ほど考える素振りを見せてから、軽く頷き、言った。

「上げる、今すぐ」

「……上げるって、何を？」

とハルユキが反対側に頭を傾けた時にはもう、バドさんは素早く左手を閃かせ再びインストメニユーを開いていた。短い鉤爪の先で窓を何度か叩き、少し間を置いてから、ぼちっと何かのボタンを押す。

するとアバターの足許に、虹色に移ろう光のサークルが出現し、そこから同じくレインボーカラーの光柱が立ち上ってレバードの全身を包んだ。同時に、クルルかつエキサイティングな旋律が鳴り響く。ハルユキも、過去に四回ほど聞いたサウンドだ。すなわち——レベルアップ・ファンファーレ。

「え……ええっ!?」

ハルユキは仰天して叫び、ニコを除く全員も程度の差はあれ驚きの反応を見せた。

しかし、バドさんの左手はそこで止まらなかった。人差し指がもう一度持ち上げられ、もう一度ボタンを押す。またしても、光と音の祝福が細身のアバターを包む。

「え……ええええ——っ!?」

すでに限界まで仰け反っていたハルユキは、追加の驚きに耐えられず尻餅をついてしまった。右のチユリと左のタクムも、倒れはせずとも奇妙なポーズで硬直し、横一列に並ぶ黒雪姫たちすら立ち尽くしたまま絶句している。

無理もない。ブラッド・レバードは、たった数秒のあいだに、レベルを二つも上昇させたのだ。レベル1の新米が3になるのだって大変なステップアップなのに、バドさんはメニュー操作前の時点でレベル6。ということは、そこから一つ上げて7、更にもう一つ上げて——8だ。

レベル8。その上はもう《純色の七王》だけという、真のハイランカー。そこまで到達した

バーストリンカーを、ハルユキは数えるほどしか知らない。現ネガ・ネビュラスでは、副長たるスカイ・レイカーただ一人。

静寂の中、虹色のライト・エフェクトが消滅し、ブラッド・レバードは無造作に左手を下ろした。

レベルアップ・ボーナスのアビリティや強化外装の取得操作は行っていないので、外見的には何も変わっていないはずだが、ハルユキはバドさんの立ち姿に、一歩前には存在しなかった迫力のようなものを確かに感じた。

長い尻尾をひゅんと揺らし、深紅のアバターは音もなく歩き始めた。座り込むハルユキの目の前を横切り、黒雪姫の隣に立つ、空色のアバターの前で足を止める。

ネガ・ネビュラス副長、《超空の流星》スカイ・レイカーに向き合った《血まみれ仔猫》ブラッド・レバードは、静かな声で、短く言った。

「お待たせ、レイカー」

その言葉に、楓子は同じく簡潔に応じた。

「とうとう、ここまで来たわね、レバード」

二人のやり取りの意味を、ハルユキは感覚的に理解した。

レバードとレイカーは、かつて領土戦や通常対戦で数限りない激闘を繰り広げたライバル同士だったと聞いている。きっとバドさんは、楓子のレベルに迫りつくために大変な努力をした

のだから。だが三年前の夏、田ネガ・ネビュラスは崩壊し、二人の対戦も途絶えた。レバードは、密城に封印されたアクア・カレントを救出するためにレベルアップを停止し、レイカーはレジオン崩壊の責任は自分にあると断じて対戦から身を引いた。

そして、『密城の戦い』から二年と十ヶ月後となる、今日。アクア・カレントは救出され、ブラッド・レバードはずっと貯め続けていたポイント消費してレベル8に……スカイ・レイカーと同じ高みにまで到達した。二人のやり取りが意味しているのは、そういうことだ。

向かい合って立つ楓子とバドさんの体を、瞋（こ）怒（り）の光が包んだ。別に心意技を発動させようというのではなく、アバターの中に高まる闘志と歓喜が、オーラとなって溢れ出ているのだ。

二人は同時に右手を持ち上げ、拳（こぶし）を作り、ゆっくりと触れ合わせた。圧縮されたオーラが弾け、空色と深紅のスパークを小さく瞬（きら）かせた。

もちろん今ではないが、二人は近いうちに戦うのだから。磨き抜いた技、積み重ねた経験、ハーストリンカーとしての誇り、それら全てを拳に込めて、たくさん、たくさん語り合うのだろう。その戦いを、ハルユキが観戦できるか否かは解らないが、たとえできなくても一つだけ確信できる。戦いの後、二人の絆はいつそう強くなっているだろう、ということだけは。

二人のレベル8（eight）から眼を外し、ハルユキは無意識の動作で隣に立つシアン・バイルを見た。するとタクムもようど顔を向けてきて、しばし視線が交錯する。

言葉に出さずとも、幼馴染の考えていることは明瞭に伝わった。装甲トレイラーで杉並エ

リアから帝城まで移動する間に確め合った『対戦の約束』を、もう一度思い出しているのだ。お互いがレベル7になったら、死力を尽くした本気の対戦をする。その結果として、何を心得、何を失おうとも……。

「……………」

自分の思考に驚かされて、ハルユキは銀面の下で両眼を見開いた。シルバー・クロウのゾーダルがハーフミラーでなければタクムに誘（よ）われていただろうが、幸い幼馴染は何も気付いた様子にはなかった。一度ぐっと頷きかけてから、顔を前に戻す。しかし頭の中は、数秒前のままロククされている。

……失う？ 僕とタクが対戦して、どっちが勝ってどっちが負けても、何かを失ったりするはずがない。これまでも……きつと、これからも。

自分にそう言い聞かせて、ハルユキは根拠のない思考、あるいは予感を振り払った。

ほぼ同時に、楓子とバドさんも拳を下ろした。深紅の豹人はひらりと身を翻し、ニコの右斜め後ろの定位置に戻る。

出発時より一人増えて九人となったハーストリンカーたちは、誰からともなく立ち位置を整えて大きな輪を作った。指揮官たる黒雲姫がひとつ頷き、右手の剣を掲げて、高らかに宣言した。

「第一ミッション、『アクア・カレント救出作戦』はこれにて任務達成とする。みんな、

素晴らしい働きだった。最後に……改めて、おかえり、カレン」

黒雪姫の声に、ニコやバドさんまでもが「おかえり!!」と唱和した。

あきらは、フェイスマスクを覆う水流の奥でアイレンズをゆっくりと隣に寄せ、一音一音を噛み締めるように言った。

「……ただいまなの、みんな」

水の膜を通して、あきらの両眼が温かく潤んでいるように見えたのは、きっとハルユキの錯覚だろう。

## 3

作戦後処理、すなわち全員の体力回復と、セイリウウの猛攻撃で穴だらけにされてしまったニコの強化外装のリフレッシュに、およそ一時間を要した。

体力回復もリフレッシュも、手段はまったく簡単だ。東京駅の離脱ポイントからいったん現実世界に戻り、即座に再加速。追加で10ポイントを消費するものの、それでデュエルバッテリーも強化外装も完全に再生される。ハルユキたちの体感時間はわずか数秒なのだが、《アンリミテッド・バースト》コマンドを叫んでいる間に加速世界ではその一千倍の時間が経過してしまふというわけだ。

ハルユキがブレイン・バースト以前にブレイしていた幾多のオンラインゲームと比べれば、再接続一発で体力全快、装備回復はかなりの親切仕様とも思えるが、問題も一つある。それは、ポータルを使うと、位置情報までもリセットされてしまうことだ。

ゆえに、ハルユキが再び加速世界に降り立った時、周囲の光景は東京駅ではなく梅郷中学校の校庭に戻っていた。しかもたった一時間の離脱中に《変遷》があったらしく、世紀末ステージの夜が明けて、グラウンドは燃えるような黄色に染まっている。

気が急ぐあまり、BBプログラムに認識される限界のスピードでコマンドを叫んでしまった

ので、周りにはまだ誰の姿もない。コンマ一秒の先走りがこちらでは百秒に拡大してしまおうので、仲間たちが揃うには一分と少しかかるだろう。

ハルユキは体の向きを変え、ギリシヤの神殿遺跡ふうの柱まいに變化している梅郷中の校舎を見やった。第二校舎一階東側の一角に、じっと眼を凝らす。

現実世界のその場所に存在する保健室では、いまこの瞬間も、大切な友達である日下部輪が懸命に戦っている。デニエルアバター（アッシュ・ローラー）の分身たるアメリカンバイクに寄生するISSキットからの精神干渉に、必死に耐えている。

輪が文化祭の最中に倒れたのは、男子剣道部の集団演武を観た直後だったので、現実時間ではまだ三十分と経っていない。しかし、ISSキットは感染が拡大すると同時に個々の干渉力も増大しているのので、支配を受け入れずに抗い続けている輪にとっては、一分が何倍もの長さに感じられているはずだ。

ニューロリンカーを外そうが電源を切ろうがキットの干渉を防げないことは、タクムが寄生された時に確認されている。理屈は見当もつかないが、ニューロリンカーの中にISSキットが存在する限り……あるいはブレイン・バースト中央サーバーにキット本体が存在する限り、現象は続く。

「……日下部さん。もう少しだけ頑張ってください」

ハルユキは、現実世界の輪に向けて語りかけた。

「カレンさんが戻ってきたし、バドさんもレベル8になったんだ。みんなですぐにメタトロンをやっつけて、ISSキット本体を破壊してくるから……そしたら、また一緒に文化祭を観て回ろう。案内したいところ、まだたくさんあるんだ。あと、お兄さん……アッシュさんをちゃんとみんなに紹介したいし……だから……だから……」

懸命に言葉を連ねるが、胸の奥の焦燥は去らない。アクア・カレント救出作戦に集中するために無理やり押さえつけていたものが、今になって溢れ出そうとしているかのようだ。

もし……万が一、キット本体の破壊に失敗すれば。

輪への精神干渉を止める手段はもう、彼女がバーストリンカーでなくなること……アッシュ・ローラーが消滅することしか残されていない。加速世界で初めて戦い、初めて負け、初めて勝った相手であるアッシュは、今やレギオンの仲間たちと同じくらい大きな存在だ。ハルユキが災禍の鎧を道連れにポイント全損しようとした時、懸命に引き留めてくれた輪も同様。二人とも、かけがえのない大切な友達なのだ。

失敗は許されない。絶対に。ハルユキの（光学誘導）ナビリティがメタトロン攻略の成否を分けるなら、たとえ我が身と引き替えにしても、あの天地を引き裂くが如きレーザー攻撃を弾いてのけなければならぬ。

第二校舎の一角を見詰めながら思い切り両拳を握り締めていると、背後でアバターの出現音が響いた。振り向くと、光の輪の中から飛び出したのはライム・ベル——チユリだった。ハル

ユキを見つけるや、

「急ぐ気持ちは解るけど、ハル、コマンド早口すぎ！もしつつかえでもしたら、逆にみんなを何分も待たせるんだからね！」

と堂に入ったお説教を炸裂させる。

ハルユキは、現実世界の端に向けて最後にもう一度励ましの言葉を念じてから、威勢よく反論した。

「へへん、オレ、BBコマンドと技名発声だけは嫌んだことないもんね！」

「ほんとかなあ……」

胡散莫そうな眼で見られると、一回くらいはあったかもしれないような気がしてきて、強引な話題変更を試みる。

「そ……それより、(変遷)で夜が明けたぞ。なんだか、朝日見ると反射的に眠くなるよな！」

ふわー、とあくびの真似事などしてみたが、チユリは目付きをいつそうジツトリさせながら予想外の突っ込みを返してきた。

「あんたのいた世界じゃ、太陽は西から昇るわけ？」

「へっ……」

慌てて顔を左右に振り動かすと、真つ赤な太陽は確かに新宿方面ではなく三鷹方面の地平線近くに浮かんでいる。ハルユキが朝焼けだと思ひ込んだ空のオレンジ色は、実は夕焼けだっ

たわけだ。しかし、ここで素直に勘違いを認めては先輩バーストリンカーの法尊に笑われる。

「あ、あれがほんとの太陽かどうか解らないだろ！もししたら、八王子あたりで燃えてるでっかい火の玉かもしれないし！」

苦しい反論を試みると、チユリはますます冷たい眼になりつつ、ハルユキの内角高めを鋭く挟つた。

「そんなもの燃えてたら、八王子エリアでダイブしたバーストリンカーが即死しちゃうでしょ。だいたいこれ(責任)ステージじゃん。黄昏って夕暮れ時のことなんだから、あれが夕陽じゃなくて何なのよ！」

「……ご、ごもつとも……」

苦もなくやり込められたハルユキが、両手の人差し指をぐりぐりしてイジケ状態を表現していると、いつの間に出て現れたのか、背後から黒雪姫の笑いを含んだ声が響いた。

「ふふ、私もあれは太陽だと思うが、しかしハルユキ君の主張も単なる与太話とは言い切れないぞ」

「へっ？ どういうことですか、先輩？」

ハルユキが振り向くと、ちょうど他の仲間たちも立て続けに現れるところだった。九人全員が揃ったのをちらりと確認してから、黒の王は剣状の両手で器用に腕組みして語った。

「無制限フィールドには、ものすごくたまーにだが神獣級エネミー(太陽神インティ)と



いうのが現れてな……。こいつが何と言うか、地上をころころ転がるでっかい火の玉としか表現できない代物で、火属性の攻撃は吸収するし、水属性攻撃も蒸発させるし、おまけに近づけば高熱ダメージで即死してしまう。恐らくインティを倒せたレギオンは、いまだかつて存在しないのではないかな……」

「で、できれば一生出くわしたくないです」

「あたし、それ見たーい！」

ハルユキとチユリが正反對の意見を表明すると、水音を鳴らして歩み寄ってきたあきらが、何気ない口調で言った。

「昔、一度だけインティと戦ったことがあるの」

「は……本当か、カレン。私も遠くから見たことしかないぞ」

「グラフと二人でエネミー狩りをする時に見つけたの。私は逃げようとしたんだけど、あのハ……無鉄砲が、ナイスな作戦があるって言い出して……」

あきらが口にした名前は、ネガ・ネビュラス（四元素）最後の一人、グラフアイト・エッジのことだろう。帝城攻略戦では北門攻撃部隊を率いて四神ゲンプと戦い、誰やあきらと同様に無限Eに陥ってしまった。ハルユキが知っているのはそのくらいだが、どうやらかなり挑戦心に溢れた人物だったらしい。

いつの間にか話の輪に加わっていた楓子と謡はフェイスマスクに少々微妙な表情を浮かべ、

ニコはにやにやと笑い、バドさんは呆れ顔をしている。あきらは一同にちらりと眼を向けると、古の冒険譚を続けた。

「……グラフは、インティを大量の水があるとこまでブルして、そこに落っこして火を消す作戦を立てたの。私たちがいたのは青山だったから、二キロ離れた赤坂御用地まで死ぬ思いで引っ張っていった、どうにか池に落とすところまでは成功したの」

「……そ、それで、インティの火は消えたんですか……？」

ハルユキの後ろからタクムが興味津々な口調で訊ねると、あきは小さく肩をすくめた。

「火は一瞬だけ弱まったけど、差し渡し二百メートルもある池の水があつという間に沸騰して剣で攻撃したグラフが蒸し焼きになったから置いて逃げたの。蘇生したら、あのバ……お調子者、次は（暴風雨）ステージに変遷するまで引っ張り回してからダメ押しで東京湾に落とすって言ってた」

そこで我慢できなくなつたか、ニコが吹き出した。

「あつはは……さすがネガビュの《矛盾存在》、あたしも色々ワサ聞いたけど、マジモンの勇者様だったみたいだな」

「アレは勇者のあとにバカがつくのよ、赤の王」

あきらが遠慮した形容詞をこやかに口にした楓子は、車椅子の背もたれに体を預け、青色の空を見上げた。少し間を置いてから、どこか気がかりそうな声で言う。

「変遷と言えば……そうそう都合良く地獄ステージが出現するとは思っていなかったけれど、黄昏ステージはあまり幸先がいいとは言えないわね」

「えっ……」

「なんでですか師匠、とハルユキは訊ねようとしたが、一瞬早くタクムが流石のハカセぶりを発揮した。」

「そうか、《大天使メタトロン》は、暗黒系ステージで力が弱まる……ということとは、下位とは言え神聖系の黄昏ステージでは、メタトロンのステータスがプラス補正がついてしまうんですね？」

「ほんの少し、ですけどね。でも、限界領域の戦闘ではその《少し》が局面を左右しかねないのも事実……。——ロータス、判断はあなたに委ねるわ」

「うむ……」

作戦を指揮する立場の黒雪姫は、楓子と同じように夕焼け空を見上げて言った。

「さっき一瞬だけ向こうに戻ったとき、時刻は午後十二時二十分十五秒だった。つまり、十二時半に設定してある強制切断セーフティが発動するまで、あと九分四十五秒……こちら側では五十八万五千秒、イコール百六十二・五時間、イコール六日と十八時間三十分残されているわけだ」

……あややて加速世界と現実世界の時間をばんばん暗算できるのもハイランカーの証明な

のかなあ、と頭の片隅で考えてしまいつつも、ハルユキは黒雪姫の声に集中した。

「その間には、変遷が最低一回、運が良ければ二回訪れるだろう。対メタトロン戦は恐らく、いや間違いない短期決戦になるはずだから、どこか安全な場所まで次の変遷を待つことも可能と言えは可能だ。無論、次のステージがより上位の神聖系になってしまう可能性もゼロではないが、私の経験上、神聖系または暗黒系のステージが二回連続することはまずないと言っている。安全策を採るならば、まずは三日間待機して……」

そこまで聞いた途端、ハルユキは我知らず一歩踏み出し、叫んでいた。

「せ……先輩！ 大丈夫です、ステージが何だろうと、メタトロンのレーザーはちゃんと僕が弾いてみせます！ だから、待機なんてしないで、すぐに……」

懸命に口を動かすあいだ、ずっと脳裏に浮かんでいたのは、保健室のベッドに横たわる輪の姿だった。

仮に内部で三日が過ぎても、外ではたった四分と少ししか経過しない。だが今のハルユキには、その時間を《へたった》とは思えない。輪の苦しみを一分一秒でも早く消し去る。そう約束して、ハルユキは二連続の大作戦に臨んだのだ。

「……これから、すぐに、ミッドタウン・タワーに……」

わななく胸から切れ切れの言葉を押し出すハルユキの、きつく握り締めた右拳を……。ひんやりとした水筒をまとう手が、そっと包んだ。ハルユキの発作的な焦心を、絶え間な

く流れる水が優しく冷却していく。

「あなたの気持ちはよく解るの、クロウ」

声の主は、封印状態から解放されたばかりのアクア・カレントだった。正面に移動すると、水面に映る月光のように青白い両眼でじつとハルユキを見詰めてくる。

「ずっと昔……まだレギオンに入っていなかった頃、私は、大切な人を助けられなかったことがあるの。とても強い力と、すごく大きな夢を持ってたんだけど……それを奪み取れた者たちの悪意が、彼女を呑み込んでしまった。だから、アッシュ・ローラーを一秒でも早く助けたいっていう、あなたの気持ちは本当によく解る。でも、それならなおさら、焦っちゃだめなの。あなたの力を凝結するわけじゃない。でも、あなた一人じゃメタトロンには勝てない。みんなの力を最大限に発揮するために、集められる限りの情報を集めて、何度も何度も話し合って、できる準備は全部する。それが、今必要なことなの」

あきらましてはとても長い、そしてとても強い感情のこもった言葉だった。

ハルユキはゆっくりと肩の力を抜き、深く俯きながら、囁くように言った。

「……でも、三日も……三日も待つなんて……その間も、日下部さんは……」

「三日とは言わない。だが、一日……いや、ひと晩だけ、我々にくれないか」

項垂れるハルユキの左側から、遠慮を振り切ったような、力強い声が聞こえた。ハルユキは視線を上げ、剣の主たる黒雪姫の顔を見た。漆黒のゴーグルの奥では、バイオレット・ブルー

の両眼が凛然と輝いている。

「『変遷』には頼らない。どうせ地獄ステージ以外ではメタトロンにこちらの攻撃は当たらないんだ、わずかなステータス補正を気にしても仕方あるまい。だが、ミッドタウン・タワー周辺の偵察と、作戦の細部の再検討はどうしても必要だし、それに……今は誰も自覚していないだろうが、先のセイリユウ戦の消耗が残っているはずだ。ひと晩休息し、心気を回復させて、万全の状態でもメタトロン戦に挑もう。キミの友達を……アッシュ・ローラーを、絶対に助けるために」

「……はい！」

いっばいに息を吸い込んでから、ハルユキは思いきり頷いた。

迅速な行動と、無謀な突撃はまったく違うもの。これまで何度となく、勢いのままあちこちに突っ込んでばかり心配させてきたが、レベル7を……ハイランカーを目指すなら、そろそろ「知る」と「考える」ことの大切さを学ばねばならない。約束の対戦で、タクムを失望させないために。

……日下部さん、あと十二時間……現実世界で四十三秒だけ頑張つて。そしたら、全部終わらせるから。

三度目の思念を輪に送り、ハルユキは頭を作戦の実務面に切り替えた。まずはひと晩の休息——と言っても、エネミーがそろそろ歩く無制限フィールドの、しかも建物ギリシャの遺跡つ

ばく全半壊している黄昏ステージでは、安心して休める場所は限られている。

「えっと、それで、まずはどこに……」

ハルユキは黒雪姫やあきらたちベテラン陣を見回しながら言ったが、皆も同じ問題に直面していたのだろう。すぐには答えが返ってこない。

「あのー、校舎の中で休むのはダメなの？ そりゃ、壁とか床とか壊れてるけど……」

チユリの発言に、ニコが答えた。

「まあここでも休めなかなーけど、エネミーだの、他のパーストリンカーに襲われないように歩哨立てないとなんたよな。これが結構面倒さあ……話し相手もいねーし……」

「んっふふ、だいたいよーぶたよニコちゃん！ 寂しくないように、あたしが見張りに付き合っ  
てあげるからー」

「だっ、誰も寂しいなんて言ってるのよーだろ！ あとそのニコちゃんでのやめろー」

二人のやり取りを笑顔で見守っていた諭が、ふと何かを思いついたように振り向き、機子に訊ねた。

「休む場所といえば、フリーねえ。あそこはだめなのですか？」

「そうね、私も考えなくてはならないけれど、ちょっと遠いのよね……帝城東門からなら、すこし南に移動するだけでよかったんだけど」

……あそこ？ 遠い？ 東門から南？

それらの情報を脳内計算機に人力し、ちーんと出力されてきた答えを、ハルユキは大声で叫んだ。

「あ、そっか！ レイカー師匠のお家があるじゃないですか！ あそこならエネミーもパーストリンカーも来ないから、安心して寝られ……」

そこで、かつてその家でどのような目に遭ったかを思い出して、ぱくっと口を開ける。

スカイ・レイカーが所有するブレイヤーホーム、すなわち旧東京タワーの天辺に建つ家を、ハルユキが訪れたのは二ヶ月半前のことだ。心意システムを講うハルユキに、レイカーは優しく微笑みかけながら右手を伸ばし、客教なく突き落としたのだ——三百三十三メートルの高みから、遥か下の地面へと。

まさか今回もあんな展開に、いやいやそれはない、だって僕もう心意技マスターしてるし、羽根も戻ってきたし。

と言いつつも不吉な予感に囚われるハルユキをよそに、女性陣の話し合いは進む。

「なるほどな、《颯風庵》があったか。確かにここからは少し離れているが、幸いタクシーが配車されていることだし……」

「あのなあ、次からは運賃取るぞ！ だいたいそのフリーファンてのはどこに……芝公園ン？ オシラトリの領土の奥で、すぐ右はオーロラの領土つつう魔境じやねえかよ！ なんでそんなところに……」

「ふふ、二十三区でいちばん高いところにあるプレイヤーマンなのよ、赤の王。現状、自力で辿り着けるのはわたしと甥さん、それと……運がいい目のアッシュくらいのものね」

アッシュ・ローラーの名前を口にしたら時らりと辛そうな顔を見せたものの、横子はすぐに微笑を取り戻して続けた。

「さっきのコースをもう一度走って、千代田エリアの霧ヶ岡からまっすぐ南下すれば、オシラトリ・ユニヴァースの領土はほとんど通らないで済むけれど……セイリウウ戦でいっぱい心意技を使っただけ、今頃あのへんに巨獣級エネミーが集まってるかもしれないわね。ちよつと遠回りだけど、山手通りを品川まで行って北上するほうがよさそう」

「でも、それもグレウオの領土と真ん中突っ切るコースだろ？ あいつらエネミー狩り大好き集団だから、でっけえバリエイと出くわしちゃうかもだぜ。日曜の昼だしさあ」

「ん……まあ、それは何とかなるだろう」

「……まさか、全員ブツたぎって通るつもりじゃねーよな。次の七王会議で《鉄拳》バウンドにゴリゴリ文句言われんの、ヤだよあたしや。めんどくせーんだよあいつ」

「あら、拳ちゃんはあるでけっこう可愛い所もあるのよ。あの子のロケットパンチをわたしは空中で捕獲して、みんなでくすぐったりつねったり色々してあげた時の反応はもう大爆笑ものだったわ」

「……………マジ、あちこちで色々やってんだなあ、《鉄拳》の」

赤いフェイスマスクを少し着せさせたニコが言うと、後ろの位置でバドさんがこくこく頷いた。

逸れかけた話題を黒雪姫が咳払いで引き戻し、一同に問いかけるように言った。  
「と……ともかく、渋谷から品川コースは比較的危険が少ないと思う。オシラトリの実質的な本拠地は港区白金にある小中高大一貫の女子校と推測されるが、二キロ以上離れて移動すれば問題あるまい。誰か、意見はあるかな？」

ハルユキの隣で、チユリがびくつと右手を震わせたが、そのまま沈黙を保った。幼馴染の内心を、今はかりはハルユキにも推測できた。チユリは恐らく、黒雪姫に訊こうとしたのだろう。遠く離れた港区を領土とする白のレギオンのリアル情報を、なんでそんなに詳しく知っているのか、と。

バーストリンカーの大部分が小、中、高校生である以上、レギオンの重要拠点がマスターや幹部の通う学校になることはよくある。ネガ・ネビュラスがまさにそうだし、世田谷エリアで遭遇した小レギオン《ブチ・バケ》も同様だった。

それゆえ、レギオン拠点の学校名が流布すれば、バーストリンカー個人のリアル割れはどではないにせよ、ある程度リスクが発生する。黒雪姫が副生徒会長級の権限を利用して情報漏れへの防衛策をあれこれ講じているのと同じようなことを、オシラトリ・ユニヴァースも行っているはずだ。外部から本拠地を特定するのは困難を極める。

そう、外から得た情報ではないのだ。黒の王ブラック・ロータスは、白の王ホワイト・コスモスの「子」にして実の妹。黒雪姫が白のレギオンの拠点を把握している理由は、かつて同じ屋根の下で暮らしていた身内だからだ。

ハルユキはそのことを、三日前の放課後、権蔵中の生徒会室で黒雪姫当人から告げられた。この場で他に知っていないようなのは「四元素」の三人くらいだが、きっとチユリは持ち前の勘でそれとなく察しているのだろう。黒雪姫と、白の王の間に何らかの関係があることを。

そう遠くない未来、黒雪姫はチユリやタカムにも話してくれるとハルユキは信じている。

「親」である白の王と訣を分かち至った、一連の出来事の全てを。

ハルユキのそんな思考を知ってか知らずか、黒雪姫はゆっくり頷くと合議を締めくくった。

「……では、とくに反対意見も出ないようなので、念のため全員必殺技ゲージを満タンにしてから、まずは南回りコースで旧東京タワーを目指すとしてよう。赤の王が、ど〜〜うしても運転したくないと言ふなら、徒歩で二十キロばかり移動しなくてはならんが……」

「あーもう、わーった、わーったよ！」

右手をぶらぶら振り動かしながらか叫んだニコは、逆襲するかのようになンマリ笑って付け加えた。

「でも、もうセコセコ裏道走るのはだりーから幹線ぶつとばすぞ。でかエネミーに出くわしても強引に突破すつかな、落っこいたら自力で屋根まで上つてこいよ！」

——と、口では言ったものの、前回と比べればニコのドライビングは相当に穏やかだった。再タイプで新車同然にリフレッシュされた装甲トレーラーは、時速四十キロ程度で青森街道を流し、中野坂上で右折。都心を八重に囲む環状線の六番目、山手通りに乗り入ると少しだけスピードを上げる。

すぐ左手にそびえる新宿都庁が示すとおり、このあたりは青のレギオンの領土のど真ん中だが、幸いエネミー狩りパーティーの気配はなかった。もつとも、仮に連続一ヶ月の長期キャンプを張ったとしても、現実世界では約四十五分の出来事ではない。無制限中立フィールドで偶然他のパーティーに出くわすというのは、相当に確率の低い出来事なのだ。

狩りが行われていなければ、次はエネミーと遭遇する可能性が高まる道理だが、新宿副都心を通しても山手通りは静けさに包まれていた。今回のミッションには不向きな黄昏ステージではあるが、建物が遠路化しているがゆえの見通しの良さはありがたい。

黒雪姫やあきら、認、バドさん、チユリたちはトレーラーの中央でお喋りに花を咲かせているが、見張りを買ったハルユキは一人、トレーラーの最前部に座って眼を凝らしていた。新宿副都心を通り抜けると、行く手の左側に広大な草原が見えてくる。真ん中にばつんと建つあまり崩壊していない神殿は、きつと現実世界の明治神宮だろう。ということは、あの向こうはもう渋谷エリアだ。

「鶴さんは、あまり渋谷には行かないようですけど、何か理由があるのかしら？」

不意に背後からそう問われて、ハルユキはびくつと振り向いた。すると、いつの間にも後ろを取ったのか、車椅子に腰掛ける楓子の穏やかな微笑みが眼に飛び込んだ。

「あの、いえ、とくに理由がある……わけじゃないんですけれど……」

首を縮め、小声でもごまかせる。

「渋谷とか原宿って、なんているか、服とか買いに行ったり、その、で……デートで行ったりするようなイメージがあつて……僕は、あえて行く必要は、な……ないかなーって……」

すると楓子は、一度俯きしてからにっこり笑顔を作った。

「ごめんなさい、言葉足らずだったわ。対戦しに行かない理由を訊いたつもりだったの」

すぐ下のコクビットからブクブクッと笑いを堪える気配がしたが、それに反応する余裕もなくハルユキは両手をつたわたり動かしだした。

「そつ、そつですよ！ さっきの忘れてください！ えー、渋谷エリアで対戦しない理由は……た、単純に、リアルであまり行かないから地形もよく知らないし、それに緑のレギオンを愛に刺激して、領土戦で本気攻めしてきても困るしな……」

「二つ目の理由はほうは、心配しなくてもいいと思うわ。グレウオの《六層装甲》は、通常対戦の敵を領土戦で討つような人たちじゃないわよ、たぶん。……でも、一つ目の理由は、経験

で解消するしかありませんね」

「け、経験……と仰いますと……」

「このミッションが終わったら、わたしが渋谷を案内してあげましょう。鶴さんが好きそうなお店も案外たくさんありますよ？」

「お、お店……って、加速世界のショップ……ではなく……」

「現実世界のゲーム屋さんとか、古本屋さんとか。もちろん《服とか買いにいっく》ほうでもわたしはぜんぜん構いませんけど」

「そつ……」

それじゃまるでデ……とハルユキが考えてしまった瞬間、再び下方から、スピーカー経由ではない声が聞こえた。

「おいコラ、ひとの頭の上でデートの約束なんかしてんじゃねー！」

「でっ……」

デートじゃないよ修行だよ、と叫ぼうとしてから、ふと考える。楓子と二人きりが嫌というわけでももちろんないが、渋谷に遠征するなら、大勢で行ったほうがきつと楽しい。

いちど深呼吸してから振り向き、ハルユキはどうにか落ち着きを取り戻した声で言った。

「わかりました師匠、それじゃ次の休みに、みんなで渋谷に行きましょう。ニコも、バドさんも、先輩やタクたちも……もちろん、編さんも一緒に」

すると楓子は青色のアイレンズを優しく締め、ゆっくりと二度頷いた。  
「ええ、そうしましょう。緑の人たち、びっくりするでしょうね」  
「おっ、おい、あたしは別に連れて行なって言ってるわーぞ！」  
今度はニコが慌てたように叫び、「行かぬーとも言ってるわーけど」と付け加えたので、ハルユキと楓子は声を合わせて笑った。

渋谷エリアを抜けて目黒エリアに入っても、道行きは至って平穏なものだった。

左右に神祕道路が立ち並び夕暮れの幹線道を、トレイラーは軽やかなエンジン音を響かせて進んでいく。恵比寿、目黒、五反田といった都心の南側は、現実世界でも加速世界でも訪れる機会のまったくない場所なので、だんだん今どこを走っているのか解らなくなってくる。右側に見えていた巨大な夕陽がいつの間にか真後ろに移動して、それでようやく進路が南から東に変わっていることに気付く。

渋谷、目黒、品川の三エリアを支配する《グレート・ウォール》は、領土の面積でもメンバーの数でも間違いなく加速世界最大の組織だ。しかしその活動方針は、相互不可侵条約を結ぶ六大レギオンの中では最も穏健で、中立エリアへの集団遠征さえほとんど行わない。毎週末の領土戦では、ネガ・ネビュラスの領土に攻撃チームを送ってくるものの、メンバーはレベル2や3から高くても5までで、領土を落とそうというよりも若手に経験を積ませようとしている

る気配がある。

そんな緑のレギオンが最も力を注いでいるのが、無制限フィールドでの大型エネミー狩りだ。ことに緑の王ダリン・グランデは、単独でも野獣級くらいなら安定して狩り続けられる実力があり、頻りに長期キャンプ狩りを行っては大量のバーストポイントを獲得している。

グランデの異質な点は、せっかく集めたポイントカードアイテムに変え、最弱の小獣級に喰わせていることだ。しかも喰わせる場所は渋谷や目黒に限らないので、他レギオンの狩りパートナーが、謂わば《ボナスエネミー》を狩って大量のポイントをゲットすることも有り得る。むしろその場合のほうが多いだろう。

つまり緑の王は、エネミーから得たポイントを無制限に再分配し、加速世界の……対戦格闘ゲーム《ブレイン・バースト2039》の維持拡大を図っているわけだ。己の行動の理由を、以前ハルユキと六本木ヒルズ・タワーの屋上で邂逅したグランデは、耳慣れない単語を用いて説明した。

試行ナンバー1こと《アクセル・アサルト2038》。

試行ナンバー3こと《コスモス・コラプト2040》。

それらは、ともに全ブレイヤーの退場によって廃棄されてしまった。だが、試行ナンバー2である《ブレイン・バースト2039》は、他の二つにはなかった何らかの因子を備えている。それを明らかにするまでは、世界を閉じさせるわけには行かない――。



ハルユキにはまったく理解不能であると同時に、それら恐ろしくもある言葉だった。とくに、試行、というひと言。それが《試行錯誤の一環》という意味ならば……ハルユキを救い、導き、多くのものを与えてくれたこの世界は、何者かの気まぐれで消滅してしまう儚い虚構でしかない、ということになりはしないか。

だからハルユキは、いままで緑の王の言葉を深く考えようとしてこなかった。

加速世界の消滅を前目的に怖れているのではない。誰よりも敬愛する剣の主である黒雪姫がレベル10到達という夢を叶え、その結果としてゲームがクリアされるのならば、黒雪姫の隣で共に世界の終わりを見届けたいと思う。それなら、仮に加速世界が消えても、同じくらい大きくて大切なものを手に入れられるという気がする。

しかし、見知らぬ誰かが失敗だと判断して、パチンとスイッチが切断されて全て消える——全パーストリンカーの記憶を消滅せしめるに、何もかもが道半ばのままゼロになる。そんなのは絶対に嫌だし、同時にハルユキひとりの力ではどうにもならないレベルの話であることが、震えるほど恐ろしい。

ハルユキは、実際に身震いしそうになったアバターを両腕で押さえ込み、思考を切り替えた。今は、手が届くはずもない世界の外側ではなく、すぐ近くで苦しんでいる大切な友達のことを考えるべき時だ。目下部隊とアッシュ・ローラーは、ハルユキを何度も助けてくれた。だから今度は、ハルユキが二人を助けるのだ。

顔を上げると、行く手にローマ時代の水道のような二重アーチ橋が見えた。現実世界だと何だろう、と眼を凝らしていると、ハルユキが物思いに沈んでいた間もずっと後ろにいた楓子が解説してくれた。

「あれはきつと山手線と新幹線の高架橋ね。くぐって第一京浜道を左折すればすぐに品川駅、そこから四、五キロ北に走れば旧東京タワーよ」

トレラーは楓子の言ったとおりのコースを通り、数分で彼方の空を垂直に貫く白亜の塔が見えてきた。永遠の夕陽に照り映える塔は、左側を朱色、右側を紫色に染め上げられている。後ろでお喋りしていた仲間たちもトレラー前部に移動してくると、代表してチユリが感嘆の声を上げた。

「わあ、結構……！ あだし、黄昏ステージの旧東京タワー見るの初めて！」

「そんなこと言ったら、オレも初めてだし」

思わず張り合ってしまうハルユキに、タクムも付き合う。

「もちろんばくも初めてだよ。本物はもう建てられて九十年も建つけど、その年月を思わせる荘厳な姿だね」

——おお、さすがタクムはいいこと言うなあ。

とハルユキが感心すると同時に、スピーカーからニコの声が響いた。

「さすがメガネはハカセっぽいこと言うなあ！」

赤い装甲トレーラーが、港区エリア——東京二十三エリアのうち、北区と港区だけは《区》を取らない慣例になっている——の東部にある芝公園に乗り入れると同時に、二度目のダイブからちょうど三十分が経過した。

ここからほんの三キロ北に、四神セイリユウと激戦を繰り広げた帝城東門がある。そう考えると、ポータルから離脱する時に位置をセーブできればなあと思わなくもないが、原則的には対戦格闘ゲームのプレイン・パーストにそこまでの便利機能は求められない。

乗客が屋根から降り、最後にニコが強化外装をアイテム欄に戻して着地すると、九人は横一列に並んで、直径二十メートルはあろう巨大な塔を見上げた。

現実世界の旧東京タワーは鉄骨を組み合わせた先羅りの電波塔だが、加速世界では底と天辺の面積が等しい円柱の姿をしている。当然、壁面はどこも完全な垂直で、梯子もエレベーターもついでない。

二ヶ月半前、ハルユキが心意の修行のために素手で登ろうとした時は、全ての建物が岩山になる荒野ステージだった。目の前の壁は適度にゴツゴツしていた。しかし今はそれが滑らかで、大理石製で、手足をかけられるような窪みはほとんどない。黄昏ステージの建物は脆いので、壁に穴を開けることはできるだろうか――

「……師匠、念のため訊いておきますけど……この塔、いっばい穴とか開けたらどうなります」

.....

ハルユキの質問に、楓子（ふうこ）はにつこり笑って答えた。

「もちろん倒れるわね。次の変遷で復活はしますけど、碧さんがわたしのお家を壊したことは」

「一生忘れないと思うわ」

ピクツと体を練めるハルユキを見て、黒雪姫が苦笑混じりに口を挟む。

「おいフーコ、あんまり私の（子）を脅かさないでくれよ。無制限ワールドでは大型地形に  
 そう簡単に壊れないはずだぞ」

「うふふ、そうだったかもね。でももし塔が倒れたら、家が空に浮いたままになるのか、地面まで落っこちてくるのか、少し興味あるわね」

「ふむ。普通に考えれば座標固定されているだろうから、浮いたままに……なるのかな……」  
「おっ、実験すんならあたしが主砲で爆吹っ飛ばしてやるぜ！」

物騒な提案をするや否や、本当に強化外装を再召喚しようとするニコを、パドさんがひいっと抱き上げて無言でかぶりを振る。

「こつ、こらバド、子供扱いすんな！別に本気でやろーなんて思ってたわーよ！」

「……絶対、本気の声だったの」

「……なのです」

あきらと誰か真顔でコメントし、チュリとタクムが笑い声を上げた。一緒にしばし笑ってから、ハルユキは話題を引き戻した。

「えーと、それじゃ、念のため壁に穴あけて登ってくのはやめといったほうが良さそうですね……。となると、僕と師匠でみんなを運ぶしかなさそうですね、いっぺんには……無理かなあ……」

タワーの高さはゲイルスラストーの上昇限界に近いので、梶子が抱いて飛べるのは一人までだろう。残り六人を、ハルユキが一度に引き上げるのはどう考えても無理だ。

「二回に分けて運んでくればいいさ、済まんがよろしく……」

黒雪姫がそう言いかけた時、左腕にニコを抱いたままのバドさんが、右手で大理石の壁面に触れながら発言した。

「……たぶん、登れる」

「えっ……レバード、あなた壁面走行能力なんて持ってたかしら？」

「移動中に、レベルアップ・ボーンズ取ったから」

さらにと言ったのけた豹頭アバターを、一同しばし凝視してから、一人を除いて「えーっ」と声を揃えて叫ぶ。

「でっ、でもバドさん、レベル2や3のボーンズじゃないんですよ！ 7と、8のぶんですよ！ ってことは事実上最後のボーンズで、そんなの選ぶ時は一週間とか二週間とか一ヶ月とか

半年とかじっくり悩んで……」

まくし立てるハルユキに、バドさんは軽く肩をすくめてとんでもないことを言った。

「NP。ボーンズ選択に失敗しても、リカバリーの方法がないわけじゃない」

黄昏の草原に微風がさあっと吹き渡り、それが収まると、

「「えー……っ」」

再び、一人を除いて盛大な驚き声を上げた。

「そ、それは本当かレバード！ 私もそんな話は聞いたことがないぞ！」

黒雪姫がずずいっと詰の寄り、

「マジかよバド！ そんな知ってるならまずあたしに教えろよ！」

抱っこされたままのニコが喚く。しかしバドさんは昔の追及を柳に風と受け流し、

「私も気付いたばかり。詳しくは……」

と言うと、視線を先ほど叫ばなかった一人——アクア・カレントに向けた。

バトンを渡されたあきらは、しばらくサラサラと水流装甲を循環させるだけだったが、やがて小さく呟いた。

「あんまり、言いたくないの」

「なんだと、お前も知っていたのかカレン……ム……いや……そうか、そういうことなのか……」

「言葉の途中で何かを得心したらしい黒雪姫は、腕組みをするとそのまま黙り込んでしまった。次いで機子と譲、ニコが「あ………」と呟く。

更に、何たることかタクムとテュリまでもが「まさか……」「もしかして……」などと口走るので、ついにハルユキひとりが解つてないゾーンに取り残されてしまった。切なすぎる状況から脱しようとして、必死に考える。

レベルアップ・ポナスを再選択する方法を、アクア・カレントは昔から知っていて、ブラノド・レバードは最近気付いた。レベルアップに関係する二人の共通点は……

「あつ……そ、そうか……!!」

ようやくその、辿り着いてしまえば単純な答えが脳裏に閃き、ハルユキも叫んだ。カレントとレバードの共通点は、レベルアップではなくレベルダウンだ。すなわち、四神セイリウウの特殊攻撃（レベルドレイン）――。

譯もが発言を躊躇う中、あきらは水流の輪を描かしてそつと頷いた。

「そう。セイリウウの特殊攻撃でレベルが下がると、該当レベルで取ったポナスも消える。逆に言えば、もう一度そのレベルに到達した時、ポナスを再選択できるの」

「で……でも、カレンさん」

ハルユキは一歩踏み出し、湧き上がる数々の疑問のひとつを口にした。

「カレンさんは、レベル1の時も、たくさんアビリティを持っていたよね」

昨日の領土戦で披露した、ステージ内の水を全て自分専用のマイクに変える（流体音感）の他にも、壁面を滑り降りる技や、仲間を水流装甲に包み込む技といったアビリティ群をアクア・カレントは持っていた。レベル1では有り得ない多彩さだ。

あきらは軽く頷き、問いに答えた。

「あれらのアビリティは、レベルアップ・ポナスで取得したわけじゃないの。あなたの（飛行）や（光学誘導）と同じように、戦闘中に閃いたもの。だから、レベルダウンしても消えなかった」

「はあ………」

感嘆のあまり、ハルユキは大きなため息を漏らした。

全損寸前の新米リンカーを守る（用心棒）として長く活躍し、加速世界最強のレベル1を意味する（唯一の）の二つ名を与えられたアクア・カレント。ハルユキもかつて窮地を救ってもらった彼女の強さは、レベルダウンという恐るべき逆境に耐えたからこそ磨かれたものだったのだ。

全身を夕陽の色に染めた流水のアバターは、八人をぐるりと見回してから、蒼蒼より少しだけきつぱりとした口調で言った。

「私が、（レベルドレイン）の副次的効果について今まで説明しなかったのは、レベルアップ・ポナスを再選択するために取ってセイリウウと戦うようなことをしてはしかなかったか

らなの。さっきの作戦でみんな気付いたと思っただけ、セイリエウは戦術が一定時間経過しないと……うん、私の印象では、本気で怒らないとレベルドレインを使わない。安易に戦えば、その段階に至る前に死んでしまう可能性がかなり高い。少しでも橋に踏み込んで、レベルだけ下げてもらって、すぐに脱出するなんてことは絶対に無理なの」

「……………ああ、その通りだろうな。だが大丈夫だよカレン、この中に、自分の選択を悔いている者などいないさ。レバードも、まさか本気で意図的にレベルダウンするなどと言ったわけではあるまい」

黒書館の言葉に、バドさんは当然と言わんばかりに頷いた。

「Y。私がボーナヌ再選択の可能性に触れたのは、カレンにいまの話をして欲しかったから。私の短気もだけど、カレンもその何でも抱え込むところ、直していくべき」

「……………」

《子》であるバドさんにずばりと指摘されたあきらは、フェイスマスクを覆う水流に仄かな苦笑の色を添わせて答えた。

「努力してみる。まだ色々抱えてるけど、少しずつ教えるの」

「K」

頷き、バドさんは塔の壁面から一步離れると、左腕に抱えるニコをいきなり真上に高くと放り投げた。

「おわあああ!?」

恐らくこの場で最軽量アバターである赤の王が、悲鳴を上げながら宙を舞うあいだに、

《シェイプ・チェンジ》

人型から豹型に変身すると、背中ではニコをキャッチする。

「あ……あのなバド、せっかち直すつたばっかりだろう」

わめくレギオンマスターに「努力目標」と答え、バドさんは猛獣のそれに変わった右前足を塔の壁に掛けた。肉球部分を二、三度押し当て、納得したように頷くや、そのまますると垂直の壁面を三メートルほど登っていく。背中のニコが、慌てて首を抱きつく。

「K。たぶん頂上まで登れる」

「た、たぶん!?」

「……………恐らく登れる」

「お、恐らく!?」

息のあった掛け合いを披露する赤のレギオンの二人に、楓子は微笑みながら手を振った。

「了解。それじゃ、頂上で会いましょう」

「K」

頷くや、バドさんは滑らかな大理石の壁をたつたか走り始めた。《壁面走行》は、見た目は地味だが相当にレアかつ強力なアビリティだ。ブラッド・レバードの俊敏さが加われば、ほと

んどのステージの障害物は無いも同然となるだろう。

うつひょーう！ というニコの悲鳴のような歓声のような声が遠ざかり、聞こえなくなると、楓子は嬉しそうにもう一度微笑んで言った。

「……これでプロミネンスはかなり力を増したわね。いつかレギオン同士で戦う時が、とても楽しみだわ」

「ああ、そうだな。そのためにも、我々も強くなりたいとな……」

黒雪姫はそう応じると、バドさんを見送っていた視線を戻した。

「さて、我々も行く。レイカーは誰を運ぶんだ？」

「あら、わたしにそれを訊くの？」

言うまでもない、とばかりに小さく両手を広げた楓子の姿が、いきなり車椅子の上から掻き消えた。テレポルトに似た勢いで移動した先は、話のすぐ後ろ。ぎくりとした表情で飛び退こうとする小柄な車女を、両手でひょいっと抱き上げる。

「あうう……ゆ、油断したのです」

観念したように両手足をだらりと垂らす誰かがつちりとホールドし、楓子は愛情に満ちた声で明言した。

「大丈夫よメイドン、今日は落っこしたりしないから」

「あ、あたりまえなのです！」

赤のレギオンの二人同様、年季の入ったコンビ振りを披露する（ICBM）と（緋色弾頭）にやれやれと首を掻くから、黒雪姫はハルユキに向き直った。

「となればクロウ、キミにはバイルとベル、カレン、そして私を運んで貰うことになるが……どうだ、一回でいけそうかな？」

「はい、大丈夫です！」

勢い込んで頷くハルユキにチユリがほんのり懐疑的な顔を見せるが、今回はやはり根拠なき安請け合というわけではない。半年前の五代目クロム・ディザスター討伐ミッションの時、ハルユキは右腕にブラック・ロータス、左腕にスカレット・レインを抱え、両足にシアン・バイルをぶら下げて杉並から滝袋までの五キロメートルをノンストップで飛行している。

今回はアクア・カレントが増えているし、小柄なレインと比べればライム・ベルはやや重いだろうが、スピードさえ出さなければ、三百数十メートル程度なら四人を一度に運び上げられるはずだ。

「それじゃロータス、わたしたちはお先に」

誰を抱いたまま車椅子を収納、ゲイルスラスタを召喚した楓子が、ひらりと右手を振ってから空を見上げた。膝を曲げ、軽やかにジャンプすると同時にブースター点火。噴射炎を青く輝かせながら、たちまち夕焼けの中へと遠ざかっていく。

「では、我々も行くか」

そう言いなが、黒雪姫がハルユキの右腕に体を近づけた。タンデム飛行はもちろん初めてではないが、緊密する剣の主と接触すると、アバター同士であっても相変わらずどぎまぎしてしまう。しかしどうにかスムーズな動作で細い腰を抱き上げることに成功し、内心はつとしまがら左手をチュリに向けて伸ばす。

「ほら、チュも早く」

「……なんか、手つきがミョーに慣れてる」

「なっ、慣れてねーよ！ ペペ別におまえが足にぶら下がるんでもいいんだからな！」

「はいはい、そんじやよろしく」

「ドスン、とぶつかるように体を預けてくるチュリを、こちらは特に緊張もせず左腕に抱えたところで、ハルユキはハタと考え込んだ。タクムは前回と同じく足に掴まっただけとして、アクア・カレントをどう保持したものか。

「大丈夫なの」

瞬時の思考を読んだようにあきらが言い、正面から近づく、と両腕をハルユキの首に回した。慌てふためく暇もなく、カレントの全身を覆う水袋がクロウの金属装甲にびたりと吸着する。きつと壁面降下アビリティの応用だろう。これなら確かに、ハルユキが支えていなくても落ちることはなさそう。

上半身で三人を確保したハルユキは、背中の翼を広げると控えめに震わせた。ゆっくり離陸

し、地上一・五メートルでホバリング。

「タク、いいぞ。毎回下で悪いな」

すぐに後ろからシアン・パイルががっちり合体——するはずが、返事がないのでハルユキはもう一度呼びかけた。

「タク？」

「あ……、ああ、ごめんハル。よろしく頼むよ」

今度は反応があり、正しい両腕がシルバー・クロウの両脚をしつかりと抱え込む。少しずつ差力を上げ、シアン・パイルの足が地面から離れたところで、視線を真上に移す。

ミサイルと化してすっ飛んでいった機子と照はすで見えないが、遠か高い壁面を移動する小さな影が視認できた。どうやらパドさんも、途中でアビリティの効果が切れたりせずに頂上まで通り着けそう。

「じゃ、行きます！」

四人に声を掛け、ハルユキは金属翼の振動数を上げた。ぐうんつ、とエレベーターの発進時に似た重力感覚が訪れ、すぐに浮遊感へと変わる。塔の壁面から五メートルほどの距離をキープしながら、一定速度で上昇。視界左上で必殺技ゲージが減り始めるが、エコ飛行を心ければ充分足りそう。

と考えた途端、左腕のチュリが歓声を上げた。

「わあ、なんかあつちに神殿がいっぱいある！ ハル、ちょっと左に動いて！」

「あ、あのなあ……ゲージ足りなくなったらシトロン・コルしろよな」

ぶつぶつ言いながらも、ハルユキは塔の南面から西面へと平行移動した。ついでに体を左に回転させると、視界に黄昏ステージの東京都心が広がった。

右手奥に、底無しの断崖に開かれた広大な空間——セイリユウとの激闘を繰り広げたばかりの（帝城）が見える。だが、チユリが言ったのはその手前に立ち並ぶ高層神殿群のことだろう。（たぶん）コリント式の円柱に支えられた床が何層にも積み重なり、古代ギリシャ風の未來都市、といった趣を作り出している。

壮麗な大バノラマに、文句を言ったことも忘れてハルユキが見入っていると、黒雪姫が右腕の剣をすっと伸ばした。

「あの辺りは霞ヶ関と水田町だな。右から財務省、農水省、内閣府……奥の、低くて大きな神殿が国会議事堂だろう。小学校の社会科見学で行かなかったか？」

問いかけにハルユキが答える前に、

「あ、行った行つた！ ハルが中で迷子になって大変だったんだよ、先輩！」

などとチユリが極秘情報を暴露するので、慌ててフォローを試みる。

「ま、迷子違う！ あれは探検してたんだよ！ アメリカの議事堂には地下に秘密の部屋があるって言うから、日本の議事堂にもあるかなーって……」

「それ、昔いっしょに撮った映画の話でしょ！ アメリカのにも日本のにも、秘密の部屋なんかありませんー！」

「なんで断言できるんだよ！ 秘密なんだから、国民には隠されてるんだよ！」

「うそ、あんたまだ信じてるワケ？ 中二にもなって？」

「い、いいだろ別に！ ロマンに年齢制限なんかないんだよ！」

ハルユキとチユリがせっかくの絶景を台無しにする勢いで言い合いを続けていると、不意に胸のカレントがくすつと笑い声を漏らした。

「……いかにクロウらしいエピソードなの。でも、せっかくのロマンを壊したら申し訳ないけど、秘密の部屋の有無を確認する方法もくはないと思うの」

「えっ………、忍び込むんですか？」

唖然とするハルユキの右側で、今度は黒雪姫が笑う。

「そうか、解つたぞ。現実世界ではなく、加速世界で確認するんだな？ 秘密の部屋とやらにソーシャルカメラが設置されていれば、こちら側でも生成されるはずだ。黄昏ステージは建物の構造変化が激しいが、そうだな……工場ステージや鉄鋼ステージならば……」

「おー、なるほどー！ そんじやさっそく次の休みにでも確かめに行こっか！」

「なんだよ、お前さつき否定しまくってたじゃないかよ！」

——などというやり取りをする間にも、ハルユキは一定のペースで高度を上げ続け、やがて



帝城も国会議事堂も薄雲の下に隠れてしまった。視線を再び空に向けると、いつの間にか天辺の縁が夕空にくっきりと円弧を描いていた。先行した四人はすでに到着しているらしく、姿は見えない。

予想どおり必殺技グーが余りそうだったので、最後の三十メートルはスピードを上げて、ハルユキは田東京タワーの高さを追い抜いた。記憶にあるとおり、頂上は芝生に覆われた庭園になっていて、その一角に楓子たちの姿が見える。

「お待ちせしましたー！」

先行した四人に声を掛け、ハルユキは上昇を止めて滑空に移った。ぶら下がるタクムがまず手を離し、ずしんと芝生に着地する。続いてハルユキも少々危なっかしランディングを決めると、両腕と胸から黒雪姫たち三人が飛び降り、それぞれねぎらいの言葉を口にした。

無事に輸送機役を務め終え、長く息を吐いてから、ふと飛行中にタクムがやけに静かだったことに気づいた。あいつ高いの苦手だったかな、と思いつつ背後のタクムを見ようとしたが、その前に楓子の声が響いた。

「皆さん、ようこそわたしの庭へ。こんなにたくさんのお客様は初めてだわ、お家に全員入れればいいけど」

言われてみれば、かつてハルユキが泊めて貰った楓子の家——どうやら《機庫庫》なる風流な名前がついているらしい——は、さほど大きい建物ではなかったはずだ。九人も入れるのか

な……と視線を円形の空中庭園に向けたハルユキは、あれっとなんを見開いた。

庭の中央には、小さな泉。夕日を映してオレンジに光る水面の、更に真ん中には青く揺れる楕円形——ポータルが浮かんでいる。そこまでは記憶と同じだ。しかし、泉の向こうに建っていたはずの、白壁に緑屋根の瀟洒なコテージが、どれほど眼を凝らしても存在しない。

タクムの奇妙な沈黙のことも忘れ、ハルユキは右手で庭の東側を指差しながら叫んだ。

「あつ、あのっ、邸匠！ い、家が、家がありません！」

すると、すでにゲイルスラストを外して白いワンピース姿に戻っている楓子は、つば広の帽子を揺らして笑った。

「うふふ、別に竜巻で飛ばされてしまったわけでも、狼に襲われてしまったわけでもないですよ。施設されたブレイヤーホームは、オーナーが近づかないと実体化しないの」

素早くインストメニユーを操作し、何か小さなアイテムをオブジェクト化する。銀色に光るそれは、古めかしいデザインのカギだ。

考えてみれば、ハルユキ自身もほんの九日前、ここではない場所に建つブレイヤーホームにアクセスするため、無制限フィールドの片隅に長い間眠り続けていた鍵を懸念に探したのだ。二つの高位強化外装と一緒に鍵も部屋の中に置いてきたので、もうあの家は誰にも見つけれないはずだ。

ハルユキが拾ったものとは異なる形の鍵を片手に持った楓子は、泉のほうへ数歩移動した。

すると、目覚めのある白い家が、仄かな光に包まれて出現した。チユリやニコが「おおー」と声を上げる中、楓子は振り向いて皆を手招きした。

「さあ、こちらへどうぞ。たしか、食材アイテムが少し残っていたと思うわ。賞味期限が千年くらい過ぎていくかもですけど」

ふと、かすかな音が聞こえた気がした。

薄く喉を潤くと、たった一つだけあるドアがちょうど閉じられたところだった。誰かが部屋から出ていったのだ。

そつと首をもたげ、周りを見回す。記憶よりも広がった《風風庭》の床には、仲間たちが思い思いの格好で横たわり、つかの間の眠りに落ちていく。もちろん、全員デュエルアバターのままだ。

猫のように体を丸めるパドさんを、枕代わりしているニコ。横向きになった楓子は、誰かをしつかりと抱き寄せている。その傍でゆらゆら揺れているのは、水流装甲をボール状に丸めたあきらだ。タクムは壁に背中をもたれさせて眠り、ハルユキの隣ではチユリが大の字になっている。

しかし、部屋にたった一つだけあるベッドには、誰の姿もなかった。

ベッドの使用権は、あちこち失ったフォルムゆえ床では眠りづらそうな黒の王に満場一致で差出された。つまり、数秒前に家から出ていったのは黒雪姫だということになる。これが現実世界なら「トイレかな？」で済むところだが、加速世界ではどんなに飲んだり食べたりしても

生理的欲求は発生しない。

「……………」

ハルユキは、更に数秒間眠気と戦ってから、ゆっくり上体を起こした。音を立てないよう気を使いながら立ち、忍び足で板張りの床を横切る。ドアノブに触れると扉が外側に開くので、するりと抜け出て慎重に閉める。先ほどハルユキが聞いた音の正体は、閉閉時に忍び込んだ風声だろうか。

家の外は、来た時と同じく色鮮やかな夕焼けに包まれていた。インストメニューから連絡ダイブ時間を確認したところ、どうやら五時間ほど眠っていたようだが、その間に《変遷》は訪れなかったらしい。

メニューを消し、首を返らせると、塔の外周部西側に置かれたベンチに腰掛けるシルエツトがあった。ハルユキの位置からは、地平線に浮かぶ真赤な夕陽とちょうど重なって見える。戦場では雄々しいばかりの鋭利なフォルムが、なぜか今は硝子細工のように儼々感じられて、ハルユキはしばし無言で視線を向け続けた。再び吹いた風が泉にさざ波を立て、それをきつかに歩き始める。

家から誰かが出てきたことにも、それがハルユキであることにもとうとう気づいていたのか、ベンチから二メートルの所まで近づいた時、黒雪姫は静かに言った。

「済まないな、起こしてしまったか」

「……………」

立ち止まり、そう答えると、黒雪姫は無言で体を右にずらした。ハルユキは更に五歩進んで左からベンチの前に出ると、空いたスペースに腰を下ろした。

空中庭園はすぐ目の前で途切れていて、隙間には手すりも何もないので、顔を上げれば加速世界の眺望が視界いっぱい広がる。六本木から渋谷にかけての都心エリアはもちろん、その向こうの世田谷、調布、八王子へと連なる街並み、更には奥多摩の山々までが永遠の夕陽に照らされて赤々と燃え上がるさまを見ていると、心がすうつと吸い込まれそうになる。

「キミと一緒に、あの太陽に向かってどこまでも飛んでいたら、気持ちいいだろうな……………」

右側からそんな吹きが聞こえ、ハルユキはこくりと頷いた。

「そう……………」

半ば無意識的にそう答えてから、ふと我に返り、付け加える。

「……………」

実際には、渋谷あたりでグーッと切れてしまうけど。

すると黒雪姫は、短い沈黙を経て、思わぬ言葉を囁いた。

「心意システムを使えば、どうかな……………」

「え……………」

ハルユキはちらりと顔を覗き見たが、黒の王の顔はクロウと同じくフルカバタイプのゴーグルに覆われて表情を窺えない。視線を彼方の落日に戻し、少し考えてから答える。

「えっと……（光速翼）で限界まで高く昇って、滑空するのを繰り返せば、かなり遠くまで行けると思いますけど……でもあの技、僕の心意技でいけば安定してないんです。時々練習はしてるんですが、イメージーションが足りなくて発動できないこともけっこうあって……」

「そうか……。いや、思いつきで胡亂なことを言っただけで悪かった。心意技の発動には精神状態が大きく関わってくるからな、平常の修練では思うようにいかないこともある。焦る必要はないさ……」

「は……はい」

傾きはしたが、少し肩に落ちないものが残り、ハルユキはもう一度黒雪姫の横顔を盗み見た。心意システムは光と闇の二面性を持っている。たとえ、希望をエネルギー源とする正の心意技であっても、活用すれば（心の穴）に引き寄せられ、いつか底無しに闇に吞まれてしまう。ハルユキにそう教えたのは黒雪姫自身であり、これまでは必要なく「心意」という言葉を口にすることすらほとんどなかったはずだ。

どうしたんですか先輩、のひと言が口に出せず、ハルユキが黙り込んでいると――

不意に黒雪姫が左手を動かし、インストメニユーを開いた。ハルユキからは無地にしか見えない画面を素早く操作し、アイテム欄から何かを取り出したのたろう、手元に白い光の粒子が集まって小さな地形を作り出す。

それは、加速世界では見慣れたオブジェクト――（アイテムカード）だった。各種消耗品

から強化外装、バーストポイント等を封印している場合もあれば、リブレイカードやサドンデス・デュエルカードのようにそれ自体に特殊機能がある場合もある。

いったい何のカードだろうと眼を凝らしたハルユキは、直後、ゴーグルの下で鋭く息を吸い込んだ。

黒雪姫の剣の切っ先に保持されるそれは、墨のようなマッドブラックの地に、鮮やかな赤い文字列を浮かび上がらせている。ハルユキの位置からでも、刻まれたアルファベットが読み取れる。「Incar-nate System Study Kit」。

これは、四日前、世田谷エリアでハルユキが手に入れたISSキットの封印カードだ。ハルユキにこれを渡したのは、マゼンタ・シザーという名のF型バトストリンカーだった。ISSキットによる加速世界の均質化を目論む彼女は、総勢三人の小レギオン（ブチ・パケ）を勢力下に収めようとしたのだが、シルバー・クロウとライム・ペルの介人により断念、不要となった封印カード二枚をハルユキに渡して去った。

マゼンタは、キット拡散の意志を捨てたわけではない。それは、わずか三日後に世田谷第一エリアでアツシュ・ローラーを襲撃し、キットを強制感染させたことから明らかだ。しかし、ならばなぜ彼女は二枚もの封印カードをハルユキに与えたのか。当人は「正の心意に汚染されたからもう使えない」と言っていたが、それなら自分で廃棄するなり、ストレージに寝かせておくなりすればいい話だ。

もちろん、何らかの異変という可能性もあったが、ハルユキにはどうしてもそうは思えなかった。激戦に敗れ、カードを残して去っていくマゼンタ・シザーの背中には、ある種の矜持が感じられたのだ。決してISSキットにキーキットを作った《加速研究会》に操られているわけではない、という強い意志が。

ゆえにハルユキは二枚のカードを持ち帰り、翌日のミーティングで、それを黒雪姫と親子に見せた。二人は当然ながら驚いたが、その理由はハルユキの想像を超えるものだった。ISSキット・カードの漆黒の地には、ひとつの紋章が隠されていたのだ。初代赤の王、《銃匠》レッド・ライダーの紋章が……。

封印カードを実体化させた黒雪姫は、三日間と同じように、それを黄昏ステージの夕陽にかざした。

アイテム名の奥に、交差する二丁拳銃の紋章が浮き上がる。一瞬、カードを吸着する剣先が震える。空気が張り詰め、黒雪姫が深い痛みに耐えていることを如実に伝えてくる。

今度こそ何か言わないと、と思ったハルユキは夢中で口を開き、呼びかけた。

「先輩……」

黒雪姫がちらりと視線を向けてくる。だが、続くべき言葉が出てこない。

「えっと……あの……」

軽いパニックに陥ったハルユキが、数十パターンもの選抜肢から選び取ったのは、どう考え

てもこの場に相応しくない質問だった。

「ど、どうやって剣にアイテムを吸い付けてるんですか？ 磁石みたいな感じですか……？」

「ん……？」

相当に予想外だったのだろう、アイレンズをばちくりと瞬かせてから、黒雪姫は苦笑混じりに答えた。

「いや、別に磁石が入ってるわけじゃない。私の感覚ではちゃんと指先で摘んでいるんだが、その指が見えないだけ……という感じがな……」

「へ、へえ……じゃあ、キーボードで文字を打つた時も……」

「うむ、不可能ではないよ、指が見えないので苦勞するが。以前キミに披露した、剣先を手に変える心意技は、感覚だけの五指を剣と一体化するイマジネーションが源となっている。キミの《光通算》同様、なかなか安定しないがね……」

そこでいったん言葉を切った黒雪姫は、カードの向こう側に遠い過去を覗き見ているかのような声で続けた。

「……ずっと昔、ライダーの奴も言ったものさ……。『彼の造った銃をやっても、お前は撃てないよな、ロータス』と。子供だった私は、からかわれていると思ってムクレたが……もしかしらあいつは、あの時すでに考えていたのかもしれないな。七王全員に、決して撃てない銃である《セブン・ローズ》を……永久なる友情と平和の証を持たせることを……結局、あい

つは最後まで、この手が本当は銃を撃てることを知らないままだったよ……」

「……………先輩……………」

ハルユキは、またしてもそう呼びかけることしかできなかった。

しかし黒智姫は、そんなハルユキに深く頷きかけ、カードを持つ左手を下ろした。

「……せっかくキミが持ち帰ってくれたこの封印カードだが、これにライダーの紋章が刻まれている理由を突き止めることはできなかった。まさか、封印を解いてみるわけにもいかないしな……………」

「も、もちろんですよ！ 冗談でもそんなこと言わないでください！」

「ああ、そうだな。……………ともあれ、カードそのものについては何も解らないままだが……キミにこれを渡したマゼンタ・シザーの意図は、何となく想像できる気もする」

「えっ……………、どういう……………」

「彼女は、カードに隠された紋章がレンド・ライダーのものであることと、ライダーを全損させたのがこの私であることを知っていたのだらう。そしてキミが、手に入れたカードを私に見せることも手遅れしていた。つまりこれは、私に対する挑戦だ。ライダーと何らかの関係があるであろうISSギット本体と、正面から対峙する覚悟があるのか、とマゼンタは私に問いかけているのだ……………」

「……………!!」



まったく予想もしていなかった言葉に、ハルユキは再び全身を震えさせた。

「そ、そんな……それじゃ、僕はほんとにマゼンタの狙いどおりに……」

「いや、キミを責めているのではない。カードを渡してくれたのは正しい判断だよ。おかげで私はハルユキ君に、ずっと言えずにいた白の王ホワイ・コスモスのことを伝えられたのだし……」  
 こうして、ミッドタウン・タワー攻略作戦の前に、覚悟を決める時間を持つこともできた。その意味では、マゼンタに感謝せねばならないくらいさ」

「……」  
 黒雪姫はそう言ってくれたものの、やはりしばらくは顔を上げられなかった。マゼンタ・ジザールの真意はどうあれ、ハルユキの行いが黒雪姫に過大な精神的衝撃を与えてしまったことは確かなのだ。深く俯いたまま、内心で「ごめんなさい先輩」と呟き、ひとつ深呼吸して意識を切り替える。黒雪姫が覚悟を決めようとしているのなら、ここでハルユキが動揺するわけにはいかない。

勢いよく上体を起こすと、ハルユキはいままでの会話で浮かんできたもつとも大きい疑問を口にした。

「……先輩、さっき言われた、レッド・ライダーとISSキット本体の《何らかの関係》って、どんなものなんでしょう？ 初代赤の王はもう二年半以上も昔に加速世界から退場しているわけで……本人が直接関わっていることは有り得ないと思うんですが……」

「うむ……それはその通りだと、私も思う。関連が有り得るとすれば、ライダーの特異な能力《銃器創造》によって作り出された何らかの強化外装が加速世界に残っていて、それがISSキットの製造に役買っている、くらいしか想像できないが……」

「銃器……創造……」  
 掠れ声で繰り返しながら、ハルユキは初代赤の王のアビリティがいかに凄まじいものだったかということ改めて認識していた。

本来、レベルアップ・ボーナスがショップでの購入以外には入手できないはずの強化外装を、自ら作り出す。その力の真の恐ろしさは、時が経てば経つほど影響力が蓄積していくところにある。仮に三日に一丁しか作れないとしても、一月に十丁。一年ならば百二十丁もの銃が積み上がる計算だ。その《軍備》がどれほどレギオンを強化するか、考えただけでもない。

しかも、単純な銃器に留まらず、新たな強化外装を再生産できる《何か》までをもレッド・ライダーは創造していた、ということなのだろうか。そしてそれが、どういう事情によってか加速研究会の手に渡り、ISSキットの製造に利用されている……？

ハルユキの思考を声として聞いたかのように、黒雪姫はかすかに頷いた。

「強化外装を生み出せる強化外装……そんなものが存在し得るか、四日前に訊かれていたら私も笑い飛ばしていただろう。だが、こうしてISSキットの封印カードに刻まれたライダーの紋章を目の当たりにしてしまっただけ……他の説明は思いつかない……」

に……」

そこで言葉を切ると、黒雪姫はフェイスマスクを夕陽の右側に向けた。

視線の先には、旧東京タワーよりは少し低いが数倍のボリューム感を持つ高層ビルがそびえ立っている。しかも、広い幹線道を挟んで二棟。左側の、曲線的なデザインのホテルは、かつてハルユキが緑の王グリーン・グランデと戦った六本木ヒルズ・タワー。そして右側の真四角なビルが——今回のミッションの最終目的地、東京ミッドタウン・タワー。黒雪姫のアイレンズは、もちろん右の塔に向けられている。他の建物と同じく白亜の神殿をイメージさせる姿へと変貌しているが、千二百メートル以上離れていても、タワーにある種の妖気が包み込んでいるようにハルユキは感じた。

ミッドタウン・タワーの頂上には、《不可視・全攻撃透過》という属性を持つ神獣級エネミー《大天使メタトロン》が陣取り、ビルの半径二百メートル以内に近寄る者をあまねく蒸発させるべく眼を光らせているはずだ。そして、高層階のどこかに、加速研究会の金みの中核をなす《ISSキット本体》が隠されている。メタトロンの猛攻をいかくぐり、タワーに突入してキット本体を破壊するという任務を達成できなければ、加速世界は闇に覆われ——ハルユキは日下部輪とアッシュ・ローラーとの絆を永遠に失う。

我知らず拳を強く握り締めた時、ミッドタウン・タワーを見詰め続ける黒雪姫が、再び話し始めた。

「……………」それに、私は感じるのだ。あの場所で、私は私の過去と対面することになるだろう、とな……………」いかなる形を取るのかは、まだ解らないが……………」

「過去……………」ですか……………」

「ああ。七年前にバーストリンカーになった私は、今日まで数多くの過ちを犯してきた。果てなき渴望に急ぎ立てられるように剣を振るい、多くの血を流してきた。このカードは、それらの血に濡れている。血だまりを辿っていけば……………」根源では、必ず過去の私が待っているはずだ……………」

荒涼とした言葉を発した黒雪姫は、しかし視線を彼方の巨塔に据えたまま背筋を伸ばすと、凛と声を張った。

「だが、もう恐れない。過去から逃げようとはしない。私には、フリーコ、遠あきら、タカム君、チユリ君、ニコ、レバード……………」そして、キミがいる。たとえあの塔で何が待っているように、一歩たりとも引き下がらない。それだけは今、キミに約束するよ。」

黒雪姫が口を閉じても、ハルユキはすぐには答えられなかった。それどころか、顔を向けることさえできない。なぜなら、少しでも体を動かせば、顔面の下両眼に溜まった涙が溢れてしまいそうだったからだ。

七色に染む夕陽をじつと見詰めるながら、ハルユキは大きく息を吸い込み、どうにか短い言葉だけを返した。



「僕も……約束します。どんなに苦しい戦いになっても、挫けたり、諦めたりしません。最後まで、先輩の傍で、先輩と一緒に戦います」

「……………ああ」

黒雪姫は頷き、少ししてから付け加えた。

「だが、私が逃げろと言ったら……」

その言葉が終わる前に、ハルユキはきっぱりと宣言した。

「先輩や、みんなを置いては逃げません、絶対に」

結局、ハルユキと黒雪姫は楓風庵に戻ることなく、そのままベンチで語らい続けた。内容の九割は恋愛もないお喋りだったが、最近黒雪姫が文化祭の準備で忙しく、あまり二人きりで話をする時間が持てなかったのも、ハルユキにとっては夢のようなひとときだった。

やがて背後でドアが開く音が聞こえたので振り返ると、大きく伸びをしながら芝生に降りてくるニコが見えた。黒雪姫と並んで座るハルユキに気づくやビタッと動きを止め、「二本のアナパーツをびこびこ振ってから、小走りに近づいてくる。」

「おっはよ、おにーちゃん♪」

……………なんでいきなり天使モードなの。と怪しみつつも、ハルユキは挨拶を返した。

「お、おはよう、ニコ。よく眠れた？」

「うんっ。でも、起きたら、あたしを抱っこしてくれてたはずのお兄ちゃんがいなかったから、寂しかったあ……」

「……………ほう？」

と、隣からやや側面な声が聞こえ、ハルユキは両手と首を左右にぶんぶん振りながらベンチから飛び上がった。

「い、いやいやいやい！」

ニコに向き直り、叫びながら数歩下がると片足が屋上の縁を踏み外し、体がぐらりと後ろに傾く。

「う、うわうわうわい！」

両腕をぶんぶん回してから、ようやく背中の羽根のことを思い出し、少し震わせて屋上へと戻る。ゼーは一呼吸を繰り返して、改めて叫ぶ。

「だ、抱っこなんかしてないだろ！ニコはずっとバドさんを枕にしてたじゃないか！」

「あれえ、そーだっけい。あつ、わかったり。あたし、ゆうべの記憶とごっちゃに」

「わ……………！」

ハルユキは両手で大きなバツテンを作ってニコを黙らせると、連続咳払いで態勢を立て直し、強引に話題を切り替えた。

「そつ、そんなことより、他のみんなはまだ寝てるのかな？ 作戦会議する時間考えと、

そろそろ起こしたほうがいいかもしれないな——」

「あー、さつきレイカーも目エ醒ましてたから、いまごろ全員起こしてるだろ。そう言うあんたらはちゃんと寝たのかよ？」

天使モードを終了させたニコの問いに、黒雪姫は、いまだ多少の疑念を漂わせつつも頷いて答えた。

「ああ、問題ない。我々は少し早く起きてしまったので、ここで攻略作戦の検討などしていただけだ」

「ほおー、サクセンのセントウねえ」

「……何が言いたい」

「べつにいい」

二人の王の間にばちばちと火花が走った——ような錯覚にとらわれ、ハルユキは再び後退りかけたが、二度足を踏み外すのは悪か者のすることだ。どうにか踏みとどまり、発言する。

「え、えーと、それじゃ僕、みんなを呼んでみます。会議は、ミッドタウン・タワーを見ながらやったほうがいいでしょうから」

極力自然な動作を心がけつつ、数歩移動したところで、背後から黒雪姫の声が聞こえた。

「ハルユキ君、作戦が完了して向こうに戻ったら（ゆうべ）の件について訊きたいことがあるので、生徒会室に残るように」

「……………は、はひ」

何とかそれだけ答え、ハルユキは早歩きと小走りの中間のスピードで家へと向かった。

開け放たれたままのドアの奥では、ニコの予測どおりすでに全員が起床していた。どうやらあまり寝起きが良くないらしいバドさんとあきらただけは上体をふらふらさせていたが、機子に背中を押されながら外に出てくる。

すぐに護とチユリ、タクムも続き、家が空になるや、機子はすかさずドアを閉めて施錠した。ずいぶんさつちりしてるんだな、とハルユキが思っていると、振り向いて右手の鍵を握らしながら言う。

「現実世界だと、家も車も遠隔ロックでもうこんな鍵を使うことってないでしょう。だから、出たらすぐに掛けないと忘れるのよねえ」

「あ……なるほど……。実際に忘れたこと、あるんですか？」

「ありますよ、もちろん。掛け忘れたことに気づかないまま、現実時間で五日間……うち側では十四年近くも扉を開けっ放しにしてしまったわ」

「じゅ、じゅうよん……泥棒とか入らなかつたですか……？」

「それが、不思議だったのよね……家付属のストレージに入れてたアイテム類は全部無事だったのに、食材だけがきれいになくなってたんです。アツシユのしわざかと思っただけ、問い詰めても白状しなかつたですし」

いったいどんな問い詰め方だったんだろう、と想像しかけてから、ハルユキはふと気付いて激しくかぶりを振った。

「あ、ち、違いますよ、僕でもないですよー」

「あら、まだ訊かれてもいないのにずいぶん反応が早いですね？」

「ほはほんとに違いますってばー」

などというやり取りをしている間に、すぐ前を歩くあきらとバドさんの血圧も正常値に上昇したらしく、二人は同時に振り向いて言った。

「きつと、雲のしわざなの」

「早めにお暇したほうがいい」

「はは、まさか、加速世界にオバケが出るわけか……」

ハルユキが笑いながらそう言うのと、二人のみならず楓子までもが顔を見合わせ、次いで意味深長な微笑を浮かべた。

「え……？ で、出るんですか……？」

という問いにはもう答えてくれず、三人はすたすた泉の向こう側目指して歩いていく。

「あ、あの、ちよつと、教えてくださいよー」

慌てて後を追いかけてながらも、きよろさる周囲を見回してしまふハルユキだった。

九人が泉のほとりに揃うと、黒雪姫はもう一度インストを開き、累計ダイブ時間を確認して言った。

「いま、ちやうど十時間が経過したところだ。残念ながら……と言うべきか、変遷は発生しなかった。しばらくはこの黄昏ステージが続くだろう。メタトロンと戦うには少しばかり不利な条件だが、学校でも言ったとおり、地獄ステージ以外ではあの神獣級エネミーを倒すことはそもそも不可能だ。我々の目的はただ一つ、ミッドタウン・タワーへ突入し、ISSキット本体を破壊すること。極論、メタトロンは、それが可能ならば無視しても構わない。……ここまでは、何かあるかな？」

「はい」

とタカムが右手、ではなく鉄杭を上げた。

「マスター、念のためですが……メタトロンは、ばくらがタワー内部に入れば、攻撃を止めるんでしょいか？」

「ん……確かに、そこは気がかりなポイントではある」

領いた黒雪姫は、体の向きを変えて北西千二百メートルのところにそびえるミッドタウン・タワーを見やった。

「いまは視認できないが、メタトロンはあのビルの上層部に陣取っているはずだ。そしてビルから半径二百メートル以内に入ると侵入したあらゆるものに、即死級のレーザー攻撃を行う。ここま

では正しいな、クロウ？」

確認を求められ、ハルユキは深く頷いた。

「はい、屋上のメタトロンは、輪郭だけでですけど自分の眼で見ました。それと、テリトリリーに入ったものをとんでもない威力のレーザーで蒸発させるところも。二百メートルって数字は、緑のレギオンのアイアン・パウンドさんに聞いただけで……パウンドさんは、ミッドタウン・タワーのことを（小・帝・城）だって言っていました」

「ふうん、うまいことを言うわね」

くすりと笑った楓子は、視線を彼方の巨塔からハルユキへと移動させ、軽く首を傾げた。

「菊さん、いま「テリトリリー」に入ったもの」って言いましたけど、それはバーストリンカーに限らず、オブジェクトなら何でもレーザーで撃たれるという意味かしら？」

「え……ええと……」

ハルユキが考え込んでいる間に、チユリが「そっか！」と大声を出す。

「もしメタトロンが何でも撃つなら、攻撃範囲の外から右ごろとかパンパン投げてレーザーを無駄撃ちさせて、エネルギー切れにさせられるかもだね、姉さん」

「ええ、いかな神獣級エネミーとは言え、無限のエネルギーを持っているわけではありせんから。しつこく撃たせ続けていけば、いつかは尽きるはずですが……どうですか、菊さん？」

皆の視線が集まる中、ハルユキは持ち上げた顔をゆっくり左右に振った。

「いえ……残念ですけど、その手は使えないと思います。僕にメタトロンのレーザーを見せてくれた時、パウンドさんはわざわざ自分の右腕を断りました。あのロケットパンチ、壊れたらステージ出るまでそのままなんですよな？」

楓子が頷くのを確認し、続ける。

「だとしたら、もし石ころで済むならそうしたはずですよ。つまり、メタトロンは、少なくともデュエルアバターの一部が二百メートル圏内に入っていないとレーザーを撃たないんじゃないかと……」

「ふむ、なるほどな……。侵入者に反応してから、実際にレーザーを撃つまでのタイムラグはどんな感じだったかい？」

今度は黒雪姫に訊ねられ、ハルユキは再び十日前の映像を頭裏に再生させた。

「ええと、ロケットパンチが首都高を越えて、ミッドタウン・タワーに近づいて……そしたらタワーの天辺で透明な何かが動いて、背中から物凄くつかい腕を広げて、その翼がぼんやり光った……と思ったらレーザーが発射されたんです。反応から発射まで……そうですね、長くても二秒程度だったかと……」

「二秒か……。それでは、撃たれる前に二百メートルを走り抜けるのは難しいな……」

黒雪姫の言葉に、全員が頷く。

ハルユキ、もしくは観子一人だけならば、一方をブースターに使っての全速飛行でビルまで迫り着くことは不可能ではないかもしれない。だが、ミッドタウン・タワーの内部では何が待ち構えているか解らない。用意周到な加速研究会が、ISSキット本体の守りをタワー外部のメタトロンだけに任せているとは考えづらく、首尾良く侵入に成功したとしても更なる戦闘が予測される以上、単独での突入は逆に危険だ。

少し前のハルユキなら、こんな時には「大丈夫です、僕だけでやれます」と無謀かつ愚かなことを言い出していただろう。しかし、激動の一ヶ月を通してハルユキは学んだ。一人で戦わねばならない時もあれば、仲間を頼るべき時もあると。

ゆえに、九人が作る輪の中心へと一歩踏み出しながら、ハルユキは落ち着いた声で言った。

「大丈夫です……みんながタワーに迫り着くまで、僕がちゃんとメタトロンのレーザを防ぎますから」

それを聞いた八人は、しばらく何のリアクションもせずに、ただじつとハルユキを見た。

また何かおバかなことを言ってしまったのだろうか、と心配になりかけた、その時――

「よろしくお願いします、ターさん」

誰の発言に続き、皆が口々に大きな声を出した。

「頼んだよ、ハル！」「あなたが頼りなだからね！」「期待してるの」「信じてっかんな！」

「よろしく」任せましたよ、鶴さん

そして、最後に黒雪姫が深く頷き、言った。

「セイリユウ戦に続いて、またしても大役を担わせてしまうことになるが……しかしクロウ、キミの親こそがネガ・ネビュラスと、そして加速世界の未来を切り拓いていくのだと私は信じている。ISSキット本体を破壊し、世界を覆わんとしている闇を払い……そして我々の大切な友を救うために、キミの力を貸してくれ」

その言葉に対し、ハルユキは躊躇いなく答えた。

「僕の力はいともとなたのものです、黒の王。ひと言命じてくれれば、僕はどこまでも飛んでみせます」

「そうか。ならば……」

ハルユキに向けて進み出ると、黒雪姫は右手の剣をまっすぐ伸ばした。鋭い切っ先に、柔らかな透明光が宿り――次の瞬間、刃は音もなく分かれたれて、五本の指を作り出した。ハルユキを除く全員が息を呑む中、黒雪姫は命じるのではなく、穏やかに語りかけた。

「戦おう、共に」

「……はい！」

ハルユキは頷き、差し出された華奢な「手」をそっと握った。

一切の攻撃力を持たないこの応用心意技は、いままでは最長二十秒ほどしか持続させられなかったはずだ。しかし黒雪姫は、ハルユキの手を離すと、他の七人とも順に握手してのけた。

最後に握った黒子の手を離した直後、きんつ！と鋭い音を発して五本の指は剣に戻る。以前は戻らずに砕け散ってしまったので、進化したのは特異時間だけではないということだ。

黒雪姫との付き合いが最も長いあきらと論議。そして黒子は何か感じ入るところがあったのだらう。黒雪姫が元の場所に戻っても、しばらく自分の手を見詰め続けた。言葉が出ないネガ・ネビュラスのメンバーに代わって、ニコが威勢良く叫んだ。

「ロータスにここまでされちゃ、あたしも気合い入れねーとな！ エネミー相手なら遠慮はいらねー、最初っから心意全開でブツ飛ばそうぜー！」

おー！と唱和した声が、傍らの泉に緩やかな波紋を広げた。

その後、一時間ほどをかけてフリーフィングを行い、ミッドタウン・タワーへの突入ルートとフォーメーションを細部まで詰めた。

いよいよ五分後に出発となった時、ハルユキはふと思いついて、もう一度屋上の西端に移動した。眼下に広がる港区エリアの眺望に、じつと視線を凝らす。黒雪姫とベンチに座っていた時はミッドタウン・タワー周辺ばかり見てしまったが、もう一箇所、しっかり眼に焼き付け

ておくべき場所があることを思い出したのだ。日頃まったく訪れない場所なので、土地勘は渋谷以上にはないが、どうにか脳裏に東京の地図を広げて黄昏ステージの地形と重ね合わせる。

旧東京タワーの南側を横切る広い道路が、環状三号線。その向こう側は、各国の大使館が多くある麻布。さらに南側が、高級住宅地としてハルユキも名前くらいは知っている港区白金となる。

小型の——と言っても現実世界では豪邸なのだろうが——神殿遺跡が密集する白金エリアに眼を凝らすと、中央部にかなり広い空間が見えた。面積的には、旧東京タワー東側の芝公園に迫るほどもあるだろう。敷地内部には、大型の神殿群が余裕を持って立ち並んでいる。全てがひとときわ美麗なデザインで、夕陽を受けてルビー色に輝く佇まいは、遺跡ではなく建築されたばかりのように思える。

「きんつと……あそこだ……」

ハルユキは小声で呟き、神殿群の姿を記憶に焼き付けるべく懸命に眼を凝らし続けた。

あの場所が、移動前に黒雪姫が言った小中高から大学まで併設の女子校だらう。すなわち、白のレギオン《オシラトリ・ユニヴァース》の拠点。

現状、六大陸レギオンの中では最も緑豊かな相手だ。領土戦はもちろん、メンバーと通常対戦をした記憶すらない。ハルユキが見たことのある所属リンカーは、白の王の名代として七王會議に出席していた《アイボリー・タワー》ひとりだけで、しかもかなり印象が薄い。

しかし、白のレギオンは、レベル10を目指す黒雪姫の先達に必ず立ち寄り、案がてくるはずだ。白の王ホワイト・コスモスこそは、小学生だった黒雪姫を操って先代赤の王レッド・ライダー

を全損せしめた張本人にして、黒雪姫が究極の敵と見定める存在である。総勢がようやく七人になったばかりの新生ネガ・ネビュラスではまだまだ値するには遠い相手だが、いつかきつと戦う時がくる。

——その時は、絶対に、白の王に言ってやるんだ。

——妹を騙して、泣かせて、家から追い出すなんて、それがお姉さんの……《親》のすることか、って。

胸中でそんな決意を固めながら、ハルユキはオシラトリ・ユニヴァースの拠点の姿を眼の奥に焼き付けた。

勢いよく振り向くと、ちょうど塔の北側でタクムが手を上げたところだった。

「おーいハル、そろそろ出発するよ！」

「悪い、すぐ行く！」

駆け出した時にはもう、意識は再びメタロン攻略作戦へと切り替わっていた。

## 5

東京ミッドタウンは、ちょうど四十年前の二〇〇七年に開業した大型複合商業施設だ。市ヶ谷へ移転した防衛庁跡地を再開発したもので、総事業費は約三千七百億円。民間事業としては、経済規模の縮小が続く四七年現在の日本では考えられないほどのビッグプロジェクトだった——と、ハルユキが以前ネットで調べた記事には書いてあった。その記述どおり、すぐ近くにある六本木ヒルズ（こちらの総事業費は二千七百億円だったらしい）と並んで、現在も都心最大級のランドマークとなっている。

施設の中核たるミッドタウン・タワーは、高さ二百四十八メートル。さすがにオープンから四十年が経つ今では日本各地により高いビルが幾つも建っているが、ミラーガラスに覆われた偉容はいまだ色褪せていない。低層階には銀行や病院、会議場などが入り、中層階はオフィスフロア。そして高層階は、超のつく高級ホテルに占められている。

一週間の日曜に開かれた七王会議では、ISSキット本体の破壊が主たる議題となったが、その時、無制限中立フィールドでメタロンの攻撃を防ぎつつタワーに突入するという正攻法の他に、現実世界でまずミッドタウン・タワーに入り込み、しかる後に加速するという奇手が検討された。

オフィスフロアへの侵入は不可能に近いが、低層階の銀行あたりならフリーパスで入れる。しかし問題は、無制限中立フィールドにダイブするための安全な場所が確保できないことだ。最長でも一・八秒しか続かない通常対戦ならば銀行のロビーでもなんとかなるが、無制限フィールドでの戦いはいつ終わるか解らない。一階から高層階まで移動し、キット本体を破壊するのにとれくらい時間がかかるか、誰にも予想できないのだ。仮に何日単位の長期作戦となってしまう場合、十人近い子供が銀行ロビーのベンチを占拠して五十分とフルダイブすることになり、間違ひなく警備員に咎められる。

結局のところ、現実世界のミッドタウン・タワー内部で加速する作戦で行くなら、最初から高層階にダイブし、速やかにキット本体を破壊する必要がある。

そこで新たな問題となるのが、高層階を占める超高級ホテルだ。

ニューロリンカーとソーシャルカメラの普及以前は、どれほど高級なホテルだろうと誰でもフロントを素通りして客室フロアまで上れたらしい。しかしセキュリティの概念が大きく変化した現在では、たいていのホテルにニューロリンカーによる認証なしでは通過できないゲートが設けられている。

よって、高層階へ立ち入るためには正規の宿泊客となる必要があるのだが、問題のホテルはいちばん安い部屋でも一泊が三万円からというスペシャルな料金設定となっており、その額をばんと出せる者はさしもの七王会議にもいなかった。各レギオンがメンバーから幾ばくかずつ

お金を徴収すれば数人分の宿泊料金を捻出することは可能だったかもしれないが、それをした瞬間、加速世界のレギオンは現実世界のアウトロー集団へと堕してしまう。仮にISSキップ本体の破壊に成功しても、加速世界は避けがたい変質に見舞われるだろう。

以上のような諸事情から、ハルユキたち九人は、ひび割れた大理石が敷かれた道路を北西へ歩いている。ニコのトレーラーを使わないのは、走行音で万が一にもエネミーや他のパーストリンカーを引き寄せてしまわないためだ。

そのニコは、黒雪姫と一緒に先頭を行き、チユリとタムが何か話しながら続く。二人の後ろにはあきらとバドさんの《親子》が並んでいるが、こちらは特に会話をしている様子はない。少し離れてハルユキが一人で歩き、しんがりは譲と、車椅子に腰掛ける楓子が務めている。

旧東京タワーから東京ミッドタウンまでは一・二キロと意外に近いため、ゆっくり歩いても十五分はかからない。もうあと数分後には、ハルユキがこれまで参加した中でも最大級の戦いが始まるのだが、気持ちには不思議と静かだった。

「……やるべきことは……」

無意識のうちに口から零れた、ごく小さな囁き声を聞きつけたらしく、前を歩くアクア・カレントがスピードを落として隣に並んだ。

「何か、言った？」

「えっ、あの……カレンさん、耳がいいですね……」



「水は空気より四倍速く音が伝わるの」  
 「な、なるほど……。別に、たいしたことじゃないです。今日の戦いまでに、やるべきことは全部やったんだ、って自分に言い聞かせてただけで……」

「やるべきこと……」

するとあきらは、少し考え込む素振りを見せてから、ぼつりと言った。

「もしかしたら、私にはまだ残ってるかもしれない」

「え……やるべきことが、ですか？」

「そう。みんなが加速する前、無制限フィールドに入るためにレベルを4まで上げたけれど、まだそのレベルアップ・ボーナスも選択してないし、残ってるポイントを使えばもっとレベルも上げられるの」

「えっ」

ハルユキは短く声を上げてしまったが、すぐに気付く。あきら——アクア・カレントは、加速世界でただ一人の用心棒として、二年以上にもわたって低レベルリンカーとタッグを組んで戦ってきた。結果、《唯一の》なる二つ名を献上されるほどの勝利を重ねたわけだが、その過程で彼女自身も依頼人と同じだけのポイントを得てきたことになる。対戦相手のレベルが高いほど、勝った時は大量のポイントを獲得できるので、あきらが蓄積したポイントは相当な量に及ぶだろう。レベル4といわず、5にも6にも上げられるほどに。

即座にレベルを8まで上昇させたバドさんと比べれば、無制限フィールドへのダイブに必要な4で留めているあきらは確かに地味ではあるだろう。しかし——。

「でも、それは仕方ないですよ。僕も、最初のボーナス取る時はずいぶん長く悩み続けましたし……レベルだって、かなり安全マージン取ってからじゃやないと上げないようにしてますから。カレンさんの《やるべきこと》は、しっかり時間をかけて考えることだと思います。こういうふうに、デュエルアバターを育てる……いえ、育て直すのか」

すると、今度はあきらが少し驚いたように淡い水色のアイレンズを瞬かせた。しかしすぐにその表情は消え、穏やかな微笑の気配が水膜越しのフェイスマスクに滲む。

「……全損寸前のあなたを護衛したのはたった八ヶ月前なのに、そうは思えないの」

「へっ？ どういう意味ですか？」

「成長した、って意味。やるべきことをきちんとやってきた証なの。加速世界でも、現実世界でも」

これにはハルユキも「はひへ」と妙な音を漏らしてしまってから、慌てて付け加えた。

「は、本人には成長とかぜんぜん実感ないですけどね……。でも、今日の二つの作戦には絶対悔いを残したくなかったから、やるべきことや考えるべきことがもう残ってないか歩きながら考えてたんです」

「そう……」

あきらはもう一度、我が身を省みるように悔くと、ぼつりと囁いた。

「……やっぱり、私には残っているの。作戦の前にやるべき……いえ、言っておくべきことが」  
 「……」と口をきり、幸い——と言わねば、あきららが視線を向けたのは左隣のハルユキではなく前を歩くバドさんだった。

「レバード」

呼びかけられた豹頭アバターは、三角の耳をびくりと動かし、歩みを緩めてハルユキの左についた。なぜか二人に挟まれてしまい、首を縮めるハルユキの頭越しに、あきららは「子」へと語りかけた。

「レバード……ミヤア。私、あなたに謝らなきゃいけないの」

「……………」  
 やや唐突な言葉だったが、それだけで言わんとすることは伝わったらしく、バドさんは訳さ返さなかった。しかし一切の反応も見せずに、前を向いたまま無言で歩き続ける。

あきららは視線を行く手に向けてと、少し置いてから再び声を発した。

「あの時のこと、ごめんなさい。私が間違ってたの」

今度も、バドさんは何も答えようとしなかった。まったく音のしない無音の歩行で、ハルユキの五十センチ左をキープしている。徐々に張り詰めていく空気に耐えかね、そうつと後ろに下がろうとした、その時——。

「NP」

とバドさんが囁き、ハルユキはほっと息をつこうとしたが、すぐに続けられた言葉を聞いたとたん仮想の空気が喉に詰まった。

「……じゃない。私、あの時、とっても腹が立った。ものすごく。このうえなく」

常に発言の簡潔さを追求しているせつちも星人のバドさんが、形容詞を三つも重ねたからには、さつと掛け値なしの本気で怒ったのだ。いったいあきららは「子」であるバドさんに、何をしようとしたのか。

上半身を完全にフリーズさせたまま、立ち止まらず足を動かすハルユキに向けて、あきららが短く説明した。

「私、しばらく前に、レバードの記憶を消そうとしたの」

「えっ……………」

驚きのあまりつまづいたハルユキの左手を、バドさんが素早く支える。しかしそれを意識することでもせずに、ハルユキはただあきららの顔を見詰め続けた。フェイスマスクを覆う水流が揺れ、再び声が流れた。

「アバターが帝城に封印されて、《護衛》以外の対戦をしなくなつてからも、レバードとはリアルでたまに会って、話をしてたの。私は、レベルアップの凍結をやめてほしかった。いくら《親》とはいえ、他所のレギオンメンバーのために上げられるレベルを上げないなんてプロミ

ネンズのメンバーがよく思うはずないし、莫大な蓄積ポイントを狙って物理攻撃を仕掛けようとする奴が出てくるかもしれない。……でも、何度言ってもミヤアは困かなかったの」

あきらが短いため息をつくとき、水鏡の内側に小さな泡が生まれた。ハルユキの左腕を握ったままのバドさんが、それを見て呟くように言った。

「セイリュウのレベルドレインに対抗するには、大量の蓄積ポイントが必要になる。私にそう教えたのは、アキ、あなた」

「教えたことを、何度も後悔したの」

そこで二人の会話が途切れたので、ハルユキはおそろおそろと訊ねた。

「……だから、バドさんから、セイリュウに関する記憶を消そうと……？」

「ちよっと違うの。私の《記憶滴下》は、そこまで便利な技じゃない。昨日の領土戦前にもちよっとだけ説明したけど、消せるのは、私自身に関する記憶だけ」

「えっ……じゃ、じゃあ、消そうとしたのは……カレンさんの……」

呆然と口走るハルユキの左腕に、いきなり強烈な圧力が生まれた。見れば、バドさんの右手が――さすがに鉤爪は収納しているものの――上腕部の薄い装甲を思い切り握り締めている。その感覚がきっかけとなって、脳裏に十数時間前の記憶が甦った。セイリュウの祭壇から生還した直後のアクア・カレントとブラッド・レバードの、短いやりとり。

——だから、私のことは忘れてって、言ったのに。

——《親》を忘れるのは無理。

「本気……だったんですね……」

ハルユキが囁くと、あきらはかすかに頷いた。

「ミヤアの部屋で、不意を突いて直結対戦に持ち込もうとしたの。でも、あとこれくらいのことろで……」

指先を三センチほど開き、

「……押さえて込みを解かしてしまったの」

と語るあきらに、ハルユキは内心でさもありなんと考えた。リアルの水見あきらは恐らくハルユキと同学年、対してまだ本名を知らないバドさん（ミヤア、に近い名前ではあるが）は、横子と同じ高校一年生だ。身長の違いに加えて、大型エレクトリック・バイクを自在に振り回すバドさんは腕力もかなりあるので、押さえつけて強引に直結するのは難しいだろう。

しかし逆に言えば、あきらはそうまでしてバドさんの中から自分を消そうとしたのだ。

《親》として、《子》を守るために――。

「アキの気持ちは、解らなくもなかった」

右手から少し力を抜き、バドさんは静かに言った。

「私が怒ったのは、私にアキを忘れさせられると思ったこと。何をされても、忘れるはずない。

アキは加速世界だけじゃなく、現実世界でも私の大切な……」

その先は言葉にせず、ゆっくりハルユキの左腕を離したバドさんに、あきらは再び謝った。  
 「ごめんなさい。私は、私がミヤアまで封印状態に引き込んでしまっていると思った。でも、違った。アバターは封印されていて、私は少しずつ前に進み続けていたし……それはあなたもそうだった。レベルアップだけが、強くなる手段じゃない。私は誰よりもそのことを知っているはずだったのに」

「そうだぞ、カレン」

という声に、ハルユキが驚いて顔を上げると、いつの間にかすぐ前に黒雪姫の姿があった。ホバー移動で前進しながら、上体だけを振り向かせている。

黒雪姫だけではない。前後に離れてそれぞれの会話に集中していると思っていたチユリやタクム、楓子と諭。そしてニコまでが、ハルユキたちを取り囲む位置に移動している。どうやら会話は全員に聞かれていたようだ。

黒雪姫はあきらに向かって頷きかけ、続けて言った。

「私も、二年間にわたってグローバル・ネットを切り離し、小さな煙に閉じこもっていたが……近頃はあの時間ですら無駄ではなかったと思えるようになった。過去と現在、そして未来は繋がっているんだ。過ぎ去った全ての時間が《今》を作っている。こうして、お前と一緒に歩いている今を……」

黒の王が口を閉じると、その隣で器用に後ろ歩きする赤の王が語りかけた。

「それとな、カレント。プロミの連中が、バドのレベル凍結をよく思っていない、なんてことだね。もちろん詳しい事情はあたし以外誰も知らなかったけど、それでもみんな理解して、応援もしてたよ。バドは誰か大事なヤツのために頑張ってるんだ、ってさ。だいたい、言っちゃなんだけど、今こうしてあたしとバドがネガビユと共闘していること自体、外から見やレギオンを裏切ることになると思うぜ。でもあたしは信じてる。全部終わって事情を説明した時、三十二人のメンバー全員がちゃんと解ってくれるってな」

言い終えたニコがくるっと背中を向けても、あきらはしばらく黙ったままだった。  
 不意に、茜色に染まる空を見上げる。全身の水流が、永遠の夕焼けを映して燦めく。

「……過去があるからこそ、今がある……」

その声は、小川のせせらぎのように密やかだったが、ハルユキの、そしてきつと皆の意識に深く染み込んだ。

「今が違なって、未来が生まれる。……私は、もしかしたら、《過去》に少しでも干渉できる力を得たせいで、《今》や、《未来》まで遠ざけていたのかもかもしれない……。過去を受け入れれば、今がこんなに輝いて見えることを……忘れてしまっていたのかも……」

いつしか、全員が歩みを止め、広い道路の真ん中に立って空を見上げていた。

ハルユキは、あきらの言葉に自分を重ねずにはいられなかった。ハルユキにとって過去とは、辛く、苦しく、忘れられるものなら忘れてしまいたい記憶の地層のようなものだ。どこを抱っ

ても、心に突き刺さるような情景ばかりが現れる。

でもきつと、本当はその中にも、光り輝く小さな欠片が幾つも埋まっているのだ。

梅郷中ローカルネットの、バーチャルスカッシュ・コーナーに現れた黒雪姫。

チユリやタクムと一緒に、泥んこになって遊び回った児童公園。

そして、両親と手を繋いで夕暮れの高円寺を歩いた、遠い、遠い思い出――。

ブレイン・バースト・プログラムは、《今》を一千倍に引き延ばす。それは逃避的行為なのかもしれない。辛い現実から逃げ出し、同じ苦しみを抱えた仲間たちと一緒に傷を癒すためのシエルター、それが加速世界の本質の一部なのかもしれない。

でも、決して全てではない。拡張された《今》の中には、過去も、そして未来も含まれている。一千倍に広げられた過去の中から大切な宝石を見つけることもできるし、いつか訪れるであろう未来を一千倍の鮮やかさで予感することもできる。それが加速世界という場所なのだ。

「……繋げましょう」

ハルユキの背後で、楓子が春の微風を思わせる声で囁いた。

「過去を、未来へ。そのために……今を、全力で戦いましょう」

しなやかな右腕で、北西の空を指さす。

そこには、夕空を黒々と切り抜く巨大なシルエツトが存在した。もう五百メートルの距離にまで近づいた、ミッドタウン・タワー。壁面には大理石の円柱が建ち並び、柱頭には神々しい

ようなおどろおどろしいような姿の石像が飾られている。タワーの最上部に眼を凝らしても、相変わらず何も見えないが――しかし、確かに感じる。遥か高みから下界を睥睨する、何者かの存在を。

不可視の重圧に耐えかね、ハルユキが右足を引きかけた、その時。

楓子と同じように、黒雪姫も右手を持ち上げると、鋭利な切っ先をタワーの天辺に向けた。

負けじとニコが小さな拳を握って突き出す。あきらとバドさんもそれに倣い、誠、チユリもすぐに続く。

タクムが右腕の杭打ち機を掲げ、最後にハルユキも、ありったけの気合いを込めた右手でミッドタウン・タワーの頂を指さした。

九人のジェスチャーは、もちろん何の攻撃力も持たない。しかし、ハルユキは確かに見た。九本の指から放たれる意志力が融合し、無色のビームとなって空間を貫いて、彼方のタワーにまで到達するのを。そして、タワー上部で、巨大な輪郭がうっそりと蠢くのを。

「宣戦布告は伝わったようだな」

黒雪姫が不敵に言い放ち、右手の剣を真下へ切り払った。

全員が手を下ろすと、漆黒のアバターは振り向いて言った。

「では、ここでもう一度作戦を確認しておこう。メタトロンの活性化範囲は、ハルユキ君がアイアン・バウンドから伝えられた情報によれば半径二百メートルとなっている。だがあまりギ

リギリまで近づいて先制攻撃されてしまつては元も子もないので、待機位置はタワーから二百五十メートルの地点とする」

黒雪姫は上体を前め、剣の先端で白い敷石に小さな正方形を描いた。その外側を、もう一つ大きな四角で囲う。

「小さい四角がミッドタウン・タワー、大きいのは東京ミッドタウンの敷地だ。敷地の北半分は公園になっていて、タワーまで障害物はほとんどない。ゆえに、突入は北の公園から行う。」

まず、待機位置からシルバー・クロウが先行し、メタトロンが反応した地点で停止。二秒後にレーザーが発射されるので、《光学誘導》アビリティで防衛できることを確認したら前進、他八人も続く。二発目の発射までにはタワーに到達できると予想するが、もし間に合わなければ再びクロウを先頭に停止、レーザーに対処する。基本方針は以上だ」

旧東京タワーの屋上ですでに聞かされている作戦ではあるが、ハルユキは与えられた役割の重さを改めて意識した。

メタトロンのレーザーは必ず弾いてみせる。その決意に揺らぎはないが、しかし、仮に……万が一、最初のレーザーを防衛しておきながら二発目を防げなかったら。ハルユキだけでなく八人の仲間全員がメタトロンのテリトリ・奥深くで即死し、しかも蘇生直後に再びレーザーを受けて死ぬという無限E.K.状態に陥りかねない。どうあろうとその事態だけは防がねばならぬ。絶対に。

「……あそこに見える交差点を右に曲がった先が、待機位置となる公園だ。まずは周辺に他のエネミーがいないか確認し……」

続く黒雪姫の指示を聞きながら、ハルユキは左手の指先で右腕の金属装甲をなぞった。手首から肘にかけて、以前には存在しなかった溝が走っている。《光学誘導》アビリティ開眼に伴って出現した導光ロッドだ。背中の銀翼と比べればまるで目立たないが、確かに存在する、新たな力の証。

……頼んだぞ。みんなと……そして編さんを、守ってくれ。  
小さなパーツに胸の奥で囁きかけ、ハルユキは右拳を強く握った。

一度目のダイブから、内部時間で約十五時間後――。

ネガ・ネビュラスの七人とプロミネンスの二人は、最終ミツションたる《大天使メタトロン攻略作戦》の開始地点、東京ミッドタウンの北に広がる《ミッドタウン・ガーデン》の境界線に立った。

公園内に建物はまるで存在せず、二百五十メートル先に屹立する巨塔との間にはなだらかな草原だけが広がっている。あとは打ち合わせた通りにフォーメーションを組み、塔に向かって前進するだけ――

と、思われたのだが。

「……………あれ、なに……………」  
 広い公園が視界に入った途端、チユリがあつけにとられたように眩した。他の八人も、入り口となる大理石のアーチ手前で棒立ちになる。

草原の北側、メタトロン of 攻撃圏内から三十メートルほど離れた位置に、奇妙なモノが存在した。巨大な、楕円形のオブジェクト。しかし完全な楕円ではなく、下部がどっしりと太くて上部がすばまっているようにも見える。高さは六、七メートル、直径も四メートルほどはあるだろう。

「……………何だありや……………エネミーじゃねえっぽいけど……………」

ニコがアイレンズを細めながら言った。スカーレット・レインには「視覚拡張」というアビリティがあり、普通は見えない各種情報を「見る」ことができる。だが、そびえ立つ楕円体がエネミーでないことはハルユキにも解る。なぜならどれほど凝視しても体力ゲージが表示されないからだ。

「もともと現実世界の公園にあったオブジェが再現された……………んでしうか？」

タクムの言葉に、ハルユキはなるほどと納得しかけたが、その意見も楯子によって否定された。

「いえ、わたしの知る限り、この場所にあんなオブジェはありません。それに、黄昏ステージに再現されるなら白い大理石になるはずですよ」

「確かにそうだな。あの球体、というかタマゴは、何色と表現すればいいんだ？ 黒いような緑のような茶色のような……………」

黒雪姫が言ったとおり、赤い夕陽の下では、楕円体はかなり濃い色としか言えない。しかしハルユキは、色よりも「タマゴ」という単語に記憶の一部が刺激されるのを感じた。以前にも、加速世界で何かを見て「卵みたいだ」と思ったことがあったような、なかったような。

「ねえハル」

その時、いつの間にか隣にいたチユリが小声で囁いた。

「あたし……………どっかで、あれに似たもの見たような気が……………」

「え、お前も？」

「ってことは、ハルも？」

二人で顔を見合わせ、同じ方向に首を傾げ——そして同時に「あー」と短く声を上げる。黒雪姫たちが怪訝そうな視線を向けてくるのも意識せず、再び黒っぽいオブジェを凝視する。

確かに、とてもよく似たものを見ている。しかも、ほんの四日前。チユリと一緒に、「理論鏡面」アビリティ習得のきっかけを求めてタイプした無制限中立フィールドで。しかし、あれはオブジェクト——《もの》ではなかった。エネミーでも、強化外装でもなかった。ハルユキたちと同じ、パーストリンカー。

「で、でもチユ、あいつは……………あんなに大きく……………」

ハルユキが掠れ声で口走った、その刹那。

巨大な楕円体の側面、夕陽に照らされていない漆黒の部分に、赤い光が生まれた。西日の放射ではない。より深く、より濃密な、鮮血の赤。

光は、二度、三度と小刻みに瞬いた。その生物的な動きを見た瞬間、ハルユキは直感した。光の源は、眼だ。深紅の眼球を模した、強化外装。

ISSキット。

「あれは……敵です！」

夢中で叫んだハルユキの声に反応し、全員が身構えると同時に。

楕円体が、動いた。長い眼りから醜めた巨獣の如く、緩慢な身振いを繰り返しながら重々しく立ち上がる。草むらに沈み込んでいた黒い卵の下部には、短い脚が隠されていたのだ。

「敵!? エネミーか?」

黒雪姫の驚声に、ハルユキは素早くかぶりを振った。

「いえ、バーストリンカーです！」

「だ、だが、あのサイズは……」

その疑問はもつともだ。立ち上がった卵形アバターの身長は、強化外装全展開時の赤の王をも上回るだろう。それに、ハルユキが四日前に見た《彼》は、デュエルアバターとしては巨体ではあったがこれはど常軌を逸したサイズではなかった。三倍にまで巨大化してしまった理

由も、今の場所に存在する理由もまるで解らないが、しかし確かなのは、彼はISSキット・ユーズラーであり、同時に――

「あいつ、マゼンター・シザーの仲間なの」

ハルユキの思考を代弁するチユリの言葉に、全員の緊張感が一気に高まった。ことにタクムの反応は顕著で、鋭く息を呑みながら、右腕の枕打ち機を音高く構える。

「なら、先制攻撃を……!」

今にも突進しそうなタクムを、ハルユキは慌てて制止した。

「待ったタク、あいつ、物理攻撃はまったく効かないんだ! 弱点は確か、炎と、ええと……!」

「凍結プラス打撃!」

すかさずチユリが叫ぶが、九人の中に冷気を操れる者はいない。代わりに、火炎攻撃が得意なバーストリンカーは二人いる。

「任せろ!」

「なのですよ!」

ニコと誰か最前面に飛び出し、身構える。ニコの拳を真紅の過剰光が包み、誰の長弓には燃えさかる火矢がつかえられる。二人の、小さくも頼もしい後ろ姿に向けて、黒雪姫が鋭く指示を飛ばした。

「可能ならISSキットを狙え! 心意技による反撃にも気をつけろ! ―撃て!」



こうつ、と空気を震わせて、火炎でできた拳と矢が放たれた。ミドルレベル以下のパーストリンカーならば、一撃で消し飛んでもおかしくない威力の攻撃だ。胴形アバターの動きは緩慢で、もう防衛も回避も間に合わない。胴体前面に張り付くISSキット目掛けて、二つの炎が猛然と迫る――

ぐばっ。

湿った音とともに、羽が真横に裂けた。四日前、レギオン「ブチ・バケ」のマスターであるショコラ・バベッターを呑み込もうとした巨大な「口」がいつばいに開かれる。内側には齒も舌も見えず、代わりにねっとりとした闇に満たされている。

その暗闇の奥から、突如、漆黒のエネルギー弾が五、六発同時に発射された。それらは二つの火炎弾と正面から衝突し、空中でたちまち膨れ上がった。ハルユキは大爆発を予感したが、そうはならなかった。渦巻く紅蓮と漆黒は、互いの威力を相殺するかのようにもみるみる小さくなっていく。

つまり、胴アバターの口から発射されたのは虚無属性の、しかもニコの「幅射拳」を打ち消したからには心意攻撃だ。そんな遠隔技を、ハルユキはひとつしか知らない。ISSキットが装着者に与える二種の技のひとつ、「ダーク・ショット」。しかしあれは、左右の手からしか発射できなかったはずだ。

「なんで……口から……!?」

驚愕の声を漏らすハルユキの眼前で、いつそう驚くべきことが起きた。

縦二メートル、幅四メートルものサイズに開かれた巨大胴アバターの口から、次々と新たな人影が飛び出してきたのだ。その数、五、十……それ以上。サイズも形状も様々なシルエットは、戦闘用の人形では有り得ない。

「レイン、メイデン、下がれ!」

黒雪姫の指示で、遠隔型のニコと誰かが後退する。二人を守るべく、ハルユキはタクムと共に前に出たが、それ以上は思考が現象についていけない。

胴形アバターの前に横一列に並んでいく新手のパーストリンカーたちを、ハルユキは愕然と凝視した。十三人目のアバターが高々とジャンプし、くるりと前退りを決めて草地に降り立つと、羽はようやく口を閉じた。すると、まるで中身を全て吐き尽くしたとでもいうかのように、巨大な羽がみるみる縮んでいく。

ハルユキの記憶にある、身長二・五メートルのサイズに戻ると胴アバターの収縮は止まった。短い手足、丸い小さな眼、間違いない「アポカド・アポイダ」だ。

そして、総勢十四名となったパーストリンカー集団を背後に従えて立つ細身の女性型アバターこそ、四日前にハルユキたちと激戦を繰り広げ、アッシュ・ローラーにISSキットを寄生させた「マゼンタ・シザー」に他ならなかった。

暗い赤紫色の包帯を全身に巻き付けたような姿のマゼンタは、全身でそこだけ露出した口許

に艶然とした笑みを浮かべ、挨拶のつもりか、胸の前に交差させた両手を左右に広げた。その仕草と同期して、胸部の包帯装甲がはらりと解け、胸に貼り付くISSキットを露わにする。背後に並ぶ、アボカドを含む全員の体にも、血の色の眼珠が小暗く輝いている。

マゼンタ以下の十四人と、ハルユキたち九人は、およそ十メートルの距離を取って対峙した。張り詰めた静寂を、低い咳き音が破った。

「どうやっ……て……」

声の主は、右手の強化外装を油断無く構えたままのタクムだ。そのひと言はハルユキの内心をも代弁していた。

いったい、どうやって九人待ち伏せしたのか。

マゼンタは昨日アッシュ・ローラーを襲撃した当人なのだから、ハルユキたちがアッシュを救うために今日ISSキット本体の破壊に挑むところまでは予想できるかもしれない。だが、正確な時間を特定することは絶対に無理だ。そしてこは、一千倍に加速された時間が流れる無制限中立フィールド。仮に現実時間の午前十時から待ち伏せしていたとしても、内部では実に三ヶ月以上の時間が過ぎ去っている計算になる。

それはどの長期間、ひとところに留まって周囲を警戒し続ければ、いざ機動的に現れた時には疲労困憊してしまっても戦えないはずだ。つまり、無制限フィールドでの待ち伏せは、事実上不可能なのだ。それができるのは、ハルユキの知る限り唯一の《減速能力者》である、



加速研究会副会長ブラック・パイスのみ。

またあいつが糸を引いているのか……とハルユキは一瞬考えた。ブラック・パイスならば、午前中からミッドタウン・タワー周辺に潜み、標的を発見してから現実世界に戻ってマゼンタに知らせることは可能だ。だがその場合、現実個でのタイムラグを考えれば、マゼンタたちの登場は九人よりも後にならねばならず、公園に到着した時点ですでにアポカド・アポイダの姿があったことと矛盾する。それに、ブラック・パイスに加速研究会は、ミッドタウン・タワーの防衛はメタロイドだけで充分と考えているだろうから、仲間でもないマゼンタのためにそこまで尽力するとは思えない。

息をいちど吸って吐く間にそこまで考えたハルユキだったが、マゼンタ・シザーがいかなる手段で待ち伏せを成功させたのかはどうしても解らなかった。身構えながらも頭を絞り続けるハルユキに、マゼンタは薄く微笑みかけると、ついに言葉を発した。

「こんにちは、シルバー・クロウ。お久しぶり、シアン・パイル。また会えて嬉しいわ」

「……ばくは、二度と会いたくなかったです」

タクムが低い声で応じる。彼は今月中頃に世田谷エリアでマゼンタと接触し、ISSキットの封印カードを譲渡されているのだ。当初は情報収集のために入手したそれを、やむを得ない事情からタクムは装着してしまい、あわや心意のダークサイドに引き込まれかけるという目に遭った。

つややかな唇に笑みを湛えたまま、マゼンタは尖った肩を軽くすくめた。

「ツレないわね。ワタシは、アナタとの再会をとっても楽しみにしていたのよ」

「なら、それを証明するために、どうやってばくらを待ち伏せたのか教えてください」

何が《なら》なのか解らないタクムの強引な要請に、マゼンタは微笑を苦笑に変えはしたもののあつさり頷いた。

「イイわよ。クロウとの約束を破っちゃったお詫びもしなきゃだし、ね」

「約束……？」

飄忽（ひょうこく）とに魅（み）いてから、ようやく思い出す。

四日前、世田谷エリアで戦った時、ハルユキは確かにマゼンタと約束めいた言葉を交わした。「あんたが目的を達成するのが先か、僕たちがISSキット本体を破壊するのが先か勝負だ」と。マゼンタは今日、キット本体を破壊せんとするハルユキたちを直接妨害（びやう）に来ているわけで、それが約束違反と取れないこともない。しかし、だとすれば、マゼンタの行動はいよいよ不可解だ。

背後でチユリが黒雪姫たちに事情を説明する声を聞きながら、ハルユキは湯（ゆ）き上がる疑問を投げかけた。

「でも、マゼンタ。あんたが昨日、アッシュ・ローラーにISSキットを無理やり寄生させたりしなければ、僕たちはキット本体の破壊をこんなに急がなかった。なんでだ……？ どうし

て、アッシュさんを狙ったんだ？」

「その質問には、残念だけど答えられないわね。ワタシにも、いろいろシガラミついてものがあ  
るのよ。……で、最初の質問だけど。答えはカンタンよ……無制限フィールドでの待ち伏せが  
難しいのは、何日、何ヶ月と流れる時間に耐えられないからでしょ？　なら、その時間を感じ  
ずに済めば、いくらでも待っていられると思わない？」

「時間を……感じない……？」

確かに、時間とは非常に主観的なものだ。楽しい時間は早く過ぎ、つらい時間はゆっくりと  
流れる。しかし、待ち伏せが楽しいはずがない。いつ、どこから敵が現れるかと警戒しながら  
ひたすら待機する時間は、むしろ長く感じるのではないか。

ヒントらしき言葉を聞いても疑問は深まるばかりだったが、その時、ハルユキの背後から静  
かな声が響いた。

「そうか……後ろの卵形デュエルアバターに秘密があるんだな？　口の中に入っていたのは、

身を隠すためだけではあるまい？」

黒雪姫の指摘に、マゼンタは艶然と頷き、右手で後方を示した。

「ご明察。でも、卵じゃなくてアボカドなのよ。あんまり喋るのがトクイな子じゃないから、  
ワタシから紹介するわ。カレはアボカド・アボイダ、以後ヨロシクね」

名前を呼ばれたせいか、最後方に陣取る濃緑色のアバターがわずかに身じろぎした。だいぶ

小さくなってしまったが、それでもこの場に存在する二十三名の中では間違いなく最大だ。

戻した右手を腰に当て、マゼンタは言葉が続けた。

「（アボイダ）は回避する者、ってイミだけど、ソレだけじゃないの。元々は、虚無にする  
……ってイミの言葉なのよ」

「虚無……だと？」

「そう。アボカドの口の中には、虚無以外には何もナイの。空間がナイから何人でも呑み込め  
るし……時間がナイから、中に入っている間は、外の時間を感じない。もともと、呑み込まれ  
ると虚無にだんだんアバターを溶かされちゃうから、ソレへの防御手段は必要なんだけどね」  
マゼンタの言葉を解釈するのに、二秒ほどを要した。どうにかイメージできた瞬間、ハル  
ユキは驚きの声を上げていた。

「ええっ……じゃあ、つまり、こういうことですか？　無制限フィールドで、アボカドさんの  
口の中に入って、すぐにまた口が開いて外に出ると、実際にはものすごく長い時間が経ってる  
……みたいなの？」

「そのとおりよ、クロウ。ワタシの主観では、アボカドの口に入ったのはついさっきなの。ち  
なみに、ワタシたちがココで待ち伏せを始めたのは現実時間で午前九時ちよつと前だったんだ  
けど、今って何時なのかしら？」

「……十二時半、くらいです」

「三時間半か。ってことは、こっちだと五ヶ月近く過ぎちゃってるわけね。普通だったら待ちくたびれて壊る元氣もないだろうケド、そういうコトだからお氣遣いなく」

につこり笑うマゼンタに向けて――

低い、しかし強烈な熱量を秘めた声が飛んだ。

「てめーの言葉にや陰謀があるぜ、マゼンタ・シザーとやら」

ニコだ。ハルユキがちらりと後ろを見ると、黒の王の隣に立つ赤の王は、大きなアイレンズ

に鋭い光を浮かべてマゼンタを睨んでいた。

「あら、ギマンって何かしら……？」

「誤魔化すなよ、てめーにももう解ってるはずだ。虚無だかんだか知らねーが、アボカド・

アボイダの口に入ってた十三人が時間を感じなかったのは確かなんだろうさ。でもな……アボ

カド自身はどうなんだよ？ あいつは、この公園でたった一人、五ヶ月もひたすら待ち続けた

んじやねーのか？ それがどんなに辛いことか、てめーには解ってるのかよ？」

高熱の炎にも似た糾弾を浴びて、ついにマゼンタの口許から笑みが薄れ、消えた。

ニコの言葉に答えたのは、マゼンタではなく、後方に立つアボカド自身だった。

「おれ……平気……！」

小さな真ん丸い眼を明滅させながら、アボカドは叫ぶ。

「おれ、ずっと、寝てた……！ だから、平気……！」

大きな口の下にはISSキットが寄生しているが、どうやらアボカドは、マゼンタほどでは

ないにせよ自我を保っているようだ。対して、アボカドの前に並ぶ十二人は一様に押し黙り、

アイレンズも光を失ってしまっている。思い返してみれば、四日前にショコラ・パベッターを

食べようとした時も、アボカドは「ショコ、好き」と繰り返していた。

更に何か叫ぼうとする大型アバターを、マゼンタは右手で制した。ニコに向けて軽く一礼し、

口を開く。

「初めまして、赤の王。アナタと《血まみれ仔猫》が加わっているのは予想外だったけれど、

でも会えて嬉しいわ。……アナタの言うとおり、確かにワタシはアボカドに辛い役目を強いた。

ワタシだけでも長すぎる待ち伏せに付き合うべきだったけど、そうしなかった。でも、待つのが

面倒だったワケじゃないわよ。……黒の王を相手にするなら、万全のコンディションで戦い

たかった。ソレだけ」

その言葉を聞いた黒雪姫は、研ぎ上げられた刃の如き声で応じた。

「やはり、貴様がクロウに託したISSキットの封印カードは、私への挑戦状だったのだな、

マゼンタ・シザー」

「まあ、そういうコトになるわね。予定よりもかなり早く終わったケド……コレ以上を望

むのは贅沢というモノだわ。邪魔が入らないうえに制限時間もない最高の舞台に、いまのワタ

シの全戦力を揃えられたんだから。黒の王と総力戦ができるなら、どんな譲りも甘んじて受け

るわ」

「……私と貴様はこれが初対面だと思いがな。なぜそれほどまでに私との戦いを望む？」

黒雪姫の問いに、マゼンタはすぐには答えようとしなかった。

細く長い指先で、両腕に装備された片刃の短剣をつうつと擦る。顔の大半を覆い隠す包帯帯装甲の下で、唇が一瞬だけきつく引き結ばれる。

やがて発せられた声は、これまでハルユキが聞いたマゼンタ・シザーのあらゆる言葉の中で、最も鋭く、最も冷ややかだった。

「それは、アナタが、とても大きなモノを持って生まれたからよ、ブラック・ロータス」

「ほう？ たえば、何だ？」

「数え切れないほどあると思うけど……集約すれば、『力』と『意志』かしらね？ パーストリンカーとして加速世界に降り立った時、すでにあなたは圧倒的な戦闘力と確固たる意志力を備えていた。アナタの姿が、ソレを証明している」

マゼンタは音もなく右手を持ち上げ、指先を黒雪姫に突きつけた。

「同レベル同ボテンシャルの原則？ フフ、笑っちゃうわね。ほんとうは、ダレだって心の中で認めてるハズよ。最初から強いパーストリンカーと、そうじゃないパーストリンカーがいるってコトをね」

——勝手なことを言うな！

ハルユキは叫びたかった。(潜在力)とはアビリティや必殺技の性能だけを指す言葉ではない。加速世界に降り立った時はろくな必殺技も強化外装も持っていなかったとしても、自分の心が生み出した分身を信じ、詰めずに手を空へと伸ばし続けていれば、いつか必ずデュエルパートナーは必ずやってくる。ハルユキは、その信念に支えられて今日まで戦ってきたのだ。

しかし同時に、耳の奥では、四日前にマゼンタから聞かされた言葉がまざまざと甦っていた。アポカド・アポイダは、生まれた直後に(親)から見捨てられ、親を含むレギオンメンバーに初期ボイントを強奪された。全損の瀬戸際でマゼンタにISSキットを与えられ、親たちを返り討ちにして、逆に全損に追い込んだ。

アポカドに(いつか)はなかったのだ。マゼンタが介入しなければ確実に全ボイントを奪われ、加速世界から永遠に追放されていた。強い力も、憎らしい外見も持っていなかったという、それだけの理由によって。アポカドを救ったのは、同レベル同ボテンシャルの原則ではなく、ISSキットだ。

歯を食いしばったまま何も言えないでいると、ハルユキとタクムの間に差し出た黒雪姫が、落ち着いた声を出した。

「貴様の主張は心に留めておこう。だが、それと、私の姿がどう関係する？」

にべもない反応に、マゼンタは再び薄い笑みを滲ませる。

「……デュエルパートナーは、心の傷を鎮静として生まれる。ソレは誰でも知ってるコトよね。

傷、つまり「欠落」の形や大きさが、アバターに反映されるとしたら……コレはワタシの個人的な意見だケド、アバターの対称性が高ければ高いほど、そのバーストリンカーは、他人を必要としないコトになる」

「対称性……？ それは、左右が同じ形、ということか？」

「そうね、左右でも、前後でも、上下でも。対称とは、つきつめれば、不変だってコト。それだけで完結してるってコト。学校で習ったでしょ？ 対称性が高い分子ほど安定してて、壊れたり、結合したりしない……って」

「……そんなの習ったかな」

こんな状況ではあるが少々不安になったハルユキは、左後ろに立つバードさんについてしまった。

「……そ、そうなんですか？」

答えは、

「作戦が終わったら「ペンゼン」(共鳴安定化)で検索して」

というものだった。とりあえず中学二年で習う感じの用語ではなかったもので、「ハ、ハイ」と頷いて前に向き直る。同時に、黒雪姫が小さく肩をすくめるような仕草とともに言った。

「分子の対称性をデュエルアバターに当てはめるのは少々強引だと思うがな。だいたい、私のアバターが左右対称だと言うのなら、貴様も、貴様の仲間たちもそうだろう？」

「ぱっと見は、そうかもね。でもね、黒の王、アナタのその姿には、他のほとんどのアバターが持っていない、完全なる対称性が隠れているのよ」

謎めいた言葉を口にしたマゼンタは、しなやかな動きで右手を持ち上げ、細い指をいっばいに広げた。ジェスチャーの意味をすぐには理解できず、ハルユキはマゼンタの手に入った。指の数は、ハルユキと——そしてほとんどのデュエルアバターと同じ五本。配置もノーマルで、わざわざ見せつけるような何かがあるとは思えない……。

そこまで考えた瞬間、ハルユキはようやく理解した。

デュエルアバターの、いや人間の手は、それだけを見るなら左右対称ではない。人差し指と小指の長さはぜんぜん違うし、親指の反対側には何も無い。だが、この場でただ一人、黒の王ブラック・ロータスだけは、左右、そして前後対称の手を持っているのだ。触れるもの全てを断ち切る、両刃の剣として。

黒雪姫には、マゼンタが手を掲げた時点で彼女の言わんとすることが解っていたのだろう。沈黙を守る黒の王を正面から見据え、マゼンタは鋭さを増した声で続けた。

「ワタシたちの手は非対称。誰かの手と繋ぎ合わせた時だけ、対称になる。でも、ブラック・ロータス、アナタの手は違うわ。アナタの二本の剣は、ソレだけで完全な対称性を得ている。アナタは誰が必要としない。最初から、必要なモノを全て持って生まれてきたから」

「か……勝手なことを……！」

どうしても我慢できなくなり、ハルユキは声を荒らげた。  
 「アバターの外見だけで、そんなことまで解るもんか！ だいたいあんた、この前は「ペアが嫌いだ」って言ってたろー！ いまの言い草と矛盾してるぞー！」

「あら、ちよっと違うわよ、ボク」

マゼンタは、下ろした右手をひらりと翻す。

「ワタシが嫌いなのは「二つで一つ」。だいたい、ワタシは黒の王が究極の対称性を体現してるから戦いたいんじゃないのよ。ひとりでドコまでも行けるほどの強さを持ちながら、(子)を作って、レギオンを結成して、親子ゴックコや友情ゴックコをしているのが気に入らないの。黒のレギオンの、「悪と戦う選はれし騎士たち」みたいな感じが、どうしても許せないのよ」

抑制された口調とは裏腹に、肉厚の刃を深々と突き立てるような言葉だった。憤激のあまり、ハルユキは目の前が白っぽくなるのを感じた。タクムとチユリのみならず、いままで黙って聞いていた観子たちからも、無色の炎に似たオーラが放たれる。

だが、ここまで言われてもなお、黒雪姫は気色も様子もなく淡々と応じた。

「なるほどな、やつと貴様の言わんとするところが理解できたよ、マゼンタ・シザー。ISSキットによる加速世界の均質化を目指す貴様にとっては、いわゆるエリート集団が最大の敵というわけだ。だがな……、そもそもISSキットという代物は、たった一人の……」

そこで言葉を切り、軽くかぶりを振る。

黒雪姫が吞み込んだのは、おそらく、「たった一人の究極の狂戦士を造るためのものだ」という意味合いの言葉だろう。ISSキット本体に膨大な負の心意を蓄積させ、それを高位の強化外装に流し込んで、《災禍の鎧マークII》を誕生させる——。三日前、有田家を訪れたアクア・カレントが披露した仮説だ。いかにも加速研究会が考えそうなことではあるが、残念ながら証拠は何もない。今それを口にしても、マゼンタを納得させられるとは思えない。

代わりに黒雪姫は、あくまで淡々とした声で続けた。

「……いや、キットについては今更言うべきことはない。我々は、力でそれを破壊するためにこの場所へ来たのだからな。それに、我々をエリート集団扱いする貴様の言い草にも承服し兼ねるが……事ここらに及べば、どんな反駁も意味はあるまい。あとは拳で語ろう。我々の力が、最初からシステムに与えられただけのものであるか否かを」

磨き上げられた鋼の如く、滑らかな奥に強靱な芯を秘めた黒の王の言葉を、マゼンタは正面から受け止め、頷いた。

「そうね。ワタシも言いたいコトは言わせてもらったけど……最後にもう一つだけ。

この戦いでソッチが勝ったら、ワタシたち十四人をどうしようとか構わないわ。たとえ連続キルでポイント全損させられても、恨んだりしない。でも、コッチが勝ったら……黒の王、アナタはもうISSキットには手出ししないで。世界が生まれ変わるところを、ただ見ていると約束して」



「……せっかく困難な待ち伏せを成功させたのに、それだけでいいのか？ 無制限フィールドで勝利すれば、我々を全損させたり、あるいは一人ずつISSキットを強制装着させることも可能だと思うが」

「イイわ。《時計の魔女》がいる以上キットは制がされてしまうし、王を二人全損させようと思つたら、ドレだけ時間がかかるか想像もできないもの。それに……ワタシは、アナタたちに見てほしいの。全アバターの能力が平均化されて、タッグもレギオンも意味を持たなくなった世界を。力にも姿にも恵まれずに生まれたバーストリンカーが、ソレを理由に排斥されるコトのない、新しい加速世界の姿を！」

マゼンタが声高に言い切ったその瞬間、背後にひっそり並んでいたデュエルアバターたちのアイルンズが、一様に赤く輝いた。まるで、マゼンタ・シザーのラジカルすぎる思想に、強く共鳴するかのように。

恐らく、アボカドを含むマゼンタ配下の十三人は、世田谷エリアや大田エリアを拠点としていたバーストリンカーたちだろう。レギオン（ブチ・パケ）の二人がそうだったように、彼らの中にも意に反してキットを無理やり寄生させられた者はいるはずだ。しかし、キットの出現から二週間以上が経ち、夜ごとの《並列処理》による同調が進んだ今、全員がマゼンタの強固な信念のもとに一つになっていると見るべきだ。個別の説得は、もはや通用するまい。

「……よからう。ここで敗れば、ネガ・ネビュラスは貴様が目的を果たすまで干渉しないと

約束する。もつとも、仮に我々以外の全バーストリンカーがISSキット・ユーザーになったとしても、我々は戦いをやめるつもりはないが」

黒雪姫の宣言に、マゼンタは満足そうに微笑んだ。

「ソレでこそ黒の王、ね。じゃあ、そろそろ始めましょうか。悪いケド、一人ずつ代表を出しての試合形式トカは受けられないわよ。そんな戦争ゴッコは趣味じゃないから」

「もちろん私もそんなことは考えていない。どうせ貴様らがISSキットを……負の心意技を使う以上、ルール無用の殺し合いにならざるを得ないさ。そして、どちらが勝とうと貴様らは知ることになる。何でもありの心意技の恐ろしさ、惨たらしさ、そして空しさを……大昔から心意システムが秘匿され続けてきた、その理由をな」

そう告げる黒雪姫の声は、やはりあくまでも静かで、いつそ悲しげにすら感じられた。だが同時に、仄かな青紫色に染めく過剰光が漆黒のアバターを包み、黒雪姫の確固たる闘志を示した。

黒の王は、少し体を傾け、周囲のメンバーに向けて囁いた。

「レイン、レイカー、それに皆。マゼンタにはああ言ったが、強力な心意技は大型エネミーを引き寄せてしまうから、序盤は耐えてこぞという所で一気に殲滅する。バーストリンカー相手だと少し穴に引きずられるかもしれないが……それは全て終わってから対処しよう」

「おう」「了解」

ニコと楓子が答へ、他の六人も頷いた。臨戦態勢に入ろうとしたその時、黒雪姫の向こう側

にいるタカムが、強い決意を秘めた声で言った。  
「マスター。最初、マゼンタ・シザーの相手は任せてくれませんか。彼女とネガ・ネビュラス

の因縁を作ってしまったのはばくですから」  
「……いいだろう。だが、突出しすぎるなよ。皆も忘れてはいないと思うが、この場所はメタ

トロンの攻撃範囲ぎりぎりだ。タワーに近づきすぎれば、上からレーザを撃たれてしまう。

限界ラインは……」  
「言いながら、黒雪姫は草原を東西に横切る大理石の小道を視線で示した。メタトロンの

攻撃範囲である二百メートルラインからは、二十メートルほど離れている。  
「あの道に設定しよう。何かあってもあそこを越えないように気をつけてくれ」

再び、全員が深く頷いた。

十メートル南で、同じように仲間たちに指示を出していたマゼンタがこちらに向き直り、左

右の腰に装備された小剣を同時に外した。

「バイル、憶えてると思うけど……」

ハルユキが驚くと、タカムはすぐに応じた。

「あの剣が合体してハサミになる……だろ？ 大丈夫、対抗策は考えてるよ。クロウ、ベル

を……」

今度は、ハルユキが脚座に頷いた。

「任せる、ちゃんと守る」

いつもなら「またミソツカス扱いして！」とチユリがむくれる場面だが、さすがに今は何も

言わずにハルユキのすぐ後ろに移動した。この戦場で、恐らくチユリだけが心意システムを使

えない。貴重な回復術師である彼女を狙う心意技は、ハルユキが全て防がねばならない。

黒の王をリーダーとする九人と、マゼンタ・シザーをリーダーとする十四人は、ガシヤッ！

と硬質な音を発して同時に身構えた。

黄昏ステージの乾いた大気が急速に張り詰めていく。金属装甲が帯電するかの如き緊迫感の

中、ハルユキは意識の片隅でちらりと考えた。

もしこれがノーマルな集団戦なら、開戦前に敵チームの全員を注視し、アバターの色や形状

から能力を推測するところだ。しかし、この戦いに限ってはほぼ意味がない。なぜなら、マゼ

ンタを除く敵の全員が、ISSキット由来の心意技（ダーク・プロウ）（ダーク・ショット）

だけで攻撃してくるはずだからだ。十三人の大きさ、形状、装甲色は様々だが、もはやそれは

バーストリンカーの個性を表さない。

……マゼンタ・シザー。

……本当に、それが、あんなの望む加速世界の姿なのか。

ハルユキの脳裏に湧いたその思考が、限界まで圧縮された戦場の空気に着火したかのよう

「二十三のデュエルアバターが、一気に動いた。」

## 6

先手を取ったのはマゼンタ軍だった。

横一列に並ぶ十二人が完璧に同期した動きで右手を突き出し、最後方のアボカド・アボイダが少し遅れて同じ構えを取る。全員の前につけ、眼球型強化外装が、濁った血の色の閃光を放つ。

「[[ターク・ショット]]」

びったりと息の合った——今度もアボカドだけわずかに遅れたが——、しかし耳障りな不協和音に満ちた技名発声。十三人の掌にどす黒いオーラが渦巻き、凝集して、ズシュウッ！と重い振動音とともに漆黒のビームを迸らせる。

ここ二週間の戦いで、幾度となく見たり受けたたりしてきた技だが、さすがにこれはどの数の集中射撃を浴びせかけられるのは初めてだった。一発直撃されただけでも即死しかねない威力を秘めた虚無エネルギーの非実体弾は、空中で四、五発ずつ寄り集まり、三本の巨大な槍となつて迫る。

真っ先に反応したのは、ロータス軍九人の真ん中に陣取る樞子だった。

「〔旋回風路〕！」

車椅子に座ったまま右手を前へとかざし、緑色のつむじ風を生み出す。ハルユキと黒雪姫の間を抜けて伸びる風はたちまち横向きの竜巻とでも言うべき規模に膨れ上がり、固まって立つ九人をはとんど覆い隠す。

直後、三本の太槍が竜巻の前面に触れた。ぎゅうううっ！と異様な共鳴音を放ちながら槍は竜巻に引き込まれ、緑の螺旋を黒く濁らせる。

文化祭の最中に、ISSキットに支配されたアッシュ・ローラーのバイクと戦った時、楓子はこの技で二発のダーク・ショットを同時に弾いてみせた。だが、今回はその六倍以上の威力だ。竜巻を支える楓子の右手が震え、唇からかすかな呼吸が漏れる。

楓太のバネを弾くような衝撃とともに、槍の一本が竜巻から弾き出され、遠く右後方の建物に突き刺さって大穴を空けた。続いてもう一本がまっすぐ上に飛び出し、夕焼け空の彼方へと消えた。

しかし最後の槍は、まるで生き物の如く遠心力に抗い、じわ、じわと竜巻の根本に近づいてくる。もしまっすぐ抜けてくれば、楓子の右腕は丸ごと吹き飛ばされるだろう。ハルユキは無意識のうちに右手の五指を伸ばし、「光線剣」の構えを取りかけたが、ヘタに手を出せば竜巻の回転力を削いでしまう。そうしている間にも、漆黒の槍は少しずつ前進してくる――。

「激渦流」

得かな声が響いたのはその時だった。氷見あきら――アクア・カレントは、まっすぐ伸ばし

た左手から青い渦を生み出した。楓子の技とよく似ているが、竜巻を形作っているのは風ではなく水だ。心意技である証として、飛び散る水滴の一粒ひとつぶが、淡いブルーに輝いている。青い竜巻は、緑の竜巻の右側から近づき、接触し、瞬時に融合した。

「ごうっ！」と凄まじい嵐が吹き荒れ、ハルユキは思わず仰け反った。二倍に巨大化した竜巻から飛び散る無数の水滴が、びしびしと装甲表面に弾ける。もし内部に吞まれたら、たちまち兩粒に体力ゲージを削り取られるだろう。

旋風に加えて渦流のパワーを得た竜巻は、漆黒の槍をたちまち押し戻し、ほとんど百八十度逆転させて解き放った。元来た方向へ唸りを上げて飛んだ融合ダーク・ショットは、マゼンタ軍を直撃するには至らなかったものの、すぐ近くの草原に突き刺さって黒い火柱を上げ、敵のフォーメーションを乱した。

「今だ！」

黒雪姫が鋭く叫んだ。

「バイル、レバード、私と共に突撃！ レイン、メイデンは援護射撃！ レイカー、カレントは防衛、ベルは回復、クロウはベルを守れ！――行くぞッ！」

「はいっ！」「K」

タカムとバドさんが、黒雪姫に続いて敵陣に突っ込んでいく。ニコは拳銃（ベイスメーカー）を、雷は長弓（フレイルム・コーラー）を構え、楓子とあきらは次のダーク・ショットを防

ぐべく備える。

そしてハルユキは——とりあえず、チユリの顔を見た。すると黄緑色の魔女型アバターは、三角帽子を傾けて言った。

「え、えへ……クロウ、護衛よろしくね」

「おう、任せる！」

と叫んではみたが、正直なところ、居ても立ってもいられない気分ではある。敵軍にはいい回復術師を守り抜く役目の重要性は理解しているが、黒雪姫と一緒に突撃できないのがどうにももどかしい。

というハルユキの内心を察したのか、チユリが前線を注視しながら小声で言った。

「……クロウ、あたしも心意システムの練習したほうがいいのかなあ」

「え……」

その言葉を聞いた途端、浮き足立った気持ちがすうっと静まった。次の攻撃に備えながら、素早くかぶりを振る。

「いや、急ぐことないよ。ほんととは、使わずに済めばそのほうがいいんだ。今はISSキットのおかげで心意攻撃される場面が増えてるけど、本体を破壊しちゃえばその状況も収まるはずだし、そしたらゆっくりに考えればいいよ」

ハルユキの囁き声に答えたのは、チユリではなく楓子だった。

「ほんとに、成長しましたね、鴉さん」

「えっ、いや、そんなことは……」

「全部終わって向こうに戻ったら、いい子いい子してあげます。だから、今はきっちり役目を果たしてね」

どうやら、飛び出していきたい内心までも見透かされていたらしい。ハルユキが、首を縮めながら「はい！」と叫んだ、その直後。

敵陣で、タクムの雄叫びが響き渡った。

「オオオオオ……………(蒼刃、剣)!!」

久しぶりに聞く技名発声と同時に、シアン・パイルの右腕に装着された杭打ち機が閃光を放って分離する。左手に握られた鉄杭だけが残り、それは瞬時に大型の両手剣へと変化する。心意によって生み出された剣である証として、刃を青い炎に似た過剰光が取り巻いている。

両手で握り直した剣を勢いよく中段に構えるタクムの前では、マゼンタ・シザーが左右の手に持った小剣を交差させていた。鈍い金属音を響かせて二本の剣が接合され、巨大なハサミへと変わる。しかも、以前ハルユキと戦った時と異なり、ハサミ全体が闇のオーラに包まれている。

「気をつけろ、タク……………」

ハルユキは、届かないと知りつつもそう囁かずにはいらなかった。

マゼンタのハサミは、《遠隔裁断》というアビリティを備えている。ブレードを閉じるたび、不可視の切断力が遠く離れた標的を捕らえ、断ち切るのだ。眼に見えない攻撃を回避するにはハサミの延長線上から大きく飛び退くしかないが、ジャキジャキ連続で開閉されればすぐに追いつかれてしまう。

ハルユキは、単独では遠隔裁断を攻略できず、シヨコラ・パベッターが作ったチヨコ人形の助けを得てなんとかマゼンタの懐に飛び込むことができた。だがこの場にシヨコラはいないし、黒雲峠もパドさんも同時に複数のISSキット・ユーザーを相手にしていてタクムの援護はできそうにない。ニコと話は次々に弾丸と火矢を発射しているが、半分以上が《ダーク・プロウ》に迎撃されてしまい、敵の数を減らすには至っていない。

「ベル、オレが指示したらバイルに回復頼む」

「了解」

ハルユキの言葉にチユリが頷いた、次の瞬間、マゼンタの、闇のオーラに包まれたハサミが閃いた。秒間五回にも達しようかという、猛烈な開閉スピードだ。一瞬がかりになった金属音が吼え猛り、タクムの全身をオレンジ色の火花が包み込む。

ハルユキは反射的にヒールの指示を出しかけたが、ぐつと声を呑み込んだ。よくよく見れば、切断力のはとんどは心意剣が盾となって弾いているようだ。マゼンタはハサミを開閉させながら上下左右に動かすのだが、タクムもその照準を剣で正確にトレースし、アバターへの直撃を防ぎ続ける。

しかし、このままではジリ貧だ。マゼンタのハサミは銃ではないため、理論上無限に攻撃を続けられる。いっぽうタクムは無限に回避し続けることは不可能なので、どこかで反撃に転じねばならないのだが、剣を振りかぶる隙がない。一瞬でも正中線から剣を外せば、その直後に首を落とされかねない。

——僕の《光線槍》なら、マゼンタに隙を作れる。

という刹那的思考を、ハルユキは振り払った。

心意剣を撃つ間に敵の護がチユリを狙うかもしれないし、それ以前に、タクムは《遠隔裁断》の恐ろしさを知った上で自らマゼンタとの対峙を望んだのだ。ならば彼には、この状況から攻めに転じる策があるはず……

「……………っ！」

ハルユキは、視界の端で黒いオーラの集中を捉え、両手を構えると同時に叫んだ。

「ダーク・ショット、来ますっ！」

直後、敵の右翼六人が同時に漆黒のビームを発射した。今度は攻撃を融合させずに、全員が別々の標的を照準している。

楓子とあきらが素早く手をかざし、自分たちとニコ、闇を狙う心意弾を防ぐべく、緑と青の

竜巻を生み出した。ハルユキも両手に銀色の遠く光を宿らせると、自分とチユリに向けて飛来する闇の塊を凝視した。

「〔光線〕……」

右手の剣で一発目を上空へと弾き飛ばし、

「〔剣〕!!」

左手の剣で二発目を地面に叩き落とす。

役割を果たし終え、再び視線をマゼンタ対タクムの戦場へと戻したハルユキは、思わず全身を凍らせた。

タクムの《蒼刃剣》を包むオーラが小刻みに明滅し、今にも消えそうになっている。よくよく見れば、長大な刀身そのものにも無数の傷が走り、このままではいずれ砕かれてしまうだろう。

考えてみれば、マゼンタのハサミが放つ実体なき切断力をタクムの剣はその身を挺して防ぎ続けていたのだから、削りダメージは剣にのみ蓄積する理屈だ。《防壁》しているだけでは絶対に勝てない」というのはブレイン・バーストの、いや対戦格闘ゲームの大前提だが、マゼンタのハサミは強制的にその状況を作り出す、ハルユキが考えていたよりも遥かに恐ろしい武器だったのだ。

びきつ、と鋭い音を発して、両手剣がひときわ大きく刃毀れた。

「折れる……」

マゼンタ・シザーがにやりと笑い、ハサミの向きを固定するといっそう激しく閉鎖させた。どうやらアバター本体を狙うのをやめて、先に剣を破壊するつもりらしい。まるでグライNDERを当てられているかの如き火花が眩く輝き、両手剣の中ほどが目に見えて傷ついていく。

「折れる……」

ハルユキが歯を食い縛った、その刹那。

タクムの足許で、爆発じみた土煙が上がった。

青い巨体が、大型アバターとは思えない速度で突進する。ぼろぼろの剣で不可視の刃を弾きながら、五メートル以上もあつた間合いを一瞬で詰め――。

「がきんー」という強烈な金属音とともに、ハサミの開閉が停止した。二枚のブレードの間に、タクムの剣が入り込んでいた。

ここでやっと、ハルユキはタクムの作戦を理解した。

彼は、マゼンタが剣を狙い始める瞬間をひたすら待っていたのだ。照準さえ固定されれば、そのまま前進することによって間合いを詰められる。そして、本物のハサミに剣を噛ませてしまえば、もう《遠隔遮断》は発動できない。

もちろんタクムも剣を動かさなくなるが、しかし、剣道選手である彼は窮迫り合いからの攻め方を知っている。

「オ……オオッ!」

咆哮とともに、タクムが更に一步踏み込んだ。柄を握ったままの両拳がハサミの下を滑り、マゼンタの胸——そこに寄生する深紅の眼珠を激しく打ち据える。

粉碎するには至らなかったが、重量級アタターの渾身の一撃を浴びたISSキットは、どす黒いスパークを撒き散らしながら上下の境を固く閉じた。マゼンタ本人にもダメージが逆流したのか、赤紫色の包帯に覆われた体が痙攣し、大きく仰け反る。ハサミを握る両手からわずかに掘力が抜けた、その瞬間を逃さずにタクムは思いきり剣を突き上げた。

マゼンタ・シザーの名前の由来でもある大ハサミが、持ち主の手を離れ、高々と宙に舞った。タクムは、この戦いで初めて剣を大上段に振りかぶり、裂帛の気合いを放った。

「エイアアアアッ!!」

落下してくるハサミを、真上から神速の斬撃が追い抜き——。

黒い凶器は、真ん中から二つに断たれた直後、無数の欠片となって四散した。

タク！ やったな！

ハルユキは、ありったけの気持ちでそう念じた。

あれほど傷だらけにされながら、心意剣を具現化し続けられる精神力。防戦一方の状況で、ひたすら逆転の機を待ち続ける忍耐力。そして、膠着状態から一気に流れを引き寄せる瞬発力。それら全てが自分を上回っているとハルユキは感じたが、悔しさよりも嬉しさのほうがずっと大きかった。

「……危ない!!」

後ろで、チユリが叫んだ。

一瞬、見落としていた敵がこちらにダーク・ショットを撃とうとしているのかと思ったが、そうではなかった。チユリの声は、タクムに向けたものだ。彼のすぐ前で仰向けに倒れ、まだISSキットを直撃されたダメージから回復してはいないと思われたマゼンタ・シザーの右手に、黒いオーラが宿っている。

直後、タクムもそれに気付き、再び剣を振りかぶろうとした。しかし、わずかに遅かった。マゼンタの右手から、一切の前兆なく漆黒のビームが進ったのだ。

「くっ……」

タクムは攻撃を中断し、剣でビームを防ごうとした。どうにか軌道を逸らすことには成功したものの、虚無の細流がヘルメットの側面を掠め、鮮血に似たパーティクルを散らす。

しかし、より深刻なのは書剣のダメージだった。至近距離からのダーク・ショットを防いだことで更に大きく刃毀れし、過剰光もほとんど消えてしまっている。タクムは反撃を諦め、後方へとジャンプした。その間にマゼンタも立ち上がり、左手で胸の眼珠をかばいながらも、右手でシアン・パイルを狙い続ける。



「あいつ……技名なしでダーク・ショットを……」

ハルユキは低く呟いた。四日前の戦いでは、マゼンタ・シザーは心意技の発動に技名発声を必要としていたはずだ。つまり、短い期間で彼女も技を進化させてきたのだ。

さすがだ、と思ういっぽうで、ハルユキは駭かずにはいられなかった。

「……………なんだよ……」

なぜ、そこまでの向上心が——更なる高みを目指す情熱がありながら、それをISSキットの拡大に捧げねばならないのか。あらゆるデュエルアバターが同じ技を持ち、あらゆる個性が意味を失った世界は、己の全てを犠牲にしても実現しなければならないものなのか。

タクムと対峙するマゼンタは、もちろんハルユキの疑問に答えることはなかった。代わりにレバードと戦っていた七人と、ハルユキたちに遠距離攻撃を行っていた六人が公園の東側へと移動し、同じくタクムから距離を取ったマゼンタを加えて密なフォーメーションを組む。

アポカドを中心とした後列、マゼンタを中心とした前列が整然と並ぶ二重の横陣は、全員の胸に装着されたISSキットの赤い輝きと相まって、まるでひとつの超大型デュエルアバターであるかのような迫力を醸し出していた。

しかし、個々のアバターに眼を向ければ、無傷な者はマゼンタ一人だけだ。他の十三人は、黒雪姫の剣、バドさんの爪と牙、ニコの銃弾、謎の火矢で全身に傷を負っている。ことにアポ

カドは、ニコと謎の遠隔攻撃を体で防いだせいで軟質装甲が弾痕と焦げ跡だらけだ。

集結する敵軍を深追いせず、いったんハルユキたちの所に戻ってきた黒雪姫は、冷静な声で指示した。

「マゼンタ以外の体力ゲージは、ほぼ半減に揃えてある。敵軍の攻撃をこちらも固まって迎え撃ち、全員の心意技で一気に殲滅する」

「……………はい！」

ハルユキは、かすかな戦慄とともに頷いた。

黒雪姫とバドさんは、敵左翼を攻めあぐねていたわけではない。前後左右から繰り出される必殺の「ダーク・ブロウ」を躲しながらも、敢えてダメージを単体に集中させず、敵軍の体力ゲージを平均的に減らしていた。同じことを、ニコと謎もしていたのだろう。しかも四人は、エネミーを呼び寄せる危険を少しでも減らすために、心意技を一切使わなかったのだ。

そんなことが可能だったのは、王二人を含むハイランカー四人の実力もさることながら、敵の攻めが単純だったせいだ。いかに一発一発の威力は凄まじくとも、同じ種類の攻撃しか来ないという解があれば対処は容易になる。ようやく新米の域を脱したかどうかのハルユキでさえ、いまや単発のダーク・ショットならはば確実に弾けるくらいなのだから。

マゼンタ・シザー。あなたの目指す新しい世界での戦いは、確かに公平なのかもしれない。

「でも、それはたぶん、もう（対戦）じゃない。

刹那の思考を両手で握り潰し、ハルユキは身構えた。

三十メートル先で、マゼンタ軍十四人も右拳を顔の前に掲げた。

ダーク・ショットの一番射撃は機子とあきらの意図でも完全に防がれてしまうと敵も理解しているはずなので、もう遠隔攻撃は来ないだろう。きつと最後は、小細工なしの総員突撃で勝負を決めにくる。

地平線を通れる雲が、黄昏ステージの巨大な夕陽にかかり、世界がわずかに暗くなった。

数秒後、雲の切れ目から、紅いレンブラント光が戦場に降り注いだ。

それを合図に、双方とも動いた。マゼンタ軍は、二列の機陣を組んだまよ、地雷を上げて突進。コータス軍は、黒雪姫を中心に機陣となつて迎え撃つ。十四の拳を隔のオーラが包み、ライム・ペルを除く八人が色とりどりの過剰光を過らせる。局所でフル稼働する心意システムが、大気に青白い雷光を走らせる――。

しかし。

両軍最大最後の激突は、寸前で中断させられた。

いきなり、大地が烈しく震えた。天地を引き裂くような轟音とともに足許から強烈な縦揺

れが突き上げてきて、ハルユキは反射的に翼を広げると右の黒雪姫、左のタクムの腕を支えた。

マゼンタ軍も突進中だったのが災いし、ひとかたまりになって転倒する。絶好の攻撃チャンス

「……考える余裕すらなく、ハルユキは唖然と周囲を見回した。

黄昏ステージに、地震の地形効果など存在しない。ということは、ステージ属性以外の要因による震動だ。しかし、デュエルアバターの特殊能力とも思えない。破壊不能であるステージ

の地面をこれほどの規模で揺らすことなど、どんな大型アバターにも不可能。

ならば、あとはもうエネミーの仕業でしか有り得ないが、西にも、北にも、東にも、南にも、草原と白亜の神威が連なるばかり――

「……あ……あ……あ……」

それに気付いた瞬間、ハルユキの喉から、乾いた呻き声が漏れた。

いる。

戦場の南側にそびえ立つミッドタウン・タワーの手前。なだらかな丘の上に、何かが存在している。ほとんど透明で、山のように巨大な、何か。

すでに震動が止まっていることすら意識できずに、ハルユキはただそれに視線を注ぎ続けた。丘は放射状にびび割れ、破壊は後方のタワー壁面にまで及んでいる。恐らく、数秒前の突発的な大地震は、あの場所が震源だったのだろう。

だが、あれは本当に地震だったのか？ 揺れの源は、地面の下からではなく、上……空から来たんじゃないのか……？

つまり、突発的な震動は、遠く高いところ……たとえばミッドタウン・タワーの天辺から、

何か巨大なもの……たとえば超大型エネミーが飛び降りた衝撃波、だったのでは……？

そこまで考えた時、丘の上の何かが、緩やかに動いた。赤い陽光の屈折によって描き出される輪郭線が、左右に広がっていく。まるで、翼のように。

人とも鳥とも思える、奇怪なそのシルエットには見覚えがあった。十日前、六本木ヒルズ・タワーの屋上から見たカタチに間違いないかった。

あれは、神獣級エネミー、大天使メタトロンだ。

「……先輩」

ハルユキは、驚がかりかけた喉から、か細い声を押し出した。

「メタトロンが、地上に」

「な……」

ハルユキの右手の中で、黒雪姫の左腕が深く震えた。楓子やあきら、ニコたちも、声もなく南の丘を見詰めた。少し遅れて、ロータス軍の異変に気付いたらしいマゼンタが、地面に手をついたまま振り向いた。彼女もまた、そこで凍り付いた。

静寂の中、不可視の巨体が、丘の上からふわりと降臨した。タワーの頂上に戻ってくれ、とハルユキは痺れ切った意識の片隅で祈った。だが、異形の大天使は、必死の祈りを嘲笑うかのよう、に、ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる。あまりにも大きすぎるせいで距離感が掴めない。透明な二枚の翼が、空全体を覆っていく……。

――全員、後退!!

呪縛から脱した黒雪姫が、掠れ声で叫んだ。

ハルユキは両手を離し、振り向くと、仲間たちと一緒に走り始めた。三步、四歩、五歩目で再び地面が震えた。メタトロンが着地したのだ。衝撃波は、初回に比べれば穏やかだったが、全員の足をすくうには十分な威力だった。地面に倒れ込んだハルユキは、肩越しに振り向き、百メートルと離れていない場所の草が広く押し潰されているのを見た。ちょうど中間地点で、マゼンタたちが突然立ち尽くしている。

直後、メタトロンの、透明な両翼が、仄かに発光した。

レーザー。

間に合わない。

ここで直撃されたら。

渾然となった思考がハルユキの脳内でスパークし、アバターを衝き動かした。後ろではなく、前へ。

「みんな、逃げて!!」

叫び、ハルユキは飛んだ。地面ぎりぎりの高さを飛びながら、両腕を体の前でクロスする。がしやっ、と音を立てて前腕部の装甲が開き、内部から透明な導光ロッドがせり出した。着地した場所が、マゼンタたちのすぐそばだった理由を考える時間はなかった。

メタトロンの、丸い頭部の中心に、十字の光<sup>クロス・オブ・ライト</sup>が煌めき――。  
神意の顕現たる聖光が、音もなく降り注いだ。視界が白一色に染まった。ステージの夕景も、かすかに聞こえた気がした誰かの呼び声も、全てが光に溶けて消え去った。

何も見えない。

何も感じない。

きつと、アバターが丸ごと蒸発してしまったのだらう。

できるわけがなかったのだ。緑の王ですら五秒しか防げなかったメタトロンのレーザーを、付け焼き刃のアビリティで反射するなどということが。

そもそも、ハルユキが身につけたのは、光線技に絶対の耐性を持つ《理論鏡面<sup>リゾルーション・ミラー</sup>》ではなく、効果のほども定かではない《光学誘導<sup>オプティカル・グイド</sup>》だ。それなのに、覚えたての技がメタトロンにも通用すると思込んで、無謀な作戦にレギオンメンバーを引き入れた。皆を守ると誓いながら、たったの一秒すらも耐えられなかった。真っ白い光にアバターだけでなく魂までも焼き尽くされて、存在そのものが消滅して……もしかしたら、このまま二度と、どこへも行かないで……。

いや。

純白の世界の片隅に、何かが見える。



エメラルドのように碧く、剣のように細長いそれは――体力ゲージ。  
無制限中立フィールドでは、他人のゲージは表示されない。つまり、あれはハルユキの……  
シルバー・クロウのゲージだ。三割近くが削られているが、視界左上に、確かに存在している。  
まだ、生きています。

そうと認識した瞬間、全感覚が凍った。

光。熱。轟音。圧力。途轍もない規模のエネルギー流を、交差した両腕の導光ロッドが強烈に輝きながら上下左右に引き裂いている。ハルユキの体力ゲージを奪ったのは、レーザーそのものではなく、真っ赤に溶けた地面だ。弾かれたレーザーの一部が周囲の草原を炎の海に変え、そこに立つクロウの足を膝下まで赤熱させている。

ちらりとその光景を見た途端、通常対戦フィールドの二倍に拡張された激痛が今更のように意識されるが、歯を食い縛って堪える。わずかも体力を崩せば、圧力に負けて押し倒され、今度はこそ蒸発してしまう。

「……………」

喉の奥から呻き声を漏らしつつ、ハルユキは懸命に両脚を踏ん張った。レーザー攻撃が最長何秒続くのかは知らないが、最後まで、絶対に、何が何でも防ぎ続ける。もう二度とネガティブなことは考えない。無理だと諦めない。守るのだ。ハルユキを信じて、共にこの戦場に赴い

てくれた仲間たちを。現実世界で苦しみに耐えている目下部隊を。そして、加速世界で最初にできた友達、アッシュ・ローラーを。

しかし、その決意を嘲笑うかのように、両足が小さく滑った。

草だけでなく、地面までもが高温の中で溶け始めている。剣を使えば炎からは逃れられるが、恐ろしく滑いた瞬間にバランスを崩し、レーザーに吞まれてしまうだろう。このまま耐えるしかない。メタロンの攻撃が終わるのが先か、両足がグリップを失って倒れるのが先か。

ずり。再び足が後ろに滑る。レーザー攻撃はすでに連続五秒を超えているはずだが、途切れる気配はない。耐えれば耐えるほど地面が溶け、体力ゲージと摩擦力を奪っていく。足裏の接触感覚はほぼ失われている。

必死に体勢を保とうとするが、地表に薄く広がるマグマの中で、少しずつ体が後ろに傾いていく。ありったけのパワーとバランス感覚を振り絞って、光の圧力に抗う。ここで倒れることはできない。

「う……………」

再び声を上げ、意識の隅々からかき集めた力で、更に一秒耐える。だが、どんなに意志力を燃やそうとも、それを伝えるべき地面の溶融は止まらない。真っ赤に灼けた両足は、もう粘液の中で浮いているに等しい。アバターが更に傾く。両腕に反射されるレーザーが、勝ち誇るように勢いを増す。

——ここまでか。

——いや、あと一秒。

——せめて、みんなが、安全圏に、離脱……するまで……!!

ハルユキが、諦めではなく、覚悟を決めた、その瞬間。

ぐつ、と誰かの手が後ろから両肩を支えた。

タク? チュ? それとも、黒雪姫先輩……?

綱部の思考を否定したのは、耳許で聞こえた短い声だった。

「ワタシが支えるから、アナタは反射に集中して!」

この、少しハスキーな声は。

ついさっきまで死闘を繰り広げていた、マゼンタ・シザーだ。

ほぼ無意識の選択ではあったが、ハルユキはマゼンタたちを庇う位置に着地し、レーザーを

受けた。そこからすでに十秒近くが経過している。その間にマゼンタたちはかなり遠くまで逃

げられたはずなのに、なぜすぐ後ろにいるのか。そしてなぜ、ハルユキを助けるのか。

だが、今は疑問にとらわれている余裕はない。マゼンタの声には苦痛に耐える響きがあった。

彼女の足もマダマに吞まれつつあるのだ。そう長くは支えていられないだろう。

「……頼む!」

短く叫び返し、ハルユキはマゼンタに背中を預けた。体勢が安定すると同時に、クロスする両腕だけに精神を集中する。

シルバー・クロウの「光学誘導」アビリティは、両腕に装備された導光ロッドを使って光線系、攻撃のベクトルを変える技だ。全身を鏡に変えてあらゆる方向からの光線を反射したというミラー・マスカーの防御力には及ぶべくもないが、たったひとつだけ、「理論鏡面」にはない力が備わっている。それは、レーザーの反射方向を、ある程度制御できるといふことだ。

いまは極太のレーザーをレンズ状に拡散させているが、そのせいでエネルギーの三割以上が地面に当たり、マダマを生み出してしまっている。反射ベクトルをもっと収束させて、空へと受け流す。そうすれば、これ以上地面は溶けないはずだ。

光をただ拒むだけの壁になるのではない。

光を受け入れ、導き、解き放つ通路。それが、ハルユキの辿り着いた答えだ。ニコが、誰か、

黒雪姫が、ウルフラム・サーペラスが、そして同級生の井関玲那が教えてくれた、ハルユキだ

けの「鏡の境地」。

信じるんだ。みんなを。僕を。シルバー・クロウを。

ハルユキは、固く握り締めていた拳を緩めた。途端、光線の圧力が増し、体がマゼンタごと数センチ滑る。だが、両肩を支える手の力強さを信じて、背中を預け続ける。考えてみれば、

マゼンタの声に含まれていた苦痛の理由が、両足を焼くだけであるはずがない。彼女はいま、胸に寄生するISSキットの命令に抗っているのだ。

緩めた拳の指を、まっすぐに伸ばす。導光ロッドを満たす光が、手の甲を伝って中指の先端にまで届く。次に、X字に交差させていた両腕を少しずつ動かし、縦向きのイコール記号に変えていく。

数百もの細流となって上下左右に吹き荒れる光の筋が、少しずつまとまり始める。十本の太いラインを、更に四本に束ね、二本に合わせ——一本に戻して、空へ。

今や、メタトロンの放つ光の大槍は、ハルユキの両腕によって進路を九十度変えられ、遠く上空へと吸い込まれている。大穴を開けられた射線上の雲が、夕闇を白く輝かせる。

そう、その調子。

不意に、頭の中で誰かの声が聞こえた。女性と考えるがマゼンタではない。少し幼い感じもするが、ニコでも誰でもない。冷静で、無機質な、どこか人間離れした声。

そのまま、光を反転させなさい。

——無奈言うなよ!!

反射的に、ハルユキは頭の中で言い返した。

——メタトロンの超レーザーを、九十度曲げてるだけでもムチャクチャ大変なんだぞ!! あとはこのまま、あいつのエネルギーが空になるまで待つ!!

まだしばらく空にはならない。翼で太陽の光を集めているから。それに、光の名は〈チョウレーザー〉ではない。(トリスアギオン)と呼びなさい。

——なんで、そんなこと知ってるんだ? そもそも……どうやって、僕と会話を……

つまらないことを気にしている時間はない。早く、その光を反転させるのです。それ以外におまえたちが生き残る道はない。

——そう簡単に行くもんか! こっちだって限界ぎりぎりなんだ!

ハルユキは謎の声に向かってそんな思念を叩き付けたが、もし声の主の言葉が正しければ、メタトロンは太陽光を浴びている限りエネルギーをチャージし続けられるということだ。地面を加熱するレーザーは上空へ逸らしたが、まだ足許のマグマは冷えず、ハルユキとマゼンタの

体力ゲージもじりじりと減り続けている。

——やるしか、ないのか……！

正体不明の声を信じる根拠はなかったが、ハルユキは直感に従って、再び両腕に全神経を集中させた。

ボクシングのブロックに似た形で、手の甲を外にして深く曲げている両腕を、少しだけ伸ばしてみる。上空へと伸びる光の柱がわずかに角度を変えたが、同時に凄まじいプレッシャーが全身を軋ませる。これ以上反射角を増やすなんて絶対無理だ、と考えてしまっただけから思い出す。ついさっき、少なくともこの戦いの間は、決して諦めないと言ったばかりではないか。

「……く……」

細い声を漏らしながら、もう少し腕を伸ばす。レーザーの反射角度が百度を超え、アバターが不規則に震動する。背後でクロウを支えるマゼンタにはより大きな重圧が掛かっているはずだが、両肩を綱む手は小揺るぎもしない。

一度、また一度とハルユキは巨大な光の柱——謎の声が言うところの「トリスアギオン」を曲げ続けた。比例して圧力も際限なく高まり、クロウの関節から火花が血のように飛び散った。マゼンタが苦しそうな吐息を漏らし、ずずずと二人の体が後退する。

だが、その時、更なる声が聞こえた。

「う……うあ……あ……！」

野太い、言葉を成さない雄叫び。すしっ、と重い震動が伝わり、同時に後退が止まる。ハルユキからは見えないが、アボカド・アボイダがその巨体でマゼンタを支えたのだらう。

しかし、脂質の軟装甲をまとうアボカドは炎に弱い。周辺の地面はいまだ真っ赤に焼け爛れていて、こんな所に立っていたら数秒で炎上してしまいかねない。

「うう……う……」

熱さに苦悶するアボカドに、マゼンタが掠れ声で指示する。

「下がちなさい、アボ！ ココは大丈夫、オマエはみんなと逃げ……」

「い……いや、だ……！ おれも……おれ、も……ば……パー……」

声はそこで途切れたが、ハルユキには、アボカド・アボイダが何を言おうとしたのか解った。おれも、パーストリンカーだ。彼はそう言いたかったのだ。

「アボ……」

マゼンタが短く呟いた。その声に、ばちばちと炎が燃える音が重なった。アボカドの装甲が燃え始めたのだらう。持つてあと十秒か。それまでに、このレーザーを百八十度曲げられるのか。

突然、ばしゅうっ！ という音とともに白煙が地面から立ち上った。

驚愕しながら足許を見ると、真っ赤に灼けていたマグマの大部分が一瞬で黒く固まっている。誰かが大屋の水をぶちまけたのだ。しかし、黄昏ステージは基本的に乾燥していて、水が



あるのは現実世界の大きな池や川に相当する場所だけだ。いったいどこからこれだけの水を、わずかに首を振ったハルユキの視界に入っただけは、生命線である水流装甲をほとんど失ったアクア・カレントだった。剥き出しになったアバター素体は、水晶のように透明な材質で形作られている。彼女は、自分の体を包む水を使って地面を冷やしたのだ。

極限まで細い腕を伸ばし、あきらはマゼンタの左からハルユキの背中を支え、言った。

「遅くなったの」

直後、右側から新たな腕が背中に回され、同時に声。

「済まん、クロウ。マゼンタの仲間たちが行動不能になってな、安全な場所まで運ぶのに時間がかかった」

黒髪姫だ。更に、二人の左右から、タクム、チユリ、楓子、謡、ニコ、バドさんが手を伸ばし、マゼンタとアボカドも加えてがつしりとスクラムを組む。

「頼んだよ、クロウ」と、タクム。

「あとは任せなせ！ プチかませ!!」と、ニコ。

二人の敵と八人の味方、いや十人のバーストリンカーたちに背中を支えられたハルユキは、可能な限りの動作で額き、意識を再びメタトロンのレーザーへと向けた。

アボカドを除くマゼンタ軍のメンバーが倒れてしまったのは、ISSキットが与える命令と自分の意志が衝突したからだろう。つまり彼らも、心の中では、マゼンタやアボカドと同じ

ように共に戦いたいと考えたのだ。突如襲ってきた脅威から、仲間を守るために ISSキットがどんなに精神を汚染しようとも、魂の奥底に宿る炎だけは消せない。バーストリンカーである限り、それは永遠に消えることはない。

「う……お……」

喉の奥から声を絞り出しながら、ハルユキは少しずつ、少しずつ両腕を前に伸ばし続けた。のし掛かる圧力は、わずかでも気を抜いたら即座にアバターを潰してしまいそうなほどだが、もうハルユキの心に迷いはなかった。

反射角が百二十度に達した時、曲げられたレーザーがミッドタウン・タワーの天辺に触れた。大理石の壁面が瞬時に赤熱し、溶け、砕ける。まるで神の振り下ろす剣でもあるかのように、レーザーは白亜の巨塔を真つ二つに切り裂いていく。あのサイズの地形オブジェクトは、無制限フィールドでは原則として破壊不能のはずなのに、いとも容易く貫くとはやはり恐るべき威力だ。

レーザーが破壊しているのは幅五十メートルもあるビルのごく一部だが、上部フロアのどこかにあるはずのISSキット本体が直撃される可能性もある。レーザーを左右に動かせばその確率は上がるだろうが、とてもそんな余裕はない。ありつただけの物理的、精神的エネルギーを振り絞っているのに、まっすぐ下ろし続けるのが精一杯だ。

そう。余計なことは考えないで。

また、あの声が聞こえた。加速世界のランドマークが真つ二つになるほどの大破壊の中でもまったく揺るがない、無機質な……どこか非人間的な声。

そのまま下に。正確に、レーザーの発射点を狙いなさい。そこ以外は透過する。

——透過……？

その言葉を聞いて、ハルユキはようやく思い出す。大天使メタトロンは、《地獄》ステージ以外では不可視……そしてあらゆる攻撃を透過する。だが、謎の声は、この黄昏ステージでもメタトロンにダメージを与えられる場所があることを告げた。そんな情報は、七王会議でも出なかった。つまり声の主は、七人の王たち……いや、最初のバーストリンカーである《オリジネーター》たちですら知らない事実を知っているということになる。

いったい、誰なんだ。

そんな思考の泡が頭の片隅に浮かび、弾けて消えた。あとはもう、指示を正確に実行しようという意志しか残らなかった。

百五十度。百六十度。……百七十度。

すでにレーザーの何割かは行き届りて重複し、衝突するエネルギーが放つ光の眩しさは眼を開けていられないほどだ。世界は光と影の二色に染まり、その現象を引き起こしているシルバー・クロウの両腕もまた純白に輝いている。今にも導光ロッドごと爆発してしまいそうだが、ハルユキの中に畏れはなかった。肩を、腰を、背中を、八人……いや今だけは十人の仲間たちが支えてくれている。皆の心意がアバターを満たし、力を与えてくれているのを感じる。

百七十五度。

反射するレーザーの下端が、透明なメタトロンの頭部に触れた。

輪郭線が少し強く光っただけで、他には何も起きない。大型エネミーは身動きひとつせずレーザーを放ち続けている。だがハルユキは、自分と仲間、そして謎の声を信じて腕を前に倒し続けた。もう、肘はほとんど真つ直ぐになっている。慎重に腕の向きを返し、手の甲を上。びんと伸ばした指先で、レーザーの発射点を射貫く――。

百八十度。

何かが起きた。

最初に感じられたのはそれだけだった。爆発も轟音も生まれないが、エネミーを透過するはずのレーザーが、小さな何かを撃ち抜いた手応え。降り注ぐ光の柱が、徐々に減衰していく。全身にのしかかる圧力が、少しずつ弱まっていく。弱まり、更に弱くなって……消える。

気付けば、視覚に溢れる純白の光も、聴覚を埋め尽くす振動音も、嘘のように消滅してい

た。ミッドタウン・タワーの、屋上から根本近くにまで達する切断面から瓦礫が落下する音が、  
けが遠く聞こえる。

いや、それだけではない。大きな氷が急速に溶ける時の軋みに似た、不思議な音がする。び  
しびし、きしきしと、不吉な予感をほらんだその音は徐々に大きくなる。聞こえるのはハルユ  
キだけではないようで、背後でひとかたまりになった十人も身動きひとつせずに耳を澄ませて  
いる。

立ち尽くすハルユキの頭の中で、またしてもあの声が聞こえた。

全てはこれから。

さあ、おまえたちの全力で戦いなさい。

ぴいっ！

ファイールドそのものが裂けるような——あるいは、《バースト・リンク》コマンドを唱えた  
時の加速音を数千倍にも増幅したかのような衝撃音が轟いた。

そして、ハルユキは見た。五十メートル離れた場所、空間の殻が割れ、中からそれが姿を  
現すのを。

真っ先に現れたのは、いっばいに広げられた翼だった。猛禽のそれではない。クロウの金属

フィンとも違う。複雑な形のタペストリーを何枚も並べたようなその翼は、差し渡しがミッド  
タウン・タワーの横軸でもある。しかも、左右に二枚ずつ、合計四枚。

翼の下にある胴体は、無数に連なる白いリングで構成されている。胴体下部には、チューブ  
状の脚が十本以上も伸びる。

そして頭は、直径七、八メートルはあろうかという巨大な球体だった。そこだけでちよつと  
した巨獣級エネミーほどのサイズだ。球体の表面には湾曲する放射線が走り、前面の一点に集  
まるデザインになっているが、その部分だけが黒く陥没している。おそらくあそこはレーザー、  
いや《トリプスアギオン》を発射するための器官があったのだろう。

丸い頭部の上部には、プラチナシルバーに輝く王冠のようなリングが載っている。そしてそ  
の中央から、奇妙な形のツノが伸びていた。ごちゃごちゃしたシルエクトで、この距離では細  
部まで見えない。

ハルユキがそこまでを視認した時、右側から背中を支えてきた黒雪姫がすつと体を起こした。  
静かな、しかし最大の緊張感を秘めた声で告げる。

「間違いない。あれこそが、神獣級エネミー《大天使メタトロン》だ」

それを聞いて、他の九人もゆっくりとハルユキから離れた。最後に、ハルユキが前に突き出  
したままだった両腕を下ろすと、黒雪姫は再び座した。

「マゼンター・シザー。勝負はしばし預けて貰えないか。我々は、あのエネミーを倒さねばなら

ん

するとマゼンタは、同じく静かな声で応じた。

「ナゼ逃げないの？ 今なら離脱できると思うケド？」

「ここで逃げては、クロウの頑張りが無駄になる。あの化け物と戦う機は、最大の武器であるレーザを封じ、透過属性も解除された今において他にない。メタトロンを倒したのち、貴様が望むならば再戦に応じよう」

「……………」

少しの沈黙を経て、マゼンタ・シザーは言った。

「ウワサどおりの傲慢さ、ね。でも……今だけは、ソレが不快に思えないわ。戦いは、またの機会に。……行くわよ、アポ」

身を翻すマゼンタの胸にも、うつそりと体を起こすアポカドの胸にも、半ば臉を閉じているがISSキットが貼り付いたままだ。ということは、キット本体はレーザの直撃を受けず、いまだビルのおかげで健在なのだろう。

今この瞬間、二人がどうやってキットの支配に抗っているのか正確なところは解らないが、少なくともこれだけは言える。マゼンタ・シザーもアポカド・アポイダも、バーストリンカーの誇りを捨ててはいないのだ、ということだけは。

北に向かって歩き始めたマゼンタの背中に、ハルユキはどうかひと言だけ投げかけた。

「あの、ありがとうございます、マゼンタさん。あの時文えて貰えなかったら、蒸発してました」

「……それはお互いサマ。仲間を助けてくれたコト、お礼を言うわ」

去っていく二人の下半身は、マグマの熱で焼け焦げていた。

マゼンタは、理解しているはずだ。ハルユキたちがメタトロンと戦うのは、ミッドタウン・タワー内部にあるISSキット本体を破壊するためだということを。そして、本体が破壊されれば、彼女たちに力を与えているキット端末の全てが力を失うだろうということも。

ハルユキは、言葉にできない感慨とともに二人を見送ろうとした。だが、その時間は与えられなかった。ずしん、という地震響きがフィールドを揺らしたのだ。

さっと振り向くと、己のレーザで頭部を撃ち抜かれたダメージから立ち直ったのか、メタトロンが重々しく動き出すところだった。どこにも眼らしきものは見えないが、それでも強い視線を感じる。己のテリトリリーを侵したものを排除しようという、無機質な意志。

「……今日のミッションの、ここが正念場だ」

黒雪姫が、疲労を感じさせない、凜とした声で言った。

「主たる武器であるレーザを封じたと言っても、メタトロンが恐るべき敵であることに変わりはない。だが、倒さねばならん。絶対に。クロウがあればどの決意と覚悟で大役を果たした今、我々がそれに応えられねば……」

「バーストリンカーの名がすたるってな!!」  
 大声でいいところを持っていたのは、もちろんニコだった。右拳を握り、ゆるゆると前進を開始したメタトロンに突きつける。

「あたしや、今メチャクチャ燃えてんぜ。ISSキツつきの奴らが、あそこまで根性見せたんだ。おめーら、ここで気合入れなきゃレギオンの看板あげてらんねーぞ! いいか……あのデカブツ、パワー全開でブツ飛ばすぜ!」

黒の王のお株を奪うニコの演説に、

「ぶっ飛ばすのです!」

と認がすかさず声を合わせた。

どうやら今日いちにちでかなり仲良くなったらしい赤糸一人の声に、他の七人が——黒雪姫はほんの少しだけ不服そうに——「おう!」と叫んだ。

## 7

田東京タワーで確認した作戦では、大天使メタトロンとの直接戦闘は極力避け、ハルユキがレーザーを誘いでいる間に他のメンバーがミッドタウン・タワー内に突入する手はずになっていた。

しかし、メタトロンが地上に降りてきてしまった以上、作戦の大幅な修正は避けられない。タワーの中に逃げ込んでもターゲットが外れるとは思えないし、最悪の場合、内部で待ち構えているかもしれない敵と外部のメタトロンとの間で挟み撃ちになってしまう危険性もある。

更に、予想外の好材料として、メタトロン最大の攻撃と目される大口徑レーザーは発射不能となり、同時に全ダメージ透過ステータスも解除された。その二つさえなくなれば、地獄ステージでなくともメタトロンと戦うことは可能だ。もちろん神級エネミーの実力は決して侮れるものではないが、少なくとも帝城の超級エネミーたちほど絶対的な格差のある相手ではないはずだ。

何より、ここでメタトロンを倒すことができれば、次に復活するのは本来のテリトリイである芝公園地下大迷宮の最深部だ。そこからミッドタウン・タワーの天辺までメタトロンを移動させたのが何者なのかはまだ判明していないが、同じことをもう一度繰り返すのは簡単ではあ

るまい。つまり、仮にISSキット本体の破壊ミッションに問題が生じて、しばらくはタワーを無防備のままにしておけるわけだ。

以上の理由から、九人は大天使メタトロンとの決戦に挑んだ。

戦闘開始から、二分三十秒後――

ハルユキは、そして恐らく他の仲間たちも、当初の見通しが甘かったことを強く思い知らされていた。

「羽根攻撃、来るぞ！ 回避用意！」

黒雲姫の指示に、前衛のハルユキ、タクム、楓子、バドさんが素早く飛びのいて空を仰ぐ。

上空で、メタトロンの四枚の主翼が、いっばいに広げられる。それぞれの翼に十二枚ずつ並んでいるタペストリー型の羽根が、青く輝き、じゅっ！ と空気を引き裂いて稲妻のように地上へと殺到する。

横幅は一メートル以上あるのに紙のように薄い羽根は、触ただけでアバターの装甲を軽々と切り裂く。ハルユキたちは、ランダムな軌道を推して伸びてくる羽根を懸命にかいくぐる。

言い薄刃は周囲に次々と突き刺さり、地面を深々と抉る。

どうにか全部避けたか、と思った瞬間、後ろで叫び声が上がった。

「クロウ、危ない！」

同時に、激しい衝撃。しかしダメージはほとんどない。

振り向くと、タクムが背中ではハルユキを押しつけながら右腕を掲げていた。鋭利な羽根の先端が、強化外装の分厚い装甲を貫いてアバター素体にまで達している。シアン・パイルの象徴とも言える杭打ち機は、鉄杭を両手剣に変える心意技（蒼刃剣）を使っただけでメタトロンの攻撃を何度も防いでもうボロボロだ。だが、まだ破壊にまでは至らず、傷だらけの杭も輝きは失われていない。

四十八枚の羽根が再び上空に引き戻されると、ハルユキはタクムの背中に右手を押し当てて叫んだ。

「悪い、パイル！」

「大丈夫、まだまだ行けるよ！」

親友の言葉は頼もしいが、声には消耗の色がある。ハルユキ自身、集中力が落ちてきているのを自覚している。背後から襲ってきた羽根を目撃としたのがその証だ。体力ゲージは、レザールを助けた時に受けたダメージを含めてまだ六割以上残っているが、これ以上動きが鈍ればたちまちレッドゾーンまで陥られるだろう。

「パイル、あと少し待って！ ゲージが溜まったら、すぐにヒールするから！」

後方で中衛を務めるチユリの声に、タクムは左手を上げて「解った！」と応える。長時間のエネミー戦ではこの上なく頼もしい（シトロン・コール）だが、必殺技ゲージの消費が激しく、

周囲には破壊できるオブジェクトもほとんど存在しない。ゆえに、中衛の彼女もメタトロンにわずかな隙を突いて接近し、直接攻撃でゲージを貯める必要がある。万が一にもライム・ベルを失うわけにはいかないのであきらが護衛についているが、彼女も生命線たる流水装甲を大部分喪失したままなので、突撃のタイミングは慎重に計らねばならない。

羽根カッター攻撃——きつと（トリリスアギオン）のような正式名称があるのだろうか、戦闘が始まった時から謎の声はびたりと止まっている——を終え、四枚の翼を畳んだメタトロンに、無数の炎が放物線を描いて襲いかかった。最後方で遠隔攻撃を担当するニコと認めた。再び武装トレーラー（ドレッドノート）を召喚した赤の王のマイクロミサイルと、メイデンの必殺技（フレーム・トールンツ）の分裂火矢が大天使の巨体を包む。数十の小爆発がステージを震わせ、エネミーの上部に表示された四段体力ゲージの一段目が音もなく消える。

——まだ、あと三段も……。

一瞬頭を過ぎった思考をかなぐり捨てて、ハルユキは思い切りジャンプした。メタトロンは胴体横でホッピングすると、黒雪姫や、ダッシュしてきたチユリたちとタイミングを合わせ（空中連続攻撃）を叩き込む。熱のない純白の構造材は、まるで頑丈な複合セラミックを溶けているような手応えで、割れも凹みもない。しかし、一撃ごとにわずかもゲージが減っていると信じて、懸命に両手足を動かす。

「クロウ、深追いしすぎだ！」

不意に黒雪姫の声が聞こえ、ハルユキははっと眼を見開いた。いつの間にか、長い胴体の上に載る、直径七メートルに達する頭部全体に無数の小穴が生じている。

「く……く……」

両腕で体をガードしながら、背中の翼を畳む。アバターは仮想の重力に引かれて落下するが、そのスピードは余りに速い。メタトロン丸い頭に開いた穴から、巻き貝を思わせる鋭い螺旋が顔を出す。直後、機関銃じみた炸裂音とともに、螺旋弾が全方位に発射される。

本当は、頭部に穴が開いた時点で攻撃を止め、弾が届かない場所——メタトロン胴体の下に隠れなければならないかったのだ。しかし回避が遅れ、ハルユキは右腕と左腰に被弾して、地面に打ち倒された。白い巻き貝は着弾後もしばらく回転を続け、オレンジの火花と赤いダメージ・エフェクトを撒き散らしながらクロウの金属装甲に深々と食い込む。

「うあ……！」

目も眩むような激痛に声を上げるハルユキを、鉤爪のついた両手がぐいっと引き起こした。ブラッド・レバードだ。牙の生えた口から、有無を言わせぬ指示が発せられる。

「クロウ、レインたちと遠隔攻撃を」

「えっ……だ、大丈夫です、僕まだ戦え……」

しかし、反駁も新たな声に遮られた。

「下がって、狼さん。すぐにまた呼びますから」

楓子にまでそう言われれば、もう抗弁はできない。ここで駄々をこねても、皆を危険に晒すだけだ。

「……すみません!」

それだけ叫び、気遣うような視線を向けてくる黒雪姫にどうにか顔り返して、ハルユキは翼を広げた。後方五十メートル地点に陣を張るニコと露のころまで、一気に飛ぶ。

トレーラーの脇に着地した瞬間、両脚から力が抜け、がくりと膝を突いてしまった。消耗は思っていた以上に深いらしい。

——くそっ、こんな大切な時に……!

必死に立とうとするハルユキの肩を、誰の小さな手が包んだ。

「クーさん、少し休んで下さい。それも大切な仕事なのです」

すぐに、スピーカー越しのニコの声も降ってくる。

「そうぞクロウ! お前はもう立派な働きをしたんだ、あとはあたしに任せとけて!」

二人の優しさがとても嬉しく、しかし同じくらい悔しくて、ハルユキは両手をあおりつけた力の振り締めた。

長時間の戦闘が苦手なことは、うっすらと自覚していた。日頃の通常対戦でも、戦闘時間が二十分を超えてくるとわずかだが勝率が落ちる。ここぞという一瞬に感覚を超加速させるのは得意なのだが、その逆、長い時間一定の集中力を要求されるようなシチュエーションではな

なか力を発揮できない。それは現実世界でも同じだ。日々の宿題をこなすくらいならなんとかなるが、自発的に長時間勉強しようと思っても、二、三時間も経つとぼうつとしてしまつて、数字やアルファベットの意味が頭に入つてこなくなる。

もうそんなことじゃダメだ、と解つてはいるのだ。ハルユキがこつそり胸に秘めている、これまでの人生で最大級の目標——再来年、黒雪姫と同じ高校に進学するというそれを達成するには、恐らく現在の学力ではお話にならない。自主的に猛勉強して、二年生のうちから成績を上げていかなければならないのだが、どうしても脳のエネルギーが持続してくれない。

「焦つたら、だめなのです」

不意に、まるでハルユキの思考を読んだかのような言葉がそと投げかけられた。

「小さなことを、ひとつ、ひとつ、またひとつ。そうやって積み重ねれば、いつか届くのです。どんな遠いものにも、きっと。クーさんは、もうそれをこ存しのはずなのです」

顔を上げたハルユキの前で、小柄な巫女は長弓を引いた。一切の力みも気負いもない滑らかな動作。何千、何万回の繰り返しに裏付けされた、洗練の極地。

技名発声とともに、火矢が放たれる。赤い流れ星となって夕空を飛翔し、音もなく分裂。炎の流星雨が、恐るべき正確さで巨大なエネミーに降り注ぐ。

小さなことを、ひとつずつ。

「……そっか。疲れたら、休めばいいんだ」



ハルユキは、小声で呟いた。握っていた拳を緩め、全身から力を抜く。すると不思議に、萎えていた両脚の感覚も甦る。

「ボウの小屋を掃除した時も、そうだった。最初から全部片付けようとしなくて、できることを考えて、少しずつ、少しずつ進めたらいつの間にか終わってたんだけ」

「話は何も言わなかったが、横顔に仄かな笑みが浮かんだ、気がした。」

ハルユキはゆっくりと立ち上がり、大きく深呼吸した。疲労はまだ残っている。でも、それは当たり前だ。メタトロンのレーザーを弾くために、限界まで集中力を振り絞ったのだから。今は、この場所でも、できることをするのだ。

右手の指を伸ばし、銀色の過剰光を発生させる。急がず、ゆっくりと育てる。充分に大きくなったなら、腕を前に伸ばす。じつくり、じつくり引き絞る。

さて、どこを狙おう。

ハルユキに使える唯一の遠距離攻撃技、(光線投射銃)は命中精度が高くない。しかし、メタトロンは巨大だ。翼や胴体、頭を狙うことくらいはできるはず。

冷静に、エネミーの全身を観察する。仮に弱点があるとすれば、丸い頭の天辺から伸びている妙な形のツノだが、さすがに小さすぎる。次に目立つのは、頭の上部に嵌っている王冠か。よくよく見れば、メタトロンの全身で、あの冠だけが白ではなく銀色をしている。

——狙ってみるか。

じつと王冠を見据え、力まないよう意識しながら、右腕を肩の手前まで引いてくる。空中には銀色の槍が生成され、かすかに震えている。

威力を求めるなら、ここから技名発声を行い、それをトリガーにイメージーションを増幅させる。しかし今は、威力よりも精度だ。大声を出せばそれだけで狙いが狂うだろう。口を閉じたまま、槍の根本を、左手で優しく切り離す。

心意の槍は、銀色の光を引いて飛んだ。これまでは螺旋状の軌道を描いてしまっていたが、今だけはほぼ一直線に飛び、翼攻撃のために静止していたメタトロンの頭部をぐるりと囲む王冠に、音もなく吸い込まれる。

さいいいん！ という澄んだ金属音が、ハルユキのところにまで届いた。同時に、エネミーの巨体が、一瞬だが硬直したように見えた。

そして、また、あの声が聞こえた。

そう。それでいいのです。同じ場所を狙い続けなさい。

——なんだ、まだいたのか。なんで黙ってたんだ？

おまえが聞かなかったのです。今後はよく耳を傾け、私の言うとおりにしなさい。

どうしてこうも偉そうなんだ、と思わずにいられない。同じ「のです」でも、誰のそれとは全然違う。いったい誰が、と改めて疑問に感じるが、今はメタトロンから眼を離すべき時ではないと思えた。少なくとも、アドバイスしてくれるからには敵ではないはずだ。

代わりにハルユキは、誰とニコに向けて言った。

「レイン、メイさん、メタトロンのおでこに嵌つてる冠つばいヤツが弱点みたいだ。あそこを集中的に狙おう」

「おでこってどこだよ！ あとなんであたしはさん付けじゃねーんだよ！」

と喚きながらも、ニコはトレーラーの主砲を少し左に旋回させた。誰も、長弓の照準を下げ

る。

「タイミングを合わせよう。カウントする」

もう一度右手に光を宿しながら、ハルユキは続けて言った。

「四、三、二、一、ゼロ！」

二門のレーザー砲からルビー色の輝線が走り、長弓から大型の火矢が射掛けられ、ハルユキの右手から光の槍が放たれた。

三種の遠距離技は、少しずつ近づきながら五十メートルの空間を飛翔し、メタトロンの手前でひとつに融合すると銀色の冠に命中した。



どうしてこうも偉そうなんだ、と思わずにいられない。同じ「のです」でも、誰のそれとは全然違う。いったい誰が、と改めて疑問に感じるが、今はメタトロンから眼を離すべき時ではないと思えた。少なくとも、アドバイスしてくれるからには敵ではないはずだ。

代わりにハルユキは、誰とニコに向けて言った。

「レイン、メイさん、メタトロンのおでこに嵌ってる冠っばいヤツが弱点みたいだ。あそこを集中的に狙おう」

「おでこってどこだよ！ あとなんだあたしはさん付けじゃねーんだよ！」

と喚きながらも、ニコはトレーラーの主砲を少し左に旋回させた。誰も、長弓の照準を下げる。

「タイミングを合わせよう。カウントする」

もう一度右手に光を宿しながら、ハルユキは続けて言った。

「四、三、二、一、ゼロ！」

二門のレーザー砲からルビー色の輝線が送り、長弓から大型の火矢が射掛けられ、ハルユキの右手から光の楯が放たれた。

三種の遠距離技は、少しずつ近づきながら五十メートルの空間を飛翔し、メタトロンの手前でひとつに融合すると銀色の冠に命中した。



先刻の数十倍のポリウムで、甲高い金属音が鳴り響いた。前線の黒雪姫たちが、驚いたように飛び退る。エネミーの巨体が苦しげに振れ、翼が小刻みに開閉される。

「お、おお……効いてんな」

「なのです！」

二人の言葉に頷きながら、ハルユキは考えた。

遠距離攻撃でこれほど効果があるなら、至近距離から直接攻撃すれば冠に更なるダメージを与えられるはずだ。無意識のうちに右足を一步踏み出してしまいが、そこで止める。パドさんや楓子に後方支援を命じられている今、勝手に前線に戻るわけにはいかない……。

「行ってこいよ」

不意に、苦笑混じりの声でニコが言った。

「え、でも……」

「そんだけ落ち着いてりゃ大丈夫だろ。それともアレか、王のあたしの命令に従えねーってのか？」

「そ、そんなことないよ！……解った、行ってくる」

腹を決め、ハルユキは背中を翼を広げた。

「……ありがとう、レイン、メイさん！」

叫び、力の戻った右腕で思い切り地面を蹴る。ほぼフルチャージされている必殺技グーリジを惜しみなく消費し、狂乱状態のメタトロム目掛けて突進する。

全力で飛行しながらも、心に宿る不思議な静けさは消えなかった。いつもなら視界が目標の一点だけに引き寄せられてしまうが、メタトロンの全身はもちろん、その周囲に展開する前衛チーム、少し引いている中衛チーム、遠景の半壊したミッドタウン・タワーまでがくつきりと見える。

エネミーは、荒ぶるままに背中の中翼を広げた。羽根カッター攻撃。鋭利な薄膜が青く輝き、地上の黒雪姫たちも回避態勢を取る。

上空から見ると、四枚の翼はX字に展開しているが、真後ろにだけ小さな隙間が空いている。あそこをすり抜けて頭部に取り付けそう。右旋回から鋭く左に切り返し、突入コースを慎重に見定める。

直後、じゃっ！と空気を鳴らして四十八枚の羽根が解き放たれる。次々に地面を抉る刃を、四人の前衛たちが懸命に掻き潜るなか、ハルユキはメタトロンの背中側から一気に突っ込んだ。翼の間を抜け、丸い頭部に肉薄する。

直径七メートルの球体は、間近で見ると途轍もなく巨大だった。表面を螺旋状のラインが走り、正面だけでなく真後ろにも焦げ穴が空いている。その上側にはブラチナシルバーの王冠が載り、天辺からは長さ二メートルほどのツノが突き出す。

ハルユキは迷わず王冠に取り付くと、翼の全推力を載せた右ストレートパンチを撃ち込んだ。

まるで大型の鎧を叩いたかのような大音響が轟き渡り、夕焼け色の大気を同心円状に震わせる。メタトロンの巨体が激しく振れ、神経系が混乱したかの如く、十数本の脚と四枚の翼をでたらめに暴れさせる。

ハルユキは振り離されるまいと両手で王冠をしつかり掴みながら、地面の黒雪姫たちに向けて叫んだ。

「僕が冠を攻撃しますから、みんなもメタトロンの行動を狂乱してる間に本体を攻撃して！」

勝手に戻ってきたことを怒られるかと思ったが、そんなことはなかった。即座に「K！」とバドさんが応じ、皆の返事も続く。

むやみやたらと王冠を殴りつけたい衝動を、ハルユキはぐっと抑えてタイミングを計った。弱点を攻めることでメタトロンの行動を中断させられるなら、羽根カッターや巻き貝乱射のモーションに入った瞬間を狙うべきだ。冠に觸れたまま、エネミーの動きに集中する。

間近で見ると、ブラチナの王冠は不思議なデザインをしていた。Cの字型のパーツが幾つも重なっているのだが、尖った二つの端が外ではなく内側を向いているのだ。おかげで持ち手のようになつて握りやすいが、鋭い尖端がメタトロンの白い装甲板に食い込んでいて、痛くないのだからかと気になつてしまう。

そんなことを考えながらも、意識の八割はきちんとエネミーの全身を捉えていて、攻撃モーションを見逃すことはなかった。胴体を構成する直径二メートル近いリングが、高速で回転し

始める。リングとリングの間にある数センチの空隙に紫のスパークが走る。全周放電攻撃だ。セイリュウの《サンダーブラスト》と違って水平に広がるので、ブレモーションを見た瞬間に猛ダッシュして距離を取らないと回避できない。

しかし前衛の四人は、ハルユキの言葉を信じて近距離に踏みとどまっている。期待を裏切るわけにはいかない。ハルユキは王冠から手を離すとホバリングし、無意識のうちに過剰光を宿らせた右手をC形の環と環の接合部に突き入れた。

耳をつんざくような衝撃音。ブラチナ色の表面に細かいひび割れが走り、メタトロンの無音の咆哮とともに体をうねらせる。発射直前だった雷が暴発し、空洞の体腔を何往復も貫く。

「う……おっ！」

という氣勢は、黒雪姫のものだ。高々とジャンプし、

「デス・バイ・ビアーシング」!!

右手から放った必殺技で、メタトロンの脚を一本粉砕する。他の三人もこそとばかりに全力攻撃を繰り出し、後方からはレーザーと火矢が胴体を精密狙撃して、エネミーの体力ゲージ二段目を大きく削り取る。

普段なら、よしっ、とガッツポーズの一つも決めるところだが、心を満たす不思議な感覚が去つてしまいうので、ハルユキはすぐに次の攻撃へと備えた。

視野は広く保たれているが、騒動になつていいるのとは違う。いままでは一瞬、一瞬に注ぎ込

むだだけだった集中力を、自分の意志でコントロールしている感じ。アタセルを全開にするのはここぞという時だけでいい。それまでは静かに構え、全体を見て、スムーズに動く。

ダメージから立ち直ったメタトロンが、脚と尻尾で通常攻撃を行う。黒雪姫たちが、それを回避しつつ小刻みな反撃を入れる。そんな攻防が十秒ほど続いたところで、エネミーはぐっと上体を持ち上げる。ハルユキのすぐ目の前にある頭部に、無数の穴が開く。

回転しながらせり出してくる螺旋弾を、この距離で全身に浴びれば即死は免れない。しかしハルユキは慌てず、メタトロンが動きを止めた一瞬を狙って、心意強化された右の貫手を放った。前同と同じ所に命中し、王冠のひびが拡大する。苦悶するエネミーの頭部から螺旋弾が散発的に発射されるが、数も威力もないので両腕で防御できる。

戦闘は一定のペースで続き、メタトロンの体力ゲージは少しずつ、着実に減っていった。二回目、三段目のゲージが消え、四段目に突入したところで攻撃パターンが増えたが、ハルユキは慌てることなく役目を果たし続けた。王冠も徐々に破壊されていき、そして戦闘開始から約四十五分後――。

まず、最初に砕け散ったのは、メタトロンの頭部を飾っていたプラチナの冠だった。

ハルユキの貫手がC形リングの一つを完全に粉砕し、その途端、全てのリングが分離してばらばらと地上に落ちた。

これまでのパターンからして、最後の大暴れが始まるとハルユキは予想したのだが、意外に

もエネミーは完全に動きを止めた。黒雪姫も一瞬迷ったようだったが、すぐに全力攻撃の指示が飛ぶ。チユリとあきらも参加して、色とりどりのライトエフェクトが巨体を包み込む。

大技が炸裂するたびに、真つ赤に染まった四段目のゲージが目に見えて削り取られ、最後は黒雪姫の心意技（奪命撃）に腹から背中までを撃ち抜かれて、ついに神獣級エネミー（大天使メタトロン）は轟音とともに地に伏した。

全身を構成する白いブレイトがゆっくりと解け、露から光の粒子へと変わっていく。球形の頭部もばらりと分解し、内部から大量の光が放出される。

視界左側に大量のポイント加算メッセージが流れるのを確認しながら、ハルユキは地上へと降り立った。途端、

「やったね、クロウ！」

後ろからチユリが飛びついてきて、右手でヘルメットをぐりぐりと撫で回した。ここであつたに集中力の在庫が切れ、ハルユキはがくつと座り込みそうになった。

「おっと」と

チユリがすかさず体を支え、肩を貸して立たせてくれる。「あ……あんかと」と答え、顔を上げると、黒雪姫やタカム、あきら、楓子、バドさんの笑顔——もちろん心配はただが——があつた。揃って「が……」と言いかけ、顔を見合わせてから、チームリーダーに譲る。

こほんと咳払いして、黒雪姫は改めて言った。

「がんばったな、クロウ。見事な戦い振りだった。またひとつ階段を上ったな」

「い、いえ、そんな……」

首を縮めると、すぐさまチユリに背中をどやされる。

「こんな時くらい、胸張るときなさいよ！」

「わ、解ったから背中ぐりぐりしないで」

大きく息を吸い、肩を借りっぱなしながらも背筋を伸ばすと、黒雪姫と楓子の間に後衛二人の姿が見えた。ニコのトレーラーの上に乗った楓子が、両手をぶんぶん振っている。

右手を上げて応えようとしたハルユキは、ふと端の様子がおかしいことに気付いた。勝利を祝福しているというよりも、何かに注意喚起しているような。よくよく見れば、トレーラーもヘッドライトを盛んにパッシングしている。

なんだろう、と思ったハルユキは、何気なく上空を振り仰いだ。

そこには、奇妙なモノが、音もなく浮遊していた。

下と上が突つた白い紡錘形。細長い帯が斜めに巻き付き、中身を隠している。全長は二メートルほどだろうか。表面に描かれた複雑な模様が、夕陽に美しく煌めく。

どこかで見たような……と細めた眼を、ハルユキはいつばいに見開いた。

あれは、メタトロンのツノだ。丸い頭から伸びていた用途不明の突起が、エネミーが消滅した後もそのままや中に残っているのだ。

ハルユキに少し遅れて空に浮くツノを見た黒雪姫が、さすがに唖然とした声を出した。

「と、どういふことだ……メタトロンは、確かに倒したはず……」

「ポイント加算を確認したの。倒したのは間違いない」

そう続けたあきらの声も、當より少し張り詰めている。

その時。

頭の中で、またしても、戦闘中に何度か聞こえた謎の声が響いた。

おまえたちが破壊したのは、私の半身に過ぎません。

ふわり、とツノを覆う帯が開いた。いや、帯ではない。長く、しなやかな、四枚の翼。

内部から出現したのは、華麗な鎧と衣に身を包む、ひとりの女性だった。全身、紫みひとつない純白。髪も、肌も、衣服も雪のようなマットホワイトで、半分は夕陽のオレンジ、半分は宵闇の紫に彩られている。

両眼を閉じたままなのに、女性の美貌は人間離れしていた。生命をまったく感じさせない、しかし単なるオブジェクトでもない、異様な存在感。

ゆらり、としなやかな両腕が広げられた。白い腋毛に縁取られた腋がほんの少しだけ開き、金色の膚が地上の七人を捉えた。

瞬間、凄絶なまでのブレッシャーが全身にのし掛かり、ハルユキは膝を折りそうになった。必死に踏ん張るが、脚の震えを止められない。チユリが喉の奥で小さな悲鳴を上げ、照雪姫たちも全身を硬直させている。この圧倒的なオーラは、間違いない神獣級エネミー……いや、超獣級エネミーの域にまで迫るものだ。つまり、

あの女性こそが、大天使メタトロンの、本体なのだ。

衝撃と戦慄のあまり途切れそうになる意識の中で、ハルユキは懸命に考えた。

しかし、だとすれば、明らかに理屈に合わない。

巨大メタトロンとの戦闘中、ハルユキに何度も助言してくれた声の主が、メタトロンの本体——これはどういうことなのか。あの女性型エネミーは、自分の弱点をハルユキに伝え、自分を倒させたことになりはしないか。

「ど……どう、して……」

疑念が恐怖を上回り、ハルユキはそんな声を発した。すると、再び声が聞こえた。

小さき鳥よ。おまえは、私を縛る忌まわしき類木の破壊を成し遂げました。

戦士たちを焼き尽くす定めにある私ですが、今は見逃しましょう。

おまえたちが、戦いを望むのなら別ですが。





「の、のの……望みません!」  
無我夢中でハルユキが叫ぶと、純白の大天使は再び顔を閉じ、塵揚に頷いた。

では、私はしばし下界を道過したのち、我が城に戻ります。  
いずれまた会いましょう、小さき者たちよ。

四枚の翼で順に体を包み、再び繭のような紡錘形に戻ったメタトロンは、いきなり白い炎の柱に変じると、そのまま燃え尽きるように姿を消した。

体を押し潰さんばかりのプレッシャーが薄れ、やがて消滅すると、ハルユキはその場にへなへたと崩れ落ちてしまった。今度はチュリも体を支えてはくられず、一緒にべたんと座り込む。どうやら脅威は去ったようだが、相変わらず何かなんだか解らないままで、ハルユキは首を左右に捻り続けた。

短い沈黙を破ったのは、空を見上げたままのタクムだった。

「……つまり、こういうことでしょうか……」

前向きをしてから、あまり自信のなさそうな声で続ける。

「メタトロンがミッドタウン・タワーを守っていたのは、何者かに……恐らくは加速研究会の一員にタイムされたからであって、本人の意志には反する状態だった。そして、メタトロンの

頭に嵌った冠は、さっきの女性が言った《頭木》……つまりタイム用の道具が何かで、それをクロウが壊したことで自由になれた……」

「あつ……ああ、なるほど……」

激戦の痕跡が残る地面に座り込んだまま、ハルユキは声を上げた。

「そういえば、冠だけ白じゃなくて銀色だったもんな……」

同時に、メタトロン本体が、テレパシー的な何かでハルユキに冠を狙うよう命じたことにも説明がつく。思わず、そうならそうと最初から言ってくれよな! と空に向かって念じてしま

うが、もちろん答える声はなかった。

タクムの説明に、黒雲姫も納得したように頷くと、隣を見ながら言った。

「何ともはや……。レイカー、カレン、我々がかつて《コントラリィ・カセドラル》でメタト

ロンと戦った時は、あんな本体は出てこなかったよな?」

「出てこなかったわね。つまり、わたしたちが倒したつもりでいたのは……」

「メタトロンの、下半分だけだったということなの」

三人の会話に、ハルユキと並んでへたり込んだままのチュリが呟いた。

「じゃあ、もし今回、クロウがタイムの冠を壊すより先にでつかい方を倒してたら……次は、あ

の女のヒトと戦わなきゃいけなかったってコト……?」

「ン、可能性はあるな……」

黒のレギオンの五人が黙り込む中、バドさんがハルユキを見て言った。

「G」

その言葉に、ようやく戦いが終わった実感が湧いてきて、大きく息を吐く。よいしょと立ち上がり、チュリにも手を貸してから、ハルユキは五十メートル離れたところで待機するニコと顔に眼をやった。

トレラーの主砲はまっすぐこちらを向き、誰も長弓を構えたままだ。二人に向けて手を振り、大声で叫ぶ。

「レイン、メイさん、もう大丈夫です！ こっちに来てください！」

「ならとつとそう言えよな！」

スビーカーで増幅されたニコの叫び声が風に乘って届き、「こもったも」し首を縮める。

誰か屋根から飛び降りると、武装トレラーは重々しい音を放つて分解し、空気に溶けて消えた。コクビット部分から小さなアバターが飛び降り、長々と伸びをする。

赤系の二人はがっちり握手を交わすと、七人のほうへ向き直った。さすがに消耗しているらしく足取りはやや不安定だが、繋いだままの手で互いを支えながら歩き続ける。その様子に、ハルユキは胸に温かいものが広がるのを感じた。

アタ・カレント救出作戦のために帝城目指して移動している時、誰はハルユキに訊ねた。憶えていらっしやいますか、ターさん、と。その質問の目的語は、ハルユキがかつて帝城の中

で誰に言った言葉だ。いつか、紹介したい友達がいるんだ、と。その友達こそ、いま誰の隣を歩いているニコだ。

もうその必要はなさそうだけれど、でも、作戦が全部終わったらちゃんと紹介しよう。もちろん、裏庭のホウにも。ニコはきつと喜ぶだろう。それで、みんなで、生徒会の出し物を観るんだ……。

そんなことを考えながら見守るハルユキの視線の先で、誰とニコが、草原に長々と伸びるミッドタウン・タワーの影を踏んだ。

きらり。

何かが、光った。

並んで歩く二人のずつと後方にある、低い建物の屋上。夕陽の反射ではない。毒々しいまでに鮮やかな、紫の閃光。

あの光を、僕は、見たことが。

たったそれだけを考えることしか、ハルユキにはできなかった。

次の瞬間、アードー・メイデンの胸を、四本の光線が音もなく貫いた。繋いでいた手が外れ、もんどり打って倒れる小柄な巫女に、ニコが本能的な動作でもう一度右手を伸ばした。

しかし、その手が届くことはなかった。足許に広がる影から真っ黒な板が二枚飛び出し、ニコを挟み込んだのだ。小さなアバターの

全身から、オレンジ色の火花が飛び散る。

ここでようやく、ハルユキの喉から、悲鳴混じりの叫び声が進んでいく。

「あ……ああああ——ッ!!」

今後の打ち合わせを始めようとしていた黒雪姫たちが、さっと振り向き、彼方の状況を確認する。

真ッ先に反応したのはブラッド・レバードだった。「グアウツ!!」と怒りの咆哮を放つや、思い切り跳躍する。空中でビースト・モードが発動し、深紅の豹となって草原に降り立つと、凄まじいスピードで赤の王の元へと疾駆する。

だが、彼方から再び紫のレーザーが放たれ、レバードの足許に突き刺さった。今度は一本ずつ、時間差をつけて発射される光線を、豹はやむなく左右に回避する。その間に、ニコを挟み込む漆黒の板はどんどん幅を狭めていく。赤の王は懸命に堪えているようだが、疲労の激しさゆえか圧力に抗いきれない。

「走れッ!!」

黒雪姫が叫び、残る五人も同時に地面を蹴った。

ハルユキは、三歩目でジャンプすると翼を広げ、一気に加速した。拘束されるニコまで、あと四十……三十メートル……。

しかし、その時、とうとう二枚の板が隙間なく閉じた。死亡エフェクトは発生しなかった。

ニコは板の中に囚われてしまったのだ。まったく光を反射しないマットブラックの直方体は、地面に伸びる影の中へと沈み込んでいく。

「ブラック……パイプ——ッ!!」

ハルユキは、全速で飛行しながら、憎き仇敵の名を叫んだ。

間違いない。あの黒い板は、加速研究会副会長を名乗るブラック・パイプが変身した姿だ。

そして、紫のレーザーを発射しているのは、「四眼の分析者」アルゴン・アレイ。

させない。ニコを獲ったりなんか、絶対にさせない。

砕けよとばかりに歯を食い縛り、ハルユキは飛んだ。

彼方のビルで、紫の光が煌めいた。襲い来るレーザーを、ハルユキは左腕の導光ロッドで受け、弾いた。続けて右手を振りかぶる。

二十メートル先で、直方体はもう七割以上も影に没している。

「(光線……槍)!!」

右手から放たれた銀光の長槍は、黒い板の側面を深々と抉った。だが、沈降は止まらない。

どぶん、と黒い波紋を残し、板が影に沈んだのと、ハルユキの右手がその場所に突き刺さったのは同時だった。飛行の勢いそのままに、右手が肘近くまで地面に埋まる。

だが、指先には、何も触れない。

「グアウツ!!」

追いついてきたレバードが、吼え猛りながら鉤爪で地面を抉った。しかし、仮想の土くれが掘り返されるばかりで、黒い板は出てこない。

ブラック・バイスは、影の中を自在に移動する力を持っている。いちど沈んでしまった以上、外から見つけるのは……

——いや、まだだ!!

ハルユキは、右手を地面から引き抜くと立ち上がった。すぐ傍に倒れている認識を助け起こし、駆け寄ってきた楓子に手渡す。

諦めない。絶対に諦めたりしない。大きく息を吸い込み、憤怒のあまり赤熱する思考のコントロールをどうにか取り戻す。

「バドさんは、アルゴンを追って下さい! 誰か、最寄りのポータルから離脱して、ニコのケープルを抜いて!」

一呼吸で指示すると、ハルユキは地面を蹴った。高度三十メートルまで急上昇し、ぐるりと周囲を見回す。

黄昏ステージの建物は柱ばかりで隙間が多い。ブラック・バイス専用の移動経路である影もどこかでは途切れているはずだ。そしてバイスは、ミッドタウン・タワーの根本ではなく先鋒に向かったはず。なぜならタワーは独立した建物で、一階部分は他の建物の影と接していないからだ。

タワーの影を眼で追うと、先端部分は公園の外に出て、アルゴンがいたあたりの建物の影と融合している。あの先のどこかで、バイスはもう一度姿を現す。その瞬間を、見逃してはならない。

視野を広く。一点ではなく、全体に集中する。建物の数は膨大で、影の経路は複雑に連なっているが、それら全てを同時に見るのだ。

レバードが、アルゴン・アレイを追って公園を北に走っていく。

向かう先、公園から少し離れた狭い路地で、紫の反射光がちかちかと閃く。あれがアルゴンだろう。

バイスがアルゴンと合流するとすれば……更にその先。ひとかたまりの神殿群が途切れる、あのあたり——。

そして、ハルユキは見た。大きな交差点の中心まで伸びた影の中から、漆黒の直方体がぬつと浮かび上がるのを。

——ニコ!!

僕は、約束したんだ! 君を守るって! 君がピンチになったら、いつでも飛んでいくって!!

アバターを中心に爆発する感情を、エネルギーに変える。ありったけの光のイメージを背中（せなか）の翼（はね）にかき集め、叫ぶ。

「（光速翼）!!」

翼から白銀の過剰光が迸り、デニエルアバターは猛然と飛翔する。

彼方の交差点では、黒い直方体が人型のシルエットに変形し、交差点を渡り始める。その腕には、意識を失っているらしい赤いアバターが抱かれている。

交差点の先には、次の影がある。あそこに逃げ込まれたら、もう追い切れない。もつと。もつと。もつと早く。

感覚の超加速が訪れ、世界の色が変わる。引き延ばされた時間が、粘液質の壁となって行く手を遮る。

もつと。もつと……………。

それほどまでに、求めるのならば。

また、あの声が——いずこへか去ったはずの、大天使メタトロンの声が聞こえた。

いつとき、力を貸しましょう。

さあ、呼ぶのです。私の名を。

視界左上に、システムカラーの文字列が閃いた。

「YOU GOT AN ENHANCED ARMAMENT……（METATRON WINGS）」。

加速された意識の中で、ハルユキは叫んだ。

「着装ッ！（メタトロン・ウイング）——ッ!!」

天から純白の光が降り注ぎ、ハルユキの背中を撃った。

本来の金属翼の上部に、更にもう一对の翼が生成される。何よりも白く、刃のように薄く、しかし恐るべき力を秘めた、天使の翼。

すでに心意加速しているシルバー・クロウの全身を、目も眩むような推力が叩いた。前に伸ばした両手の指先が、立ち塞がる時間の壁をも貫いた。

「と……………べえええええええ——ッ!!」

四枚の翼を輝かせ、一条の光線となつて、ハルユキは飛んだ。

（続く）



## あとがき

アクセル・ワールド14巻『激光の大使』をお読み下さり、ありがとうございます。

わたくし川原は、前13巻のあとがきで、「メタロン攻略編は四冊で終わらせる、五冊にはしません」とお約束しました。すでに本編を読了頂いた方はご承知のことと思いますが、今巻では、神獣級エネミー「大使メタロン」そのものは攻略されたものの、このあとがきのページ前にはばつちり「続く」の二文字が……。はたして、メタロン攻略編は終わったと言えるのか否か！ その判断は後世の歴史家に任せたい……いえみません、終わってませんねどう考えても。セイリユウとメタロンのダブルヘッダーは、ハルキたちだけでなく私にとっても厳しいミッションでした……じゅ、15巻では必ず……たぶん……。

さて、そんなわけで今巻は、AW史上初めて「全編デュエルアバター状態」な内容となっております（厳密には途中で一瞬だけバーストアウトしていますが）。第一節が現実時間で午後十二時二十分、最終ページで恐らく十二時五十七秒くらいなので、なんと文庫一冊かけて現実世界では一分も経っていないという……。我ながらちよつとどうなのかと思わなくもないですが、もしかしたら全電撃文庫作品の中でも最短記録かもしれないな！ と思うと少し嬉しく……いえすみません、反省します。次巻もなるべく早くお届けできるよう頑張りますので、メタロン攻略編改のISSキット編に、あと少しだけお付き合いのほどよろしくお願

いたします！

話は変わりますが、三月末から四月始めにかけて、アメリカはワシントン州シアトルで開催されたアニメコンベンション「サクラコン」に招待して頂き、生まれて初めて太平洋を横断してきました。感じたことは色々あり過ぎてとてもこの紙幅では書ききれませんが、海の向こうのアメリカで、かくも多くの人たちがかくも情熱的に日本のアニメやマンガを愛して下さっていることはとても嬉しい驚きでした。残念ながら、ライトノベルは北米ではほとんど翻訳出版されていないのですが（もちろんアクセルもSAOも）、いつかは原作小説も楽しんで頂けるようになるというなと強く思った次第です。この場を借りて、サクラコンの主催者様と、現地でアテンドして下さいましたアニプレックス・オブ・アメリカの皆様、日本から同行して下さいました電撃文庫編集部の方々に深くお礼申し上げます。

最後になりましたが、今巻が登場人物の多さゆえに難航し（九人パーティーはデカ過ぎでした……）、アクセル史上最凶レベルでご迷惑をおかけしてしまったイラストのHIM Aさん、担当の三木さんに深く感謝いたします。そしてここまでお付き合い下さいました皆様にも、アクセル史上最大の感謝を！ 次こそ一区切りさせます！

二〇一三年四月某日

川原 礫

「これは、ゲームであっても

SAO」史上最も支持を得た大人気エピソード! 壮大なるヴァー

遊びではない」

—天才プログラマー・茅場晶彦

チャル・ワールド・スペクタクル<アリシゼーション>編、第五幕!!

「咲け——青薔薇!!」

(公会館)の奥地である白き塔(セントラル・カステラル)。  
その地下牢に繋がれたキリトとユージォが、キリトの機転でとうとう脱出を果たした。  
隔絶された大図書館の最上層(カーデナル)の助けを得、  
ユージォは整合騎士となつてしまったアリス(本当の姿)に襲撃のため、  
キリトはアンダーワールドの消息を回避するため、  
最高武官(アドミニストレータ)の待つカステラル最上層を目指す。  
見舞の整合騎士シマセルとリネル、  
(道館司)の整合騎士グロノルハート  
そして(天守府)の整合騎士、騎士長シヴァと対峙した舞姫を助け、  
ついに(金庫室)の整合騎士マリと対面したキリトとユージォ。  
しかしキリトとアリスの(武蔵完全支配)が暴走して塔の外壁を破壊。  
二人はカステラルの外へと投げ出されてしまう。  
キリトと離れはねたリネル。シォは拒絶の命令を頂し、単身塔を上り続ける。  
そんな彼の前に現れたのは、過去にして最強の整合騎士、ヘルクーリー・シンセシス・ワン。  
千夜子の塔から現れた近衛の力と光を前に、ユージォは青薔薇の剣を抜く。  
一瞬、両者が互いに切り立つカステラルの外壁をどうにかよじ登り、  
塔の内部に突入しているであろう拒絶との合流を目指していた、  
しかしそんな彼の前に現れたのは、整合騎士の群に身を包み、  
輝く光を浴びたユージォだった——!

ウェブ上で最も支持を得た超人気エピソード!  
キリト&ユージォ VS 整合騎士>>>  
SAO の集大成 アリシゼーション 編、第五幕!

# ソードアート・オンライン

イラスト abec

最新第13巻は、電撃文庫にて  
2013年8月10日発売——!!!

特報!!!

「アクセル・ワールド15」は  
秋頃発売予定!!!

電撃コミックス ソードアート・オンライン アインクラッド 1/2巻 (作画: 中村野子)  
電撃コミックス ソードアート・オンライン フェアリーダンス 1巻 (作画: 宮月野)  
電撃コミックスEX ソードアート・オンライン 1巻 (作画: 宮月野)  
原作: 川原 礪 キャラクターデザイン: abec  
ソードアート・オンライン フェアリーダンス 1巻 (作画: 宮月野) (1/2巻) (電撃文庫 MAGAZINE) 10月号10日に同時発売

さらに2つのコミカライズの発表が!!!  
ソードアート・オンライン ガールズ・オブス (作画: 堀原 博) 電撃文庫 MAGAZINE 11月25日号にて同時刊  
ソードアート・オンライン プロクレスツ (作画: 比村智子) 電撃文庫 MAGAZINE 12月5日号にて同時刊

発売中!!